

ユーザガイド

Novell. PlateSpin. Portability Suite

8.1

2009年6月23日

www.novell.com



保証と著作権

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、この文書の内容または使用について、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。また文書の商品性、および特定の目的への適合性については、明示と黙示を問わず一切保証しないものとします。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、本書の内容を改訂または変更する権利を常に留保します。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、このような改訂または変更を個人または事業体に通知する義務を負いません。

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、すべてのノベル製ソフトウェアについて、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。またノベル製ソフトウェアの商品性、および特定の目的への適合性については、明示と黙示を問わず一切保証しないものとします。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、ノベル製ソフトウェアの内容を変更する権利を常に留保します。

本契約の締結に基づいて提供されるすべての製品または技術情報には、米国の輸出管理規定およびその他の国の貿易関連法規が適用されます。お客様は、すべての輸出規制を遵守して、製品の輸出、再輸出、または輸入に必要なすべての許可または等級を取得するものとします。お客様は、現在の米国の輸出除外リストに掲載されている企業、および米国の輸出管理規定で指定された輸出禁止国またはテロリスト国に本製品を輸出または再輸出しないものとします。お客様は、取引対象製品を、禁止されている核兵器、ミサイル、または生物化学兵器を最終目的として使用しないものとします。ノベル製ソフトウェアの輸出に関する詳細については、「[Novell International Trade Services \(http://www.novell.com/info/exports/\)](http://www.novell.com/info/exports/)」の Web ページを参照してください。弊社は、お客様が必要な輸出承認を取得しなかったことに対し如何なる責任も負わないものとします。

Copyright © 2008 - 2009 Novell, Inc. All rights reserved. 本書の一部または全体を、書面による同意なく、複製、写真複写、検索システムへの登録、送信することは、その形態を問わず禁止します。

米国 Novell, Inc., およびノベル株式会社は、本文書に記載されている製品に実装されている技術に関する知的所有権を保有します。これらの知的所有権は、[Novell Legal Patents \(http://www.novell.com/company/legal/patents/\)](http://www.novell.com/company/legal/patents/) の Web ページに記載されている 1 つ以上の米国特許、および米国ならびにその他の国における 1 つ以上の特許または出願中の特許を含む場合があります。

Novell, Inc.
404 Wyman Street, Suite 500
Waltham, MA 02451
U.S.A.
www.novell.com

オンラインマニュアル: Novell 製品の最新のオンラインマニュアルにアクセスするには、[Novell マニュアル Web ページ \(http://www.novell.com/documentation\)](http://www.novell.com/documentation) を参照してください。

Novell の商標

Novell の商標一覧については、「[商標とサービスの一覧 \(http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html\)](http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html)」を参照してください。

サードパーティ資料

サードパーティの商標は、それぞれの所有者に帰属します。

目次

このガイドについて	9
1 Portability Suite の機能の概要	11
1.1 ワークロードの移植容易性および保護について	11
1.1.1 Portability Suite 用のビジネスアプリケーション	12
1.1.2 ワークロード変換タスク	13
1.2 サポートされるソースワークロードおよびターゲットプラットフォーム	13
1.2.1 サポートされるソースのワークロード	14
1.2.2 サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム	16
1.2.3 サポートされるサードパーティ製のイメージフォーマット	17
1.2.4 ハードウェアの互換性	17
1.3 サポートされる転送方法	17
1.3.1 制御の取得のメカニズムを使ったオフライン転送	17
1.3.2 ライブ転送 (ファイルベース)	18
1.3.3 ライブ転送 (VSS ブロックベース)	19
1.3.4 ライブ転送 (ブロックベース)	19
1.3.5 ライブ転送 (VSS ファイルベース)	20
1.3.6 ライブ転送コンポーネントのインストール	20
1.4 ワークロードの継続性	21
1.4.1 転送方法の選択によって影響を受けるソースワークロードの継続性	21
1.4.2 ソースおよびターゲットのワークロードのデフォルトの変換後終了状態	22
1.5 セキュリティとプライバシー	23
1.5.1 ワークロードデータ転送のセキュリティ	23
1.5.2 保存した資格情報のセキュリティ	23
1.5.3 ユーザ権限および認証	24
1.6 パフォーマンスとスケーラビリティ	24
1.6.1 パフォーマンス	24
1.6.2 スケーラビリティ	24
2 Portability Suite の使用開始	25
2.1 Portability Suite Server への接続	25
2.2 Portability Suite Client のユーザインタフェースについて	26
2.2.1 [サーバ] ビュー	27
2.2.2 ジョブビュー	30
2.2.3 タスクペイン	31
2.2.4 ステータスバー	31
2.3 ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出	32
2.3.1 ネットワーク内の Windows コンピュータを含む [サーバ] ビューの事前作成	32
2.3.2 ソースワークロードおよびターゲットの詳細の検出	32
2.3.3 Windows ドメインに含まれるすべてのマシンの検出	34
2.3.4 マシンの詳細の更新	35
2.3.5 ESX ホストへの認証アクセスに使用されるアクセスメカニズムをリセットする	35
2.3.6 ターゲット物理マシンの検出および登録	36
2.3.7 サーバの同期ジョブ用の Windows VM の検出および準備	38
2.4 PlateSpin Analyzer を使用したマシンの分析	39
2.5 デバイスドライバの使用	40
2.6 変換後のカスタムアクションの管理	41
2.7 ジョブの設定、実行、および管理	42
2.7.1 変換ジョブの設定方法の選択	43

2.7.2	変換ジョブ前の検証	46
2.7.3	変換ジョブの保存	47
2.7.4	保存した変換ジョブをジョブビューで開始	47
2.7.5	保存した変換ジョブの開始時刻の変更	47
2.7.6	完了した変換ジョブまたは進行中の変換ジョブのパラメータの表示	47
2.7.7	進行中のジョブのキャンセル	48
2.7.8	ジョブビューにおけるソースワークロードの状態の制御	48
2.7.9	ジョブ診断の実行	48
2.7.10	ジョブレポートの生成	48
2.7.11	Windows スケジュール済みタスクとバッチファイルを使用したジョブの実行	49
3	ピアツーピアのワークロード変換を使用したポータビリティおよび保護	51
3.1	仮想マシンへのワークロードの変換 (P2V、V2V)	51
3.2	物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)	52
3.2.1	成功事例 (X2P)	53
3.3	仮想化による Windows ワークロード保護	53
3.4	ワークロード保護契約の管理	54
3.5	サーバ同期を持つワークロードの同期	55
3.6	X2P により半自動化されたワークロードの仮想化	57
3.6.1	Microsoft Hyper-V へのワークロードの移行	57
3.6.2	SLES 上の Xen Hypervisor へのワークロードの移行	60
3.6.3	Virtual Iron へのワークロードの移行	63
4	柔軟なイメージを使用したポータビリティおよび保護	67
4.1	柔軟なイメージについて	67
4.2	Flexible Image Server の指定	68
4.3	柔軟なイメージへのワークロードのキャプチャ	69
4.4	ローボリュームデータまたは既存のボリュームデータを使用したイメージの作成	71
4.4.1	ローボリュームデータまたは Acronis True Image および Symantec LiveState から抽出されたボリュームデータのインポート	71
4.4.2	柔軟なイメージ作成に関する追加情報	74
4.5	柔軟なイメージの展開	74
4.6	増分イメージング	75
4.6.1	イメージ増分の自動キャプチャ	76
4.6.2	増分の表示	77
4.6.3	イメージとともに展開する増分の選択	77
4.6.4	増分の統合	78
4.6.5	ベースイメージへの増分の適用	79
4.6.6	増分の削除	79
4.7	柔軟なイメージの管理	79
4.7.1	Flexible Image Server 間のイメージの移動	79
4.7.2	イメージ操作の自動化	80
4.7.3	イメージファイルのブラウズおよび抽出	80
5	ワークロードマイグレーションおよび保護ジョブの要点	83
5.1	マイグレーションまたは保護の変換用ライセンスキーの選択	83
5.2	ジョブステータスおよび進行状況の電子メールによる自動通知の設定	84
5.3	転送オプションの指定	85
5.4	ソースおよびターゲットのワークロード終了ステータスの指定	86
5.5	ソースおよびターゲットのワークロード資格情報の指定	86
5.6	ワークロードのネットワーク ID の管理	88
5.6.1	Windows のワークロード ID の管理	88

5.6.2	Linux および Solaris ワークロードのネットワーク ID を管理します。	89
5.7	スケジュールおよび同期	90
5.7.1	繰り返しエディタの使用	90
5.8	変換ネットワークキングの設定	91
5.8.1	制御の取得 (一時) ネットワークの設定	92
5.8.2	ターゲットの変換後ネットワーク	94
5.8.3	TCP/IP および詳細ネットワーク設定	96
5.9	ターゲットの設定 仮想マシン	97
5.9.1	仮想化プラットフォーム特有のオプションおよび VM の詳細な環境設定オプション	98
5.10	オペレーティングシステムのサービスとアプリケーションの処理	102
5.10.1	サービスの起動モードの処理 (Windows ターゲット)	103
5.10.2	ライブ転送中のサービスの処理 (Windows ソースワークロード)	104
5.10.3	変換中に置換のために選択された Windows システムファイルの表示	105
5.10.4	デーモンの実行レベルの処理 (Linux ターゲット)	107
5.10.5	Solaris ターゲット上のサービスの処理	108
5.10.6	仮想化拡張ソフトウェアの処理	108
5.11	ワークロードのストレージメディアとボリュームの処理	109
5.11.1	ストレージレイアウトおよびボリュームの環境設定 (ウィザードモード)	111
5.11.2	ドライブ環境設定 (詳細モード)	113
5.11.3	ボリュームの環境設定 サーバ同期	119
5.11.4	X2I (イメージング) 変換におけるボリュームとイメージファイルの処理	120
5.12	変換ジョブに変換後のカスタムアクションを含める方法	121
A	よくある質問とその回答	123
B	Portability Suite のトラブルシューティング	125
B.1	調査	125
B.2	ピアツーピア変換	127
B.3	イメージの使用	129
B.4	診断	129
C	テーブルの参照	131
	用語集	133

このガイドについて

このガイドでは、PlateSpin® Portability Suite バージョン 8.1 (PlateSpin® Migrate 製品および PlateSpin® Protect 製品) の使用に関する情報について説明しています。

- ◆ 11 ページの第 1 章「Portability Suite の機能の概要」
- ◆ 25 ページの第 2 章「Portability Suite の使用開始」
- ◆ 51 ページの第 3 章「ピアツーピアのワークロード変換を使用したポータビリティおよび保護」
- ◆ 67 ページの第 4 章「柔軟なイメージを使用したポータビリティおよび保護」
- ◆ 83 ページの第 5 章「ワークロードマイグレーションおよび保護ジョブの要点」
- ◆ 125 ページの付録 B「Portability Suite のトラブルシューティング」
- ◆ 123 ページの付録 A「よくある質問とその回答」
- ◆ 133 ページの「用語集」

対象読者

このガイドは、進行中のワークロードマイグレーションプロジェクトおよび保護プロジェクトで Portability Suite を使用するデータセンター管理者およびオペレータなどの IT スタッフを対象としています。

フィードバック

本マニュアルおよびこの製品に含まれているその他のマニュアルについて、皆様のご意見やご要望をお寄せください。オンラインマニュアルの各ページの下部にある [ユーザコメント] 機能を使用するか、Novell マニュアルフィードバックサイト (<http://www.novell.com/documentation/feedback.html>) を通じてご意見をお寄せください。

マニュアルのアップデート

このマニュアルの最新版については、PlateSpin® Portability Suite バージョン 8.1 の Web サイト (http://www.novell.com/documentation/platespin_portabilitysuite_810/) を参照してください。

その他のマニュアル

このガイドは、PlateSpin® Portability Suite マニュアルセットの一部です。マニュアルセットの一覧を、以下に示します。

<i>Portability Suite 8.1</i> リリースノート	最新情報、既知の問題、また推奨される回避策などの情報を提供します。
<i>Portability Suite 8.1</i> インストールガイド	製品のインストール、アップグレード、およびアンインストールに関する情報を提供します。
<i>Portability Suite 8.1</i> 構成ガイド	製品のライセンスとライセンスキーの管理、ネットワーク環境の設定、および製品のデフォルト設定の構成に関する情報を提供します。

<i>Portability Suite 8.1 ユーザガイド</i>	ワークロードのマイグレーションおよび保護プロジェクトで製品を使用するための情報を提供します。
<i>Portability Suite 8.1 統合ヘルプ</i>	製品と統合されたコンパイル済み HTML ヘルプ (CHM) 形式のすべての製品マニュアルです。
<i>Portability Suite 8.1 オンラインマニュアル</i>	インターネット経由でブラウザベースのアクセスが可能な Webhelp 形式のすべての製品マニュアルです。この配布物には、常に最新の更新情報が含まれています。

その他の資料

Web 上にある次の資料もご利用ください。

- ◆ **PlateSpin ユーザーフォーラム** (<http://forum.platespin.com>): 各種ディスカッショントピックを持つ Web ベースのコミュニティです。
- ◆ **PlateSpin ナレッジベース** (<http://support.platespin.com/kb2/>): 詳細な技術情報の記事集です。

技術サポート

- ◆ 電話 (北米): +1-877-528-3774 (1 87 PlateSpin)
- ◆ 電話 (グローバル): +1-416-203-4799
- ◆ 電子メール: support@platespin.com

PlateSpin 技術サポートの Web サイト (<http://www.platespin.com/support/>) もご利用いただけます。

マニュアルの表記規則

Novell のマニュアルでは、「より大きい」記号 (>) を使用して手順内の操作と相互参照パス内の項目の順序を示します。

商標記号 (®、™ など) は、Novell の商標を示します。アスタリスク (*) は、サードパーティの商標を示します。

Portability Suite の機能の概要

この項では、PlateSpin® Migrate および PlateSpin® Protect 製品を構成する PlateSpin® Portability Suite ソフトウェアに関する情報について説明します。

どちらの製品も、共通のワークロードの移植容易性および保護エンジン (Portability Suite Server) に基づいています。

Portability Suite 製品を使用すると、ワークロードのハードウェアをソフトウェアから切り離して、データセンタにある x86 サーバとデスクトップインフラストラクチャを通して、異種ワークロード (オペレーティングシステムとそのアプリケーションおよびデータ) の移行と保護を行うことができます。

- ◆ 11 ページのセクション 1.1 「ワークロードの移植容易性および保護について」
- ◆ 13 ページのセクション 1.2 「サポートされるソースワークロードおよびターゲットプラットフォーム」
- ◆ 17 ページのセクション 1.3 「サポートされる転送方法」
- ◆ 21 ページのセクション 1.4 「ワークロードの継続性」
- ◆ 23 ページのセクション 1.5 「セキュリティとプライバシー」
- ◆ 24 ページのセクション 1.6 「パフォーマンスとスケーラビリティ」

1.1 ワークロードの移植容易性および保護について

Portability Suite は、物理マシン、仮想マシン、およびボリュームイメージングの 3 つのインフラストラクチャ間でワークロードのマイグレーションを自動化します。仮想マシンとイメージングインフラストラクチャの場合、Portability Suite はビジネスの継続性に対して保護機能を提供します。

図 1-1 ワークロードの移植容易性

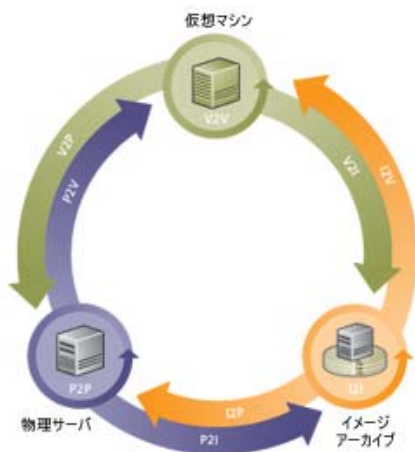


表 1-1 ワークロードの移植容易性および保護の操作

操作のカテゴリ	変換のインフラストラクチャ
ワークロードの移植容易性：ピアツーピア	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 物理から仮想 (P2V) ◆ 仮想から仮想 (V2V) ◆ 仮想から物理 (V2P) ◆ 物理から物理 (P2P)
ワークロードの移植容易性：イメージング	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 物理からイメージ (P2I) ◆ 仮想からイメージ (V2I) ◆ イメージから仮想 (I2V) ◆ イメージから物理 (I2P)
ワークロードの保護	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 物理から仮想 (P2V) ◆ 仮想から仮想 (V2V) ◆ 物理からイメージ (P2I) ◆ 仮想からイメージ (V2I)

Portability Suite は、複数のワークロードタイプと仮想化プラットフォームをサポートしています。保護とイメージングは、Microsoft* Windows* オペレーティングシステムを持つワークロードでサポートされています。サポートされているワークロードとインフラストラクチャの詳細なリストについては、[13 ページの「サポートされるソースワークロードおよびターゲットプラットフォーム」](#)を参照してください。

1.1.1 Portability Suite 用のビジネスアプリケーション

Portability Suite は、次のシナリオでの使用を目的としています。

- ◆ **統合。**物理マシンから仮想マシンへの大規模マイグレーションを自動化することで、統合プロジェクトを加速させ、管理上の労力およびエラーを削減します。
- ◆ **マイグレーション。**完全に設定されたワークロードを古いハードウェアから新しいハードウェアへ、ソフトウェアスタック全体を再構築することなしに移行します。
- ◆ **テストラボの展開。**1つの VM ホスト上で複数の仮想マシンを実行することによってテストラボのワークロードを統合し、仮想テストラボ環境を迅速で容易に展開し、また運用環境全体を数時間または数日のうちに複製します。
- ◆ **障害復旧。**物理または仮想の運用ワークロードを仮想マシンに自動複製することで、計画内 / 計画外のシステム停止を管理します。物理的な運用ワークロードが利用できない場合に、仮想マシンレプリカに切り替えることもできます。これにより、ビジネスの継続性を保ちつつ、ダウンタイムおよびハードウェアリソースの使用率を削減します。
- ◆ **保守およびサポート契約の保全。**サポート契約の有効性を保つために、ワークロード、およびそれらにインストールされているアプリケーションの仮想化をまとめて解除し、ネットワーク経由でそれらを物理マシンに移行させます。
- ◆ **マシンプロビジョニング。**ハードウェアから独立した柔軟なイメージのライブラリ全体を簡単にキャプチャし、それらをハードウェアやドライバなどを手動で設定することなくネットワーク経由で新しいインフラストラクチャに展開します。

- ◆ **ワークロードの継続的な最適化。**あらゆる地理的な場所から、任意のプラットフォームに対して、方向を問わずにワークロードを移動させます。ワークロードは、進行中および継続的なリソースの最適化の作業中に、仮想化および仮想化の解除ができません。

1.1.2 ワークロード変換タスク

Portability Suite を使用すると、次の変換タスクの定義、保存、スケジュール、実行、および監視を行うことができます。

表 1-2 Portability Suite のワークロード変換タスク

変換	説明
ワークロードのコピー	選択した物理または仮想ワークロードを仮想的または物理的に複製します。ただし、新しいワークロードには、新しいネットワーク ID が割り当てられます。ソースのワークロードを運用可能な状態に保つには、この変換タスクを使用します。
ワークロードの移動	選択した物理または仮想ワークロードを厳密に仮想的または物理的に複製します。元のインフラストラクチャを廃止したり、別の目的のために再生したりするには、この変換タスクを使用します。
ワークロードの保護	保護契約のもと、選択した物理ワークロードまたは仮想ワークロードのスタンバイの仮想的な複製が作成されます (ソース上の増分的な変更の複製を同期する定期的、自動的なスケジュール)。
サーバ同期	ネットワーク経由でソースボリュームデータ全体を転送することなく、別の仮想ワークロードまたは物理ワークロードを使用して、仮想ワークロードまたは物理ワークロードを同期します。1 回限りの移植容易性タスク (コピーまたは移動タスクと同様)、または進行中の保護 (ワークロードの保護タスクと同様) のいずれかの 2 つのワークロードを同期できます。
イメージのキャプチャ	物理または仮想ワークロードのイメージを、柔軟なイメージの形式で単一のエンティティとして作成します。ソースワークロードのイメージを使用して、オンデマンドか、または事前定義のスケジュールに応じて、自動的にイメージの状態を同期することもできます。
イメージのインポート	サードパーティ製のボリュームアーカイブまたは未加工のボリュームデータを柔軟なイメージにインポートします。
イメージの展開	柔軟なイメージを、物理または仮想マシン上のブートされたワークロードまたはブート可能なワークロードに変換します。

1.2 サポートされるソースワークロードおよびターゲットプラットフォーム

- ◆ 14 ページのセクション 1.2.1 「サポートされるソースのワークロード」
- ◆ 16 ページのセクション 1.2.2 「サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム」
- ◆ 17 ページのセクション 1.2.3 「サポートされるサードパーティ製のイメージフォーマット」
- ◆ 17 ページのセクション 1.2.4 「ハードウェアの互換性」

1.2.1 サポートされるソースのワークロード

Portability Suite は、次のオペレーティングシステムファミリーをサポートしています。

- ◆ Microsoft Windows
- ◆ Linux*
- ◆ UNIX*

Portability Suite のすべての機能および転送方法がすべてのソースオペレーティングシステムでサポートされているわけではありません。バージョンの詳細および最新のリストについては、ナレッジベースの記事 Q20002 (<http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20002>) を参照してください。

- ◆ [14 ページの「サポートされる Microsoft Windows のワークロード」](#)
- ◆ [15 ページの「サポートされる Linux のワークロード」](#)
- ◆ [15 ページの「サポートされる UNIX のワークロード」](#)

サポートされる Microsoft Windows のワークロード

Windows プラットフォームに対して、Portability Suite では、次のポータビリティおよび保護機能をサポートします。

- ◆ ワークロードの移植容易性：ピアツーピア変換 (P2V、V2V、V2P、P2P)。
- ◆ ワークロード保護：変更の増分同期によるピアツーピア変換 (P2V と V2V)。Windows NT 4 を除く、サポートされているすべての Windows ワークロード。サポートされる保護のターゲットインフラストラクチャは、VMware* ESX Servers、バージョン 3.0 以降です。
- ◆ ピアツーピアのサーバ同期とのワークロード同期 (P2V、V2V、P2P、V2P)。
- ◆ 柔軟なイメージを使用したワークロードイメージング (X2I, I2X)、いくつかのサードパーティ製のバックアップおよびアーカイビングアプリケーションを完全または部分的にサポート。
- ◆ 増分イメージ同期によるワークロードイメージ保護 (X2I)。

表 1-3 サポートされる Microsoft Windows のワークロード

バージョン	ビットの仕様	備考
Windows Vista*、Business/Enterprise/Ultimate、SP1 以降	32 ビット、64 ビット	Microsoft Virtual Server (MSVS)、VMware Server、および VMware ESX 3.5 Update 2 より以前のバージョンではサポートされていません。
Windows Server* 2008、Standard/Enterprise	32 ビット、64 ビット	
Windows Server 2003、Standard/Enterprise	32 ビット、64 ビット	
Windows Server* 2000、Windows Advanced Server 2000	32 ビット	
Windows XP Professional、x86 のみ	32 ビット、64 ビット	

バージョン	ビットの仕様	備考
Windows NT* 4.0 Server	32 ビット	

Portability Suite では、次に挙げる、ソース Windows ワークロードのローカライズされたバージョンをサポートします。

- ◆ 英語
- ◆ フランス語
- ◆ ドイツ語
- ◆ 日本語

サポートされる Linux のワークロード

Linux プラットフォームに対して、Portability Suite では、サーバ同期とワークロード同期を含む、ピアツーピアのワークロードの移植容易性サポート (P2P、P2V、V2P、V2V) のみを提供します。

サポートされる Linux ファイルシステムは、EXT2、EXT3、および REISERFS です。

ワークロード保護とイメージングは Linux ではサポートされません。

表 1-4 サポートされる Linux のワークロード

バージョン	ビットの仕様
Red Hat* Linux 7.3, 8	32 ビット
Red Hat Enterprise Linux AS/ES/WS 2.1	32 ビット
Red Hat Enterprise Linux AS/ES/WS 3、4、5	32 ビット、64 ビット
SUSE® Linux Enterprise Server (SLES) 8、9、10、11	32 ビット、64 ビット

注：

- ◆ Linux ベースのソースワークロードは、Secure Shell (SSH) サーバを実行している必要があります。
- ◆ カスタマイズされたカーネルまたはソースから再構築されたカーネルは、サポートされません。サポートされる Linux カーネルの詳細については、[ナレッジベースの記事 Q20947 \(http://support.platespin.com/kb2/Article.aspx?id=20947\)](http://support.platespin.com/kb2/Article.aspx?id=20947) を参照してください。

サポートされる UNIX のワークロード

Portability Suite は SPARC* システム上で実行する Solaris* ワークロードのマイグレーションサポートを提供します。

サポートされるバージョンは、Solaris 10、Update 5 (U5) および Solaris 10、Update 6 (U6) です。これらのワークロードは、同じアップデートバージョンで実行中の Solaris 10 ゾーンサーバのネイティブのゾーンにマイグレートできます。

ワークロード保護およびイメージングは、Solaris ではサポートされません。

注：

- ◆ Solaris ソースワークロードは、Secure Shell (SSH) サーバを実行する必要があります。

1.2.2 サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム

次に、サポートされる仮想化プラットフォームのリストを示します。バージョンの詳細および最新のリストについては、[ナレッジベースの記事 Q20002 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20002\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20002) を参照してください。

表 1-5 サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム

プラットフォーム	備考
VMware ESX 4	
VMware ESX Server 3.5、ESXi 3.5	
VMware Virtual Infrastructure のバージョン 3.0 ~ 3.0.1、3.5	
VMware ESX Server 3.0.x	
VMware ESX Server 2.5.x	
VMware ESX Server 2.1.1	
VMware Server 1.0	Windows のみ (x86 および x64)
VMware GSX Server 3.1、3.2 (Windows のみ)	Windows NT 4.0 SP6a、2000、2003 ソースワークロードのみ
Microsoft Virtual Server (MSVS) 2005 (ビルド 465、ビルド 465.254、サービスパック 1 を使用)	Windows NT 4.0 SP6a、2000、2003 のソースワークロードのみ (x86 および x64)
Solaris 10 (U5 および U6) ゾーンサーバ	Solaris 10 (U5 および U6) 物理マシンまたはゾーンであるソースワークロードの場合
Citrix* XenServer 4.1、5	
Novell® Xen* Hypervisor on SLES 10 SP2	X2P 変換ワークフローを使用した半自動の仮想化によってサポートされます。57 ページの
Microsoft Hyper-V	「X2P により半自動化されたワークロードの仮想化」を参照してください。
Virtual Iron*	

1.2.3 サポートされるサードパーティ製のイメージフォーマット

次に、サポートされるサードパーティ製のイメージフォーマットを示します。

- ◆ Acronis* True Image (True Image 9.1、True Image Server 8.0、True Image Enterprise Server 8.0、9.1)。
- ◆ Symantec* LiveState* Recovery (LiveState Recovery Standard Server、LiveState Recovery Advanced Server、LiveState Recovery Advanced Server Suite、バージョン 3.0 および 6.0)。

1.2.4 ハードウェアの互換性

Windows ソースワークロードおよび制御の取得の ISO イメージに関するハードウェアの互換性リストが利用できます。[ナレッジベースの記事 Q20314 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20314\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20314) を参照してください。

また、Linux ソースワークロードに関するリストも利用できます。[ナレッジベースの記事 Q20570 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20570\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20570) を参照してください。

1.3 サポートされる転送方法

Portability Suite では、選択されたワークロードおよび変換タイプに応じて、ワークロードデータをソースからターゲットへ転送する異なる方法を選択できます。

サポートされる転送方法ごとに配置されたワークロードタイプと変換のリストについては、[ナレッジベースの記事 Q20002 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20002\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20002) を参照してください。

転送方法の選択方法については、[85 ページの「転送オプションの指定」](#) を参照してください。

データ転送パフォーマンスの調整方法の詳細については、『[構成ガイド](#)』の「[データ転送パフォーマンスの調整](#)」を参照してください。

- ◆ [17 ページのセクション 1.3.1 「制御の取得のメカニズムを使ったオフライン転送」](#)
- ◆ [18 ページのセクション 1.3.2 「ライブ転送 \(ファイルベース\)」](#)
- ◆ [19 ページのセクション 1.3.3 「ライブ転送 \(VSS ブロックベース\)」](#)
- ◆ [19 ページのセクション 1.3.4 「ライブ転送 \(ブロックベース\)」](#)
- ◆ [20 ページのセクション 1.3.5 「ライブ転送 \(VSS ファイルベース\)」](#)
- ◆ [20 ページのセクション 1.3.6 「ライブ転送コンポーネントのインストール」](#)

1.3.1 制御の取得のメカニズムを使ったオフライン転送

- ◆ [18 ページの「制御の取得による Windows および Linux ワークロードのオフライン転送」](#)
- ◆ [18 ページの「制御の取得による Solaris ワークロードのオフライン転送」](#)

制御の取得による Windows および Linux ワークロードのオフライン転送

この方法で、Portability Suite をソースマシンを一時的な事前実行環境にブートし、ソースがオフライン時にデータを転送することが可能になります。

制御の取得による転送方法の基礎となっている事前実行環境のメカニズムは、ソースワークロードのオペレーティングシステムによって異なります。

- ◆ Windows ワークロードの場合、Portability Suite は Microsoft Windows Preinstallation Environment (WinPE) を使用します。
- ◆ Linux ワークロードの場合、Portability Suite は Linux Ramdisk を使用します。

ソースオペレーティングシステムが再起動時に一時的な事前実行環境をロードするかどうかを確認するために、Portability Suite は一時的にブートファイルを変更して、制御の取得環境が正常にロードされた後でそれらを元の状態に復元します。ソース上で変更されるファイルのリストについては、[ナレッジベースの記事 Q20349 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20349\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20349) を参照してください。

制御の取得転送を使用して、Windows NT 4.0、Windows Server 2000、Windows Server 2003、および Linux ワークロード、またはソースワークロードのダウンタイムを利用できる場合にマイグレートします。

制御の取得による Solaris ワークロードのオフライン転送

Solaris ワークロードの場合、Portability Suite では、Windows および Linux ワークロードで使用するものとは異なる制御の取得メカニズムを使用します。マイグレーションのためのワークロードの準備に関係する一時的な実行前環境はありません。その代わりに、マイグレーションを実行中に Portability Suite ソースワークロードの実行レベルを変更します。

注： Solaris ソースワークロード上にカスタマイズされたサービスがある場合、システムはデータ転送中にそれらのサービスのシャットダウンに失敗することがあり、これによりマイグレーションジョブが失敗に終わる可能性があります。マイグレーションジョブを設定する前に、ソース上のカスタマイズされたサービスがシャットダウンされていることを確認します。

1.3.2 ライブ転送 (ファイルベース)

ファイルベースのライブ転送方法では、ファイルレベルでデータのコピーおよび変更の複製が行われます。ファイルベースのライブ転送中、Portability Suite はソースボリュームデータからすべてのファイルを転送すると同時に、それらの変更を監視します。転送が完了すると、変更されたファイルが再送信されます。変更が存在する場合、Microsoft SQL Server* または Microsoft Exchange Server のサービスは停止し、個別のデータベースファイルがターゲットに転送されます。

ファイルベースのライブ転送方法 (104 ページの「[ライブ転送中のサービスの処理 \(Windows ソースワークロード\)](#)」) を参照) を使用する場合、これらのサービスを停止するようにジョブを設定できます。ただし、これらのデータベースのバックアップを管理する他のツールが存在している場合は、転送中にサービスを実行したままにするようにしてください。転送が完了したら、コピーされたデータベースが最新であるか確認します。

ファイルシステムの変更が続く場合、データ転送は停止し、ジョブの進行状況の警告が表示されます。

ワークロード保護ジョブに関する最初の転送が完了すると、ターゲットの電源がオフになり、次のスケジュール済み増分転送時に再度オンになります。

ファイルレベルのライブ転送は、適度にアクティブな Windows に適しています。

1.3.3 ライブ転送 (VSS ブロックベース)

このライブ転送方法は、データをブロックレベルで転送し、Microsoft Volume Snapshot Service (VSS) をサポートするアプリケーションとサービスを使用する Windows ワークロード (Windows 2003 SP1 以降) に対して、VSS がレバレッジされます。VSS のブロックベースライブ転送方法は、ソースワークロードの正確なポイントインタイムでのコピーを提供します。

VSS のブロックベースライブ転送中、Portability Suite はソースマシン上のボリュームの VSS のスナップショットを取得し、データをブロックごとに転送します。

ソースワークロードは保護ジョブを除き転送中を通じてオンラインのままです。その間、ソースは最初の転送で (コンポーネントが事前にインストールされていない場合) 一度再起動が必要です。

VSS のブロックベースライブ転送方法は、VSS 機能をサポートする Windows ワークロードには好ましいデータ転送方法です。一時的なサービスの停止を通常必要とするデータベースサーバ、メールサーバ、およびアプリケーションサーバを、このライブ転送方法を使用して保護できます。この方法は、待ち時間の長いネットワーク内のワークロード保護ジョブにも推奨されます。

1.3.4 ライブ転送 (ブロックベース)

ブロックベースのライブ転送方法では、ファイル全体を複製する代わりに、ブロックレベルでデータの複製および変更の複製が行われます。

データをターゲットに転送中、ソースボリューム上の変更が監視され、完全な同期が達成されるまで、ブロックレベルでターゲットに継続的に再転送されます。

ブロックベースのライブ転送方法は、ファイル全体ではなく変更されたブロックのみを送信するので、著しく少ないデータしか転送しません。

ワークロード保護ジョブに関する最初の転送が完了すると、ターゲットは電源がオンのままになり、次のスケジュール済み増分転送を待機します。

ブロックベースのライブ転送方法を使用すると、Microsoft Volume Snapshot Service (VSS) 機能をサポートしていない Windows ワークロードを変換する場合、サービスのダウンタイムを減少させます。ブロックベースのライブ転送方法を使用すると、大規模なデータベースを含み、ディスクアクティビティの頻度が高い、重要なデータベースサーバ、メールサーバ、およびアプリケーションサーバを保護できます。さらに、ブロックレベル変更のサイズは、ファイルレベル変更のサイズよりも著しく小さいので、待ち時間の長いネットワークにはブロックベースのライブ転送をお勧めします (ファイルレベルのデータ転送中にファイルレベルの変更が検出された場合、変更されたファイルは全体として転送されます)。

ソースワークロードで Microsoft Exchange Server 2000 や 2003、および Microsoft SQL Server 2000 を実行中の場合、Portability Suite は、これらのアプリケーションの Windows サービスを自動的に検出します。ブロックベースのライブ転送方法を使用する場合、これ

らのサービスを停止するようにジョブを設定できます。ただし、これらのデータベースのバックアップを管理する他のツールが存在している場合は、転送中にサービスを実行したままにするようにしてください。転送が完了したら、コピーされたデータベースが最新であるか確認します。

1.3.5 ライブ転送 (VSS ファイルベース)

このライブ転送方法では、データをファイルレベルで転送し、Microsoft Volume Snapshot Service (VSS) をサポートするアプリケーションとサービスを使用する Windows ワークロード (Windows 2003 SP1 以降) に対して、VSS(別名シャドウコピー) の機能が使用されます。VSS のファイルベースライブ転送方法は、ソースワークロードの正確なポイントインタイムのコピーを提供します。

VSS のファイルベースライブ転送中、Portability Suite はソースマシン上のボリュームの VSS のスナップショットを取得し、データをファイルごとに転送します。

ワークロード保護ジョブに関する最初の転送が完了すると、ターゲットの電源がオフになり、次のスケジュール済み増分転送時に再度オンになります。

VSS のファイルベースライブ転送方法を使用すると、VSS 機能をサポートする Windows のワークロードを変換する際、サービスのダウンタイムが減少します。拡張サービスの停止を通常必要とするデータベースサーバ、メールサーバ、およびアプリケーションサーバを、このライブ転送方法を使用して保護できます。この方法は、待ち時間の長いネットワーク内のワークロード保護ジョブにも推奨されます。これは、ポイントインタイムのソリューションなので、他の方法では必要とされるデータの再送信が必要ありません。

1.3.6 ライブ転送コンポーネントのインストール

マイグレーションジョブの実行時に、適切なライブデータ転送コンポーネントがソースおよびターゲットワークロード上に自動的にインストールされます。

ブロックベース転送コンポーネント (ブロックベース転送コンポーネントおよび VSS ブロックベース転送コンポーネント) の場合、適切なソースワークロード上でコンポーネントを手動でインストールまたはアンインストールするオプションもあります。これにより、次の操作を行うことができます。

- ◆ ソースワークロードの運用継続性への影響を最小限にします。21 ページの「[転送方法の選択によって影響を受けるソースワークロードの継続性](#)」を参照してください。
- ◆ Portability Suite 製品を再インストールせずに、コンポーネント (たとえば、ホットフィックスで配布されるもの) をアップグレードします。

次の各項で、詳細について説明します。

- ◆ 20 ページの「[ブロックベースコンポーネントが最新かどうかの確認](#)」
- ◆ 21 ページの「[ブロックベースコンポーネントの手動インストールおよびアンインストール](#)」

ブロックベースコンポーネントが最新かどうかの確認

ソースワークロード上のブロックベースの転送コンポーネントが廃止された場合、変換ジョブにブロックレベルのライブ転送方法を選択すると、Portability Suite によって警告が表示されます。

[同期スケジュール] ウィンドウ内の既存の同期スケジュールについても警告メッセージが表示されるので、該当するスケジュールを右クリックし、[ブロックベースコンポーネントのアップグレード]を選択して、ソース上のブロックレベルの転送コンポーネントをアップグレードするように選択できます。

ソース上のブロックベースの転送コンポーネントが最新かどうかを確認する方法：

- 1 [サーバ] ビューで、ソースを右クリックします。メニューに [ブロックベースコンポーネントのアップグレード] が含まれている場合は、ブロックベースの転送コンポーネントは廃止されています。

これは、ブロックベース転送コンポーネントにのみ当てはまります。VSS ブロックベースコンポーネントはバージョン 8.1 が最新です。

ブロックベースコンポーネントの手動インストールおよびアンインストール

Portability Suite に含まれている両方のブロックレベルのコンポーネントを手動でインストールおよびアンインストールすることができます。このオプションを使用すると、ソースワークロードの運用継続性へのコンポーネントインストールの影響を排除または削減できます。21 ページの「[転送方法の選択によって影響を受けるソースワークロードの継続性](#)」を参照してください。

ブロックベース転送コンポーネントを手動でインストールまたはアンインストールする

- 1 [サーバ] ビューで、必要なソースを右クリックし必要な動作を選択します。
 - ◆ ブロックベースコンポーネントのインストールまたは VSS ブロックベースコンポーネント：いずれかのコンポーネントをインストールするには、以下の手順に従います。
 - ◆ ブロックベースコンポーネントのアンインストール > またはブロックベースコンポーネントのアンインストールいずれかのコンポーネントをアンインストールするには、次の手順に従います。
- 2 ソースマシンに有効な資格情報を入力してから、[アンインストール] をクリックします。

1.4 ワークロードの継続性

- ◆ 21 ページのセクション 1.4.1「[転送方法の選択によって影響を受けるソースワークロードの継続性](#)」
- ◆ 22 ページのセクション 1.4.2「[ソースおよびターゲットのワークロードのデフォルトの変換後終了状態](#)」

1.4.1 転送方法の選択によって影響を受けるソースワークロードの継続性

ソースワークロードの運用継続性は、選択した転送方法により異なります。

次の表に、異なる転送方法とソースワークロードの運用継続性へのそれらの影響を示します。

表 1-6 転送方法による継続性の影響

転送方法	ソースワークロードへの継続性の影響
制御の取得	ソースはマイグレーション全体の間オフラインです。
ブロックベース	変換ジョブの実行の開始時に一度再起動が必要です。そのとき、ブロックベース転送コンポーネントがソース上にインストールされます。 コンポーネントのアップグレードの場合、既存の保護契約が中断されます。
VSS ブロックベース	マイグレーションジョブに影響はありません。 保護ジョブに与える影響：変換ジョブの実行の開始時に一度再起動が必要です。そのとき、ブロックベース転送コンポーネントがソース上にインストールされます。
ファイルベース、VSS ファイルベース	マイグレーションジョブに影響はありません。

1.4.2 ソースおよびターゲットのワークロードのデフォルトの変換後終了状態

次の表では、変換タスクによるソースおよびターゲットワークロードのデフォルトの変換後終了状態を一覧表示しています。ソースおよびターゲットの変換後終了状態を手動で指定することもできます。[86 ページの「ソースおよびターゲットのワークロード終了ステータスの指定」](#)を参照してください。

表 1-7 デフォルトの変換後終了状態

変換タスク	転送方法	ソースの状態	ターゲットの状態
移動	制御の取得	<ul style="list-style-type: none"> ◆ シャットダウン ◆ 制御下を離れ、転送が OK であれば転送後にシャットダウンする ◆ 制御下を離れ、転送が OK でなければ転送後に再開する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 電源オン ◆ 電源オフ ◆ 中断 (Solaris のゾーンを除くターゲット VM の場合のみ)
移動	ライブ転送	<ul style="list-style-type: none"> ◆ シャットダウン 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 電源オン ◆ 電源オフ ◆ 中断 (Solaris のゾーンを除くターゲット VM の場合のみ)
コピー	制御の取得	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 再開 ◆ シャットダウン ◆ 再開の決定を遅らせるために制御下を離れる (可能性として小さい、利点なし) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 電源オン ◆ 電源オフ ◆ 中断 (Solaris のゾーンを除くターゲット VM の場合のみ)

変換タスク	転送方法	ソースの状態	ターゲットの状態
コピー	ライブ転送	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 続行 (シャットダウンが選択されていない) ◆ シャットダウン 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 電源オン ◆ 電源オフ ◆ 中断 (Solaris のゾーンを除くターゲット VM の場合のみ)

1.5 セキュリティとプライバシー

Portability Suite には、データを守り、セキュリティを向上させるために役立つ機能が用意されています。

- ◆ [23 ページのセクション 1.5.1 「ワークロードデータ転送のセキュリティ」](#)
- ◆ [23 ページのセクション 1.5.2 「保存した資格情報のセキュリティ」](#)
- ◆ [24 ページのセクション 1.5.3 「ユーザ権限および認証」](#)

1.5.1 ワークロードデータ転送のセキュリティ

ワークロードデータの転送をより安全にするために、Portability Suite では次の機能が使用できます。

- ◆ 個別の変換ジョブに対してデータ転送の暗号化を有効にします。暗号化が有効な場合、ソースからターゲットへのネットワーク上のデータ転送は、AES(高度暗号化標準)を使用して暗号化されます。
- ◆ Portability Suite Server が FIPS (Federal Information Processing Standards、Publication 140-2) に対応するデータ暗号化アルゴリズムを使用するように構成します。

FIPS への対応が必要な場合、Portability Suite Server のインストール前に FIPS をシステムに設定する必要があります。『インストールガイド』の「[FIPS 対応のデータ暗号化アルゴリズムのサポートを有効にする \(オプション\)](#)」を参照してください。

変換ジョブのファイル暗号化を有効にする方法については、[85 ページの「転送オプションの指定」](#)を参照してください。

1.5.2 保存した資格情報のセキュリティ

Portability Suite 製品は、Portability Suite Client ユーザインタフェースの資格情報をキャッシュし、オペレーティングシステムの API を使用して安全に保存します。資格情報は Portability Suite Server と Portability Suite データベースにも保存され、さらに変換ジョブにも埋め込まれます。

Portability Suite Server と Portability Suite Client 間のデータ転送は、HTTP (デフォルト) か HTTPS (Secure Hypertext Transfer Protocol) のいずれかを使用するように設定できます。サーバとクライアント間のデータ転送をセキュリティで保護するためには、Portability Suite Server ホスト上で SSL を有効にし、サーバの URL を指定時に HTTPS を使用します。[25 ページの「Portability Suite Server への接続」](#)を参照してください。

1.5.3 ユーザ権限および認証

Portability Suite は、役割ベースのユーザ権限および認証メカニズムを提供します。『構成ガイド』の「[ユーザ権限および認証の設定](#)」を参照してください。

1.6 パフォーマンスとスケーラビリティ

- ◆ [24 ページのセクション 1.6.1 「パフォーマンス」](#)
- ◆ [24 ページのセクション 1.6.2 「スケーラビリティ」](#)

1.6.1 パフォーマンス

Portability Suite 製品のパフォーマンス特性は、多くの要因に依存します。次のような要因があります。

- ◆ ソースおよびターゲットのハードウェアおよびソフトウェアのプロファイル
- ◆ Portability Suite Server ホストのハードウェアおよびソフトウェアのプロファイル
- ◆ ネットワークの帯域幅、構成、および条件の詳細
- ◆ ソースワークロードのボリュームの数とそれらのサイズ
- ◆ ソースワークロードボリューム上のファイルの数 (ファイル密度)
- ◆ ソースの I/O レベル (ワークロードがどの程度取り込んでいるか)
- ◆ 並行マイグレーションの数とターゲットの数と種類
- ◆ データ暗号化が有効か無効か
- ◆ データ圧縮が有効か無効か

大規模なワークロードマイグレーションを実行しようとする場合、プロジェクト全体にわたって定期的にメトリックスを調整して、平均的なワークロードのテストマイグレーションを実行し結果をベンチマークとして使用する必要があります。データ転送プロセスに加えて、プロジェクトの必要に応じて、変換ジョブが通過するその他のフェーズについても考慮します。

- ◆ 準備とネットワーク設定
- ◆ ソースワークロードおよびターゲットマシンの検出
- ◆ ターゲットの構成

1.6.2 スケーラビリティ

複数のワークロードマイグレーションを設定し、それらを同時に実行することができます。VMware ESX ホストを使って実行されたスケーラビリティテストは、次のベンチマークの推奨を提案します。

- ◆ 1 つの VM サーバへの複数の変換 : 20 以下
- ◆ 複数の VM サーバ (ESX) への複数の変換 : 30 以下

Portability Suite の使用開始

この項では、PlateSpin® Portability Suite 製品 (PlateSpin® Migrate および PlateSpin® Protect) の主要な機能と、いずれかの製品と連携させるための Portability Suite Client の使用方法について紹介します。

Portability Suite Client は、指定した Portability Suite Server (両方のスイート製品の基礎となるワークロードの移植容易性および保護エンジン) に接続され、Portability Suite Server のデータベースにある情報へのアクセスを提供します。

ソースワークロードおよびターゲットの検出、ジョブの設定、実行、監視、ライセンスキーの管理、およびサーバのデフォルトの動作の構成を含む、サーバとの対話のほとんどは、クライアントを通して行われます。

- ◆ 25 ページのセクション 2.1 「Portability Suite Server への接続」
- ◆ 26 ページのセクション 2.2 「Portability Suite Client のユーザインタフェースについて」
- ◆ 32 ページのセクション 2.3 「ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出」
- ◆ 39 ページのセクション 2.4 「PlateSpin Analyzer を使用したマシンの分析」
- ◆ 40 ページのセクション 2.5 「デバイスドライバの使用」
- ◆ 41 ページのセクション 2.6 「変換後のカスタムアクションの管理」
- ◆ 42 ページのセクション 2.7 「ジョブの設定、実行、および管理」

2.1 Portability Suite Server への接続

Portability Suite Client を開始するたびに、次のアクションが実行されます。

- ◆ Portability Suite Server からユーザアカウントに関する認証を取得します。『構成ガイド』の「[ユーザ権限および認証の設定](#)」を参照してください。
- ◆ 指定した Portability Suite Server に接続されます。
- ◆ 指定した Portability Suite Network がロードされます。これは、同時に作業を行う、検出されたソースワークロードおよびターゲットの集まりです。

接続のための資格情報、Portability Suite Server インスタンス、および必要な Portability Suite Network を [Portability Suite Server の設定] で指定します。

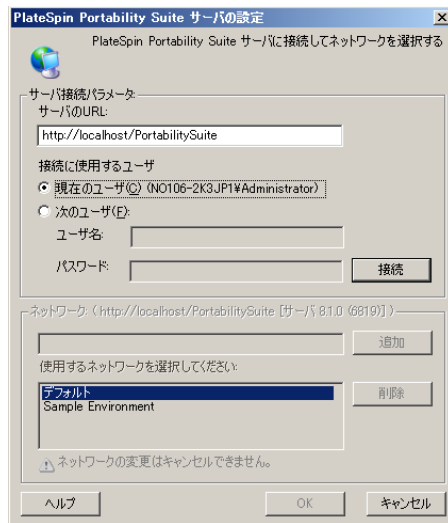
- 1 Portability Suite Client で、[ツール] > [Portability Suite Server の設定] をクリックします。

または

Portability Suite Client の下部にあるステータスバーにある、[サーバ]、[ネットワーク]、または [ユーザ] の 3 つの領域から 1 つをダブルクリックします。

サーバ: http://localhost/PortabilitySuite	ネットワーク: Sample Environment	ユーザ: NO106-2K3JP1#Administrator
--	----------------------------	---------------------------------

[Portability Suite Serve の設定] ダイアログボックスが開きます。



- 2 対象となる Portability Suite Server、ユーザ、およびネットワークパラメータを必要に応じて指定します。

インタフェース要素 説明

サーバURL	Portability Suite Server の URL を次のフォーマットで入力します。 <code>http://server_host/PortabilitySuite</code>
接続に使用するユーザ	Portability Suite Server に接続するには、Portability Suite Server ホストに対する管理アクセスが可能であるか、Portability Suite の役割のメンバーである必要があります。『構成ガイド』の「 ユーザ権限および認証の設定 」を参照してください。
ネットワーク	Portability Suite の機能に慣れるには、 [サンプルの環境] ネットワークを使用します。アクティブなソースワークロードおよびターゲットで作業を行うには、 [デフォルト] ネットワークを使用するか、独自のものを作成します。 ネットワークを追加するには、名前を入力し、 [追加] をクリックします。 ネットワークを削除するには、それを選択し、 [削除] をクリックします。

- 3 完了したら、[\[OK\]](#) をクリックします。

2.2 Portability Suite Client のユーザインタフェースについて

[Portability Suite Client] ウィンドウは、次の要素で構成されています。

- ◆ **メニューバー**：現在のビューを示し、プログラムの機能および操作にアクセスするためのコマンドグループが提供されます。
- ◆ **ツールバー**：現在のビューを示し、プログラムの機能および操作への視覚的なショートカットが提供されます。

- ◆ **現在のビュー**：インタフェースのメインの作業領域です。マシン（サーバビューモードの場合）またはジョブ（ジョブビューモードの場合）のいずれかをリストします。
- ◆ **ペイン** ウィンドウの左側に垂直に位置付けられたペインは、現在のビュー（[ビュー] ペイン）または変換ジョブ（[タスク] ペイン）の選択を容易にします。[詳細] ペインには、現在のビューが表示され、現在のビューで選択された項目に関する概要情報を提供します。
- ◆ **ステータスバー**：[Portability Suite Client] ウィンドウの下部にあるステータスバーには、クライアントが現在接続している Portability Suite Server、現在使用している Portability Suite Network、ログインしている現在のユーザの名前と役割、および自動ネットワークディスカバリ機能の状態が表示されます。

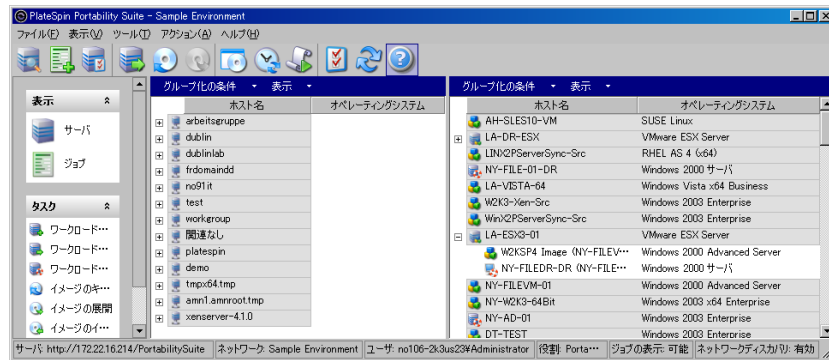
追加情報については、次のセクションを参照してください。

- ◆ [27 ページのセクション 2.2.1 「\[サーバ\] ビュー」](#)
- ◆ [30 ページのセクション 2.2.2 「ジョブビュー」](#)
- ◆ [31 ページのセクション 2.2.3 「タスクペイン」](#)
- ◆ [31 ページのセクション 2.2.4 「ステータスバー」](#)

2.2.1 [サーバ] ビュー

[サーバ] ビューは、検出されたソースワークロードおよびターゲットへのメインのビジュアルインタフェースです。このメインの領域は、必要に応じてカスタマイズできる 2 つの別々のペインで構成されています。

図 2-1 Portability Suite Client の [サーバ] ビュー



[サーバ] ビューでの項目の階層表示はそれぞれのプラットフォーム上での項目の構成を表しています。たとえば、VM は VM ホストの下位にネストされて示され、PlateSpin® Flexible Image はイメージサーバの下位にあり、Solaris のゾーン (VM と見なされる) はそれぞれの Solaris ゾーンサーバの下位にあります。

[グループ化の条件] バーは、ドメインまたは vCenter Server (VMware ESX サーバシステムの場合) への提携によってグループのマシンを使用可能にします。28 ページの「[サーバ] ビューの構成」を参照してください。

注: [サーバ] ビューの階層は、リソースプールのメンバーシップや ESX Distributed Resource Scheduler (DRS) クラスタなどの、詳細な VM リソース管理の階層および構造ではありません。そのような情報は項目のプロパティで表示できます。28 ページの「ソースワークロードおよびターゲットのプロパティの表示」を参照してください。

- ◆ 28 ページの「[サーバ] ビューの構成」
- ◆ 28 ページの「ソースワークロードおよびターゲットのプロパティの表示」
- ◆ 30 ページの「マシンのリスト - [サーバ] ビュー内の特有のアイコン」

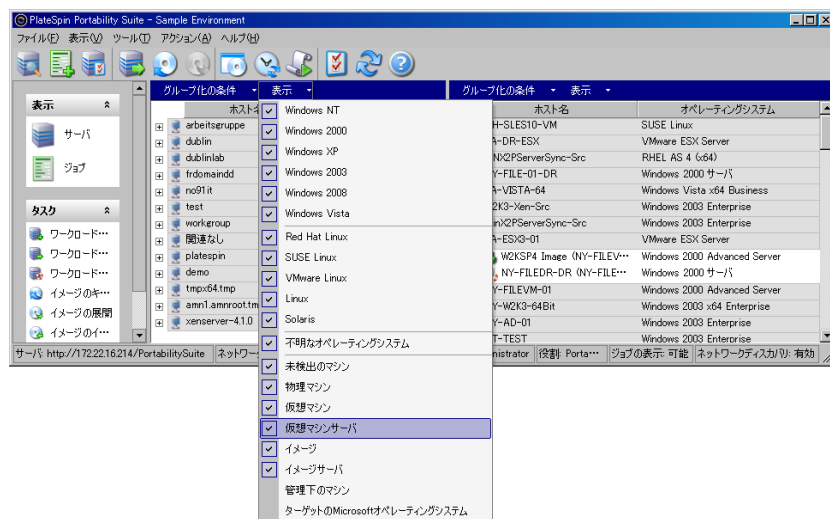
[サーバ] ビューの構成

ソースワークロードおよびターゲットは、[グループ化の条件] および [表示] ドロップダウンメニューを使用して、オペレーティングシステム、ドメイン、名前、およびタイプに基づいてフィルタできます。[グループ化の条件] ドロップダウンメニューを使用して、[サーバ] ビューの項目をグループ化できます。次の項目でグループ化できます。

- ◆ ドメインの提携
- ◆ ホスト名
- ◆ VMware vCenter* Server への提携

ビューのいずれかのペインに表示される項目の範囲をさらに管理するには、[表示] ドロップダウンメニューを使用して、ワークロードタイプごとにマシンをフィルタできます。たとえば、次の図に示すように、Windows NT 4、Windows 2000、Red Hat Linux などです。

図 2-2 タイプごとに項目をソートする場合の [サーバ] ビューのオプション



ソースワークロードおよびターゲットのプロパティの表示

[サーバ] ビューで、項目を右クリックし [プロパティ] を選択して、検出されたソースワークロードおよびターゲットの基本的なプロパティにアクセスできます。

各マシンでは、システムは、選択したシステムについての情報を表示します。表示されるのは、次の項目です。

- ◆ ハードウェア、オペレーティングシステム、およびネットワークプロファイル
- ◆ ボリューム、パーティション、およびディスク使用率
- ◆ プログラムおよびサービス

仮想マシンのプロパティは、ホスト、割り当てられたメモリの量、および処理能力に関する情報を含め、対応する仮想化プラットフォーム上でのマシンの環境に関連する情報を表示します。

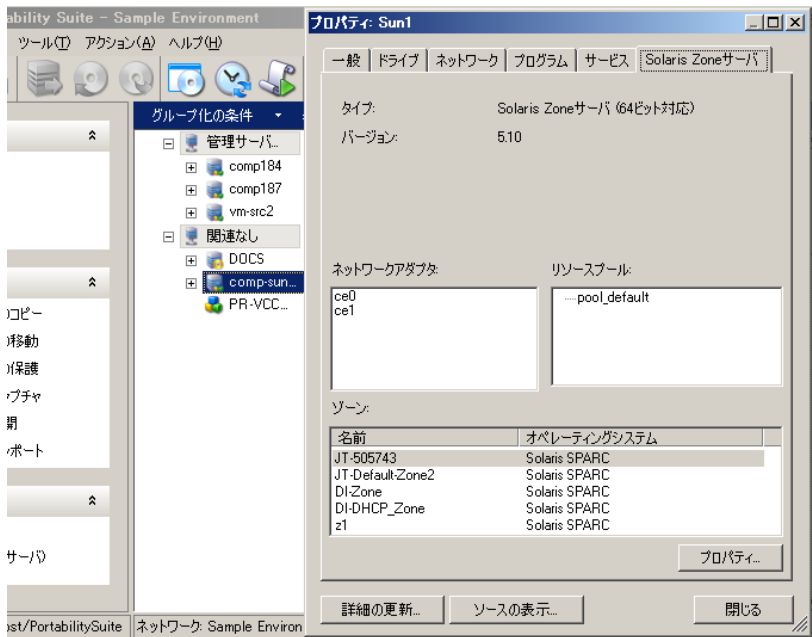
仮想マシンホストのプロパティは、選択したシステム特有の情報を表示します。たとえば、選択した VMware ESX サーバ上で実行中の仮想マシン、使用中の仮想ネットワークアダプタ、およびサーバ上に構成されているリソースプールを表示できます。

Distributed Resource Scheduler (DRS) クラスタに割り当てられている VMware ESX サーバは、クラスタの名前および DRS の自動化レベル (完全、手動、または一部自動化) を表示します。

VMware vCenter プラットフォームを構成する VMware ESX サーバのプロパティも、これを表示します。

次の図に、検出された Solaris ゾーンサーバのプロパティを示します。















図 2-3 Solaris ゾーンサーバ- システムのプロパティにある特有の情報



マシンのリスト - [サーバ] ビュー内の特有のアイコン

検出されたソースワークロードおよびターゲットは、ワークロードまたはワークロードホストの種類を識別できるように、固有のアイコンに関連付けられています。

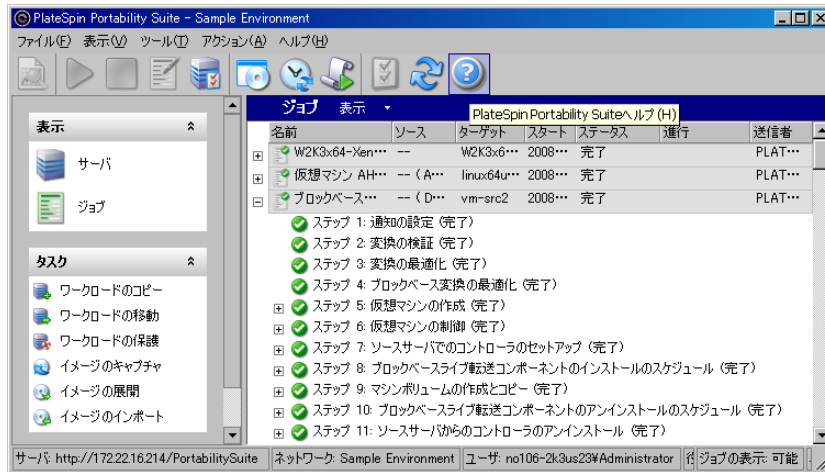
表 2-1 サーバビュー内のマシン特有のアイコン

	物理マシン
	制御の取得による事前実行環境に含まれる物理マシン
	ワークロードライセンスを持つ物理マシン
	保護された物理マシン
	ワークロードライセンスを持つ保護された物理マシン
	仮想マシンサーバ
	仮想マシン
	ワークロードライセンスを持つ仮想マシン
	検出が取り消された仮想マシン
	仮想マシン - サーバ同期のターゲット
	仮想マシン - ワークロードライセンスを持つサーバ同期のターゲット
	Flexible Image Server
	柔軟なイメージ
	保護された柔軟なイメージ

2.2.2 ジョブビュー

ジョブビューには、Portability Suite Server によって実行される、検出、変換、およびイメージキャプチャのすべてのジョブが表示されます。ジョブは、現在の状態に基づいてフィルタできます。

図 2-4 Portability Suite Client のジョブビュー



[表示] ドロップダウンメニューを使用して、[ジョブ] ビューをフィルタして、[最近のジョブのみ (過去 24 時間)]、[変換ジョブのみ]、[失敗]、[完了]、または [保存されたジョブ] (あるいはこれらの組み合わせ) という特定のジョブセットを表示できます。リストからジョブを選択すると、画面の左下隅のペインにジョブの詳細の概要が表示されます。

2.2.3 タスクペイン

[Portability Suite Client] ウィンドウの [タスク] ペインには、最も重要な変換アクションが含まれています。タスクをクリックすると、[アクション] ウィンドウが開き、これを使用して変換ソース、ターゲット、および設定方法を選択できます。43 ページの [セクション 2.7.1 「変換ジョブの設定方法の選択」](#) を参照してください。

2.2.4 ステータスバー

[Portability Suite Client] ウィンドウのステータスバーには、次の情報が表示されます。

- ◆ 現在接続している Portability Suite Server。
- ◆ 現在使用している Portability Suite Network。
- ◆ ログインに使用しているユーザ、およびユーザアカウントに割り当てられてる Portability Suite の役割。
- ◆ 自動ネットワークディスカバリ機能の状態。

図 2-5 Portability Suite Client ウィンドウのステータスバー



最初の 3 つの状態の項目のいずれかをダブルクリックすると、[Portability Suite Server の設定] ウィンドウが開きます。25 ページの [「Portability Suite Server への接続」](#) を参照してください。

[ネットワークディスカバリ] の状態の項目をダブルクリックすると、[自動 Windows ネットワークディスカバリ] のオン/オフが切り替わります。38 ページの [「サーバの同期ジョブ用の Windows VM の検出および準備」](#) を参照してください。

2.3 ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出

すべての変換ジョブでは、検出されたソースと検出されたターゲットが1つずつ必要です。検出の操作によって、Portability Suite のデータベースにマシンに関する詳細なインベントリ情報が入力されます。この情報は、マシンの用途を判別し、変換ジョブを適切に設定するために必要なデータを提供します。

- ◆ 32 ページのセクション 2.3.1 「ネットワーク内の Windows コンピュータを含む [サーバ] ビューの事前作成」
- ◆ 32 ページのセクション 2.3.2 「ソースワークロードおよびターゲットの詳細の検出」
- ◆ 34 ページのセクション 2.3.3 「Windows ドメインに含まれるすべてのマシンの検出」
- ◆ 35 ページのセクション 2.3.4 「マシンの詳細の更新」
- ◆ 35 ページのセクション 2.3.5 「ESX ホストへの認証アクセスに使用されるアクセスメカニズムをリセットする」
- ◆ 36 ページのセクション 2.3.6 「ターゲット物理マシンの検出および登録」
- ◆ 38 ページのセクション 2.3.7 「サーバの同期ジョブ用の Windows VM の検出および準備」

2.3.1 ネットワーク内の Windows コンピュータを含む [サーバ] ビューの事前作成

Portability Suite のネットワークディスカバリ機能は、オンライン状態の物理および仮想 Windows マシンのリストを自動的に Portability Suite Client に入力します。完全検出とは異なり、ネットワークディスカバリではマシンのリストが作成されますが、ワークロードの移植容易性および保護のジョブに必要な、各マシンのインベントリの詳細情報は取得されません。

ネットワークディスカバリ機能は、単一のジョブで Windows ドメイン内のすべてのマシンを検出するために必要です。34 ページの「Windows ドメインに含まれるすべてのマシンの検出」を参照してください。

Portability Suite では、自動ディスカバリ機能に関して標準の Windows ネットワークブラウザ機能が使用されます。Linux ベースのワークロードおよび仮想マシンのサーバは、Windows ネットワークブラウザに対してアドバタイズしないので、これらは自動検出されません。

ネットワークディスカバリ機能は、デフォルトで有効です。機能を無効にするか、有効/無効モードを切り替えるには、[Portability Suite Client] ウィンドウの右下隅にある [ネットワークディスカバリ] をダブルクリックします。

2.3.2 ソースワークロードおよびターゲットの詳細の検出

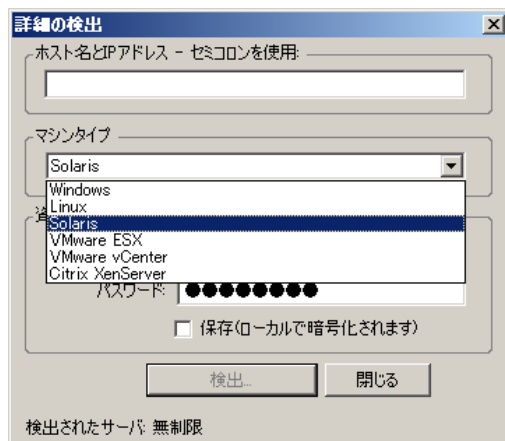
個別の物理または仮想マシン、複数のマシン、個別の仮想マシンサーバ、または複数の仮想マシンサーバを検出できます。VMware vCenter Server と提携するすべての VMware ESX ホスト

ディスクバリ操作を開始する前に、Portability Suite Server がソースワークロードおよびターゲットと通信できることを確認します。『構成ガイド』の「ネットワーク通信の前提条件」を参照してください。

1 Portability Suite のツールバーで、[詳細の検出] をクリックします。

または

[サーバ] ビューで、空白の領域を右クリックし、[詳細の検出] を選択します。



2 [詳細の検出] ダイアログボックスに、ソースまたはターゲットのホスト名または IP アドレスを入力します。複数のマシンを検出するには、ホスト名または IP アドレスをセミコロンで区切って指定します。

デフォルト以外の SSH ポートを使用している Linux ワークロードまたは VMware ESX Server 2.5 および 3.0.x システムを検出するには、標準の URL 構文 (規定通りに、*hostname:portnumber* または *IP_address:portnumber*) を使用してポート番号を指定します。ポート番号は VMware ESX Server 3.5、ESXi 3.5、および ESX 4 のシステムに対しては必要ありません。

3 検出したマシンのマシンの種類を選択し、管理者資格情報を入力します。マシンの種類を選択し、資格情報を指定するには、次のガイドラインを使用します。

検出対象	マシンの種類の選択	資格情報	備考
Windows のすべてのワークロード	Windows	ローカルまたはドメインの管理者資格情報。	ユーザ名には、この構文を使用します。 ◆ ドメインメンバーのマシン用: <i>authority\principal</i>
MSVS VM ホスト			◆ ワークグループメンバーのマシン用: <i>hostname</i>
イメージサーバ			
Linux のすべてのワークロード	Linux	ルートレベルのユーザ名とパスワード	ルート以外のアカウントは、 <i>sudo</i> を使用できるように適切に設定する必要があります。 ナレッジベースの記事 20711 (http://support.platespin.com/kb2/Article.aspx?id=20711) を参照してください。

検出対象	マシンの種類の選択	資格情報	備考
VMware ESX ホスト	VMware ESX	ルートレベルのユーザ名とパスワード	
VMware vCenter Server と提携する VMware ESX ホスト	VMware vCenter	VMware vCenter Web サービスの資格情報 (ユーザ名とパスワード)	ESX ホストとの以降すべての通信は、vCenter Server を通して行われます。アクセスメカニズムを [ESX に直接アクセス] にリセットするか、または [vCenter 経由] に戻るには、必要な ESX ホストの詳細を更新し、必要なオプションを選択します。35 ページの「ESX ホストへの認証アクセスに使用されるアクセスメカニズムをリセットする」を参照してください。
Citrix XenServer VM ホスト	Citrix XenServer	ユーザ名 root と、関連付けられたパスワード	XenServer ホストは、現在ルートレベルの複数ユーザアカウントをサポートしていません。
Solaris ワークロードおよびゾーンサーバ	Solaris	ユーザ名とパスワード	Solaris RBAC (役割ベースのアクセス制御) を使用して、プライマリ管理者プロファイルを割り当てる必要があります。ナレッジベースの記事 20711 (http://support.platespin.com/kb2/Article.aspx?id=20711) を参照してください。

注: Microsoft Hyper-V、Virtual Iron、および Xen Hypervisor 仮想化ソフトウェアを持つホストを検出すると、これらのシステムが Portability Suite ソースワークロード (VM ホストターゲットとは対照的に) として登録される結果になります。これらのプラットフォームをワークロードの移植容易性として使用するには、57 ページの「X2P により半自動化されたワークロードの仮想化」を参照してください。

- 4 (オプション) 将来のジョブで使用するために、これらの資格情報を保存する場合は、[保存 (ローカルで暗号化されます)] オプションを有効にします。
- 5 [検出] をクリックし、プロセスが完了するのを待ちます。
- 6 (オプション) ジョブの進行状況を監視する場合は、[ジョブ] ビューに切り替えます。

2.3.3 Windows ドメインに含まれるすべてのマシンの検出

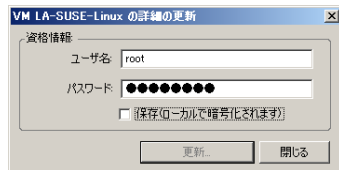
- 1 自動ネットワークディスカバリ機能を有効にします。32 ページの「ネットワーク内の Windows コンピュータを含む [サーバ] ビューの事前作成」を参照してください。
- 2 Portability Suite Client で、検出対象のマシンの含むドメインリストを展開します。
- 3 ドメイン名を右クリックし、[すべてのサーバの検出] を選択します。
- 4 ドメインレベルの管理者の資格情報を指定します。
- 5 [検出] をクリックし、プロセスが完了するのを待ちます。
- 6 (オプション) ジョブの進行状況を監視する場合は、[ジョブ] ビューに切り替えます。

2.3.4 マシンの詳細の更新

変換ジョブを設定する前に、ソースワークロードおよびターゲットを定期的に更新する必要があります。

ソースまたはターゲットマシンを更新する

- 1 [サーバ] ビューで、必要な項目を右クリックしてから、[詳細の更新] を選択します。



- 2 更新するシステムに適合した資格情報を入力してから、[更新] をクリックします。
Portability Suite は検出ジョブを開始します。これを、[ジョブ] ビューで監視できます。

2.3.5 ESX ホストへの認証アクセスに使用されるアクセスメカニズムをリセットする

vCenter Server を通して ESX ホストを検出した場合、これらの VM ホストとの以降すべての通信は、vCenter Server を通して行われます。

このアクセスメカニズムを [ESX に直接アクセス] にリセットするか、[vCenter 経由] に戻すには、以下の手順に従います。

- 1 必要な ESX ホストを更新します。35 ページの「マシンの詳細の更新」を参照してください。

アクセスの種類を選択するように要求されます。



- 2 必要なオプションを選択してから、[更新] をクリックします。
Portability Suite は、指定されたメカニズムを使用して必要な ESX ホストを再検出します。このメカニズムはそのホストとの以降のすべての通信に使用されます。

2.3.6 ターゲット物理マシンの検出および登録

物理ターゲットおよびイベントリを検出するには、制御の物理ターゲット取得 ISO イメージを使って、ターゲットマシンをブートする必要があります。これは、CD やその他のメディア上にあり、そこからターゲットをブートできます。同様のプロセスが、半自動化された仮想化プロセスを使用する仮想化プラットフォームに、ワークロードをマイグレートするために使用されます。それによって、仮想マシンホスト上のターゲット仮想マシンが物理ターゲットと見なされます。[57 ページの「X2P により半自動化されたワークロードの仮想化」](#)を参照してください。

ISO イメージを使用するには、それを [Novell Customer Center \(http://www.novell.com/customercenter/\)](http://www.novell.com/customercenter/) からダウンロードします。ご使用のターゲットマシンに適したイメージを使用します。

表 2-2 ターゲット物理マシンに対する制御の取得 ISO イメージ

ターゲットタイプ	ファイル名	
384MB 以上の RAM を持つ Windows マシン	winperamdisk.iso	
256 ~ 384MB の RAM を持つ Windows マシン	winpe.iso	
Linux マシン	bootofx2p.iso	
384MB 以上の RAM を持つ Virtual Iron 上の Windows VM	winperamdisk_virtualiron.iso	Portability Suite Server で物理ターゲットと見なされます。 57 ページの「X2P により半自動化されたワークロードの仮想化」 を参照してください。
256 ~ 384MB の RAM を持つ Virtual Iron 上の Windows VM	winpe_virtualiron.iso	
メモリサイズにかかわらず Unisys* ES7000 マシン	winperamdisk_es7000.iso	

- ◆ [36 ページの「ターゲット物理マシンの検出および登録 \(Windows\)」](#)
- ◆ [38 ページの「Portability Suite Server への物理ターゲットの登録 \(Linux\)」](#)
- ◆ [38 ページの「ターゲットの物理マシンの自動登録の実行」](#)

ターゲット物理マシンの検出および登録 (Windows)

変更されていない制御の取得 ISO イメージを使用する場合、ターゲットを Portability Suite Server に登録するには、これらの手順を完了します。登録プロセスを自動化するためにイメージを変更する方法については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

検出され登録されたすべての物理マシンは、サーバ同期ターゲットとしても使用できません。55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。

- 1 適切な制御の物理ターゲット取得 ISO イメージを CD に書き込むか、指定したメディアに保存して、そこからターゲットをブートできます。36 ページの i 2-2§ 「ターゲット物理マシンに対する制御の取得 ISO イメージ」を参照してください。
- 2 ターゲットに接続されているネットワークスイッチポートが自動全二重に設定されていることを確認します。
Windows バージョンのブート CD イメージは、自動ネゴシエート全二重のみをサポートし、これによりデュプレックス設定に競合がないようにします。
- 3 ブート CD を使用して、ターゲットの物理マシンをブートし、コマンドプロンプトウィンドウが開くのを待ちます。
- 4 データをブロックレベルで移動するには、「Y」を入力し、データをファイルレベルで移動するには「N」を入力します。ブロックレベルの転送を選択すると、ブロックベースのライブ転送方法 (VSS ブロックベースのライブ転送方法ではなく) が適用されます。17 ページの「サポートされる転送方法」を参照してください。
- 5 要求されたら、次の構文で Portability Suite Server の URL を入力します。
`http://server_host/PortabilitySuite`
`server_host` を Portability Suite Server の実際のホスト名または IP アドレスで置き換えます。
- 6 認証局を指定して、Portability Suite Server の管理者レベルの資格情報を入力します。次の構文を使用します。
`domain\username or hostname\username`
- 7 指定した資格情報に対するパスワードを入力します。
利用可能なネットワークカードが検出され、MAC アドレスで表示されます。
- 8 使用される NIC で DHCP を利用できる場合は、<Enter> キーを押して続行します。DHCP が利用できない場合は、目的の NIC を静的な IP アドレスを使用して設定します。
 - 8a IP アドレスを入力
 - 8b サブネットマスクを入力
 - 8c ゲートウェイを入力
- 9 物理マシンのホスト名を入力するか、<Enter> キーを押してデフォルト値を承認します。
- 10 Portability Suite Server 上で SSL を有効にしている場合は [はい] を入力しますが、そうでない場合は [いいえ] を入力します。
- 11 検出されたマシンが含まれる Portability Suite Network の名前を入力します。分からない場合は、<Enter> キーを押します。Portability Suite Server はデフォルトネットワークを使用します。

しばらくすると、Portability Suite の [サーバ] ビューには物理ターゲットが表示されます。

Portability Suite Server への物理ターゲットの登録 (Linux)

変更されていない制御の取得 ISO イメージを使用する場合、ターゲットを Portability Suite Server に登録するには、これらの手順を完了します。登録プロセスを自動化するためにイメージを変更する方法については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

- 1 適切な制御の物理ターゲット取得 ISO イメージを CD に書き込むか、指定したメディアに保存して、そこからターゲットをブートできます。[36 ページの i 2-2§ 「ターゲット物理マシンに対する制御の取得 ISO イメージ」](#) を参照してください。
- 2 ISO Ramdisk イメージを使用して、ターゲットマシンをブートします。
- 3 要求されたら、次の構文で Portability Suite Server の URL を入力します。
`http://server_host/PortabilitySuite`
`server_host` を Portability Suite Server の実際のホスト名または IP アドレスで置き換えます。
- 4 Portability Suite Server のご使用の資格情報を入力します。
- 5 スタティック IP アドレスを指定するか、マシンが DHCP サーバからダイナミックに IP アドレスを取得するように指示します。
- 6 ターゲットホストの名前を入力し、使用する既存の Portability Suite Network を指定します。

しばらくすると、Portability Suite の [サーバ] ビューには物理ターゲットが表示されます。

ターゲットの物理マシンの自動登録の実行

Portability Suite では、ターゲットの物理マシンの Portability Suite Server への登録を自動化するメカニズムが提供されます。これには、ターゲットをブートする前に、特定の登録情報を使用した制御の取得 ISO イメージの更新が含まれます。

詳細については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

2.3.7 サーバの同期ジョブ用の Windows VM の検出および準備

2 つの Windows ワークロードを同期させたい場合で、同期のターゲットが仮想マシンの場合、最初に、適切な仮想マシンを検出して登録する必要があります。サーバ同期機能については、[55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」](#) を参照してください。

- 1 仮想マシンサーバ上で、目的のソースワークロードに一致するオペレーティングシステムプロファイルを持つ仮想マシンを作成します。
- 2 仮想マシンホストを検出するか、その詳細を更新します。
- 3 [サーバ] ビューで、仮想マシンサーバの下にある、新しく作成された仮想マシンを右クリックし、[\[同期の準備\]](#) を選択します。
- 4 仮想マシンサーバ用に管理者の資格情報を指定します。
- 5 (オプション) 将来のジョブで使用するために、これらの資格情報を保存する場合は、[\[保存 \(ローカルで暗号化されます\)\]](#) オプションを有効にします。

- 6 (オプション) 仮想マシンサーバ上で利用可能な仮想ネットワークの中から使用するものを選択したり、TCP/IP の設定を行ったりするなど、一時的な制御の取得ネットワークの設定を行うには、[設定] をクリックし、必要に応じてネットワーク設定を行います。
- 7 [準備] をクリックし、ジョブが完了するのを待ちます。
完了すると、[サーバ] ビューの VM ホストの下に新しいサーバ同期ターゲットが一覧表示されます。

2.4 PlateSpin Analyzer を使用したマシンの分析

大規模な変換プロジェクトを開始する前に、起こり得る変換の問題を特定し、事前に修正する必要があります。PlateSpin[®] Analyzer を使用して、検出されたマシンが変換ジョブに適しているかを判断します。

PlateSpin[®] Analyzer を開く

- 1 [ツール] メニューで、[サーバの分析] をクリックします。
[PlateSpin Analyzer] ウィンドウが開きます。
- 2 必要な Portability Suite Network と分析対象のマシンを選択します。
- 3 (オプション) 分析時間を短縮するためには、マシンの範囲を特定の言語に制限します。
- 4 (オプション) 異なる Portability Suite Server のインベントリに含まれるマシンを分析するには、[接続] をクリックし、必要な Portability Suite Server の URL と有効な資格情報を指定します。
- 5 [分析] をクリックします。
検出されたマシンのうちの選択数に応じて、分析には数秒から数分かかります。

分析されたサーバは、右側ペインにリストされます。右側のペインで、テスト結果を表示するサーバを選択します。テスト結果は、次のうちの任意の組み合わせが考えられます。

表 2-3 PlateSpin アナライザのテスト結果に含まれるステータスメッセージ

結果	説明
合格	マシンが PlateSpin [®] アナライザのテストに合格しました。
警告	マシンに関して 1 つ以上のテストで警告が返され、変換に問題がある可能性を示しています。詳細を表示するには、ホスト名をクリックします。
失敗	このマシンに関して、1 つ以上のテストが失敗しました。詳細を表示し、さらに情報を取得するには、ホスト名をクリックします。

[概要] タブには、分析されたマシン数およびチェックされなかったマシン数に加え、テストに合格したマシン数、不合格だったマシン数、または警告ステータスが付加されたマシン数のリストが表示されます。


[テスト結果]  タブには、次の情報が表示されます。

表 2-4 PlateSpin アナライザのテスト結果タブ

セクション	詳細
システムテスト	マシンが Portability Suite のハードウェアおよびオペレーティングシステムの最小限の要件を満たすかを検証します。
ハードウェアサポートを制御します	ソースハードウェアの互換性をチェックします。
ターゲットハードウェアのサポート	ターゲット物理マシンとして使用するのにハードウェアに互換性があるかをチェックします。
ソフトウェアテスト	トランザクション上の整合性を保証するために、ライブ転送の間シャットダウンする必要のあるアプリケーションとデータベースをチェックします。
互換性のないアプリケーションテスト	変換プロセスと競合することが分かっているアプリケーションがシステム上にインストールされていないかを確認します。これらのアプリケーションアイコンは、互換性のないアプリケーションデータベースに保存されています。このデータベース内でエンティティの追加、削除、または編集を行うには、[ツール] メニューから、[互換性のないアプリケーション] を選択します。

[プロパティ] タブには、選択したマシンの詳細が表示されます。

PlateSpin[®] アナライザを使用し、その結果を理解する方法の詳細については、[ナレッジベースの記事 Q20478 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20478\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20478) を参照してください。

2.5 デバイスドライバの使用

Portability Suite には、デバイスドライバのライブラリが付属しており、変換ジョブの実行中、ターゲットに適したデバイスドライバが自動的にインストールされます。必要なドライバが利用可能かどうか判断するには、PlateSpin[®] アナライザを使用します。39 ページの「PlateSpin Analyzer を使用したマシンの分析」を参照してください。

PlateSpin[®] Analyzer が不明な、または互換性のないドライバに遭遇した場合、またはターゲットインフラストラクチャ用の特定のドライバを指定した場合は、Portability Suite ドライバデータベースにドライバを追加 (アップロード) する必要があります。

ドライバを追加する必要がある場合は、次の手順の説明に従ってデバイスドライバマネージャを使用して追加します。

変換ジョブおよびターゲットワークロードを問題なく処理するために、デジタル署名されているドライバのみをアップロードします。次のシステムに使用します。

- ◆ すべての 64 ビット Windows システム
- ◆ 32 ビット版の Windows Vista および Windows Server 2008 システム

注: アップロード時に、Portability Suite では、選択したオペレーティングシステムタイプまたはそのビット仕様に対してドライバを検証しません。ターゲットのインフラストラクチャに適したドライバのみを必ずアップロードしてください。

デバイスドライバデータベースにドライバをアップロードする

- 1 ローカルディレクトリにドライバファイルを保存します。
- 2 [ツール] > [デバイスドライバの管理] の順にクリックします。
[デバイスドライバマネージャ] ウィンドウが開きます。



- 3 必要なオペレーティングシステムに対応するタブを選択してから、当てはまるオペレーティングシステムとターゲットのハードウェアメーカーの詳細を選択します。
- 4 [ドライバのアップロード] をクリックします。
- 5 [デバイスドライバアップローダ] ダイアログボックスを使用して、必要なドライバファイルを保存したディレクトリへのパスを指定します。
- 6 [アップロード]、[OK] の順にクリックします。

2.6 変換後のカスタムアクションの管理

ターゲット上の特定の変換後タスクを自動化するために、バッチファイル、シェルスクリプト、またはプログラムの実行可能ファイルを変換ジョブに含めることができます。変換プロセスの終わりに、Portability Suite によって指定したアクションとその従属ファイルがターゲットにアップロードされ、アクションが実行されます。

変換後のカスタムアクションは、次のジョブタイプでサポートされています。

- ◆ 一度のサーバ同期
- ◆ ピアツーピアワークロード変換

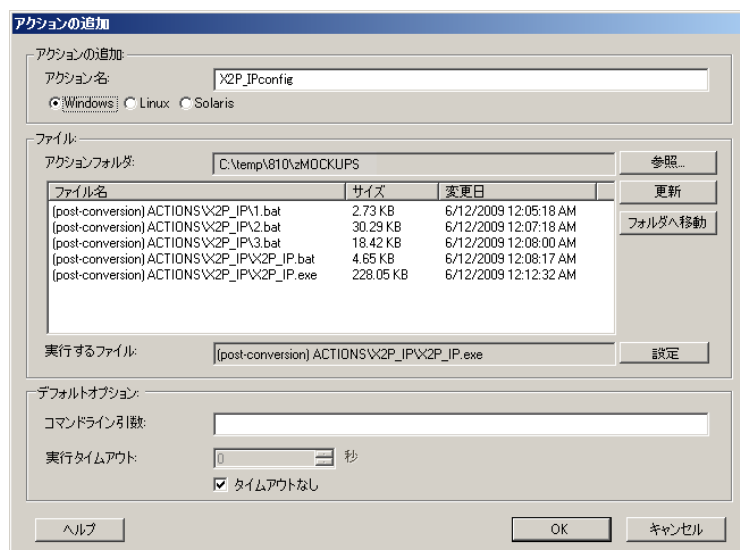
変換ジョブの一部として変換後のアクションを選択できるようにするには、まずアクションとその従属ファイルを専用のディレクトリに保存し、それを Portability Suite Server のライブラリに追加する必要があります。ディレクトリの最大サイズは、64MB を超えないようにしてください。この制限を引き上げる際の詳細については、『構成ガイド』の「Portability Suite Server にアップロードされた変換後のアクションに対するサイズ制限の増加」を参照してください。

Portability Suite Server のカスタムアクションのライブラリに変換後のアクションを追加するには、次の手順を使用します。

- 1 アクションを作成し、それをサンプルのワークロード上でテストし、Portability Suite Server がアクセスできるディレクトリに、従属ファイルとともにそれを保存します。

Linux および Solaris のワークロードの場合、変換後のアクションを作成する際には、特別な注意が必要です。ファイル名に各種の文字を許可し、各種の ACL (Access Control List) 権限をサポートしています。これらのオペレーティングシステムでは、アクションのディレクトリ構造を1つのファイルにまとめます。[ナレッジベースの記事 21121 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=21121\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=21121) を参照してください。

- Portability Suite Client で、[ツール] > [アクションの管理] の順にクリックします。
- [追加] をクリックします。[アクションの追加] ウィンドウが開きます。



- [アクションの追加] ウィンドウで、カスタムアクションの名前を入力し、ターゲットのオペレーティングシステムの種類を選択し、必要なアクションとその従属ファイルを含むディレクトリを参照して選択します。

Portability Suite によって、選択したフォルダの内容がリストに入力されます。

- [ファイル名] カラムで、必要な実行可能ファイルを選択し、[設定] をクリックします。
- [デフォルトオプション] セクションで、必要なコマンドライン引数および実行タイムアウトを指定し、[OK] をクリックします。

Portability Suite によって、ライブラリがパッケージングおよびアップロードされます。

これで、アクションが変換ジョブで選択できるようになりました。[121 ページの「変換ジョブに変換後のカスタムアクションを含める方法」](#) を参照してください。

2.7 ジョブの設定、実行、および管理

ディスクバリ、ワークロードの移植容易性、およびワークロード保護のほとんどのアクションは、Portability Suite のジョブとして定義、実行、および監視されます。

- ◆ [43 ページのセクション 2.7.1 「変換ジョブの設定方法の選択」](#)
- ◆ [46 ページのセクション 2.7.2 「変換ジョブ前の検証」](#)
- ◆ [47 ページのセクション 2.7.3 「変換ジョブの保存」](#)
- ◆ [47 ページのセクション 2.7.4 「保存した変換ジョブをジョブビューで開始」](#)

- ◆ 47 ページのセクション 2.7.5 「保存した変換ジョブの開始時刻の変更」
- ◆ 47 ページのセクション 2.7.6 「完了した変換ジョブまたは進行中の変換ジョブのパラメータの表示」
- ◆ 48 ページのセクション 2.7.7 「進行中のジョブのキャンセル」
- ◆ 48 ページのセクション 2.7.8 「ジョブビューにおけるソースワークロードの状態の制御」
- ◆ 48 ページのセクション 2.7.9 「ジョブ診断の実行」
- ◆ 48 ページのセクション 2.7.10 「ジョブレポートの生成」
- ◆ 49 ページのセクション 2.7.11 「Windows スケジュール済みタスクとバッチファイルを使用したジョブの実行」

2.7.1 変換ジョブの設定方法の選択

次の 2 つのモードのうちの 1 つを使用して、変換ジョブを設定し、ジョブの設定パラメータを指定できます。

- ◆ **詳細モード:** [変換ジョブ] ウィンドウを使用します。ここでは、すべてのジョブ設定パラメータにアクセスできます。
- ◆ **ウィザードモード:** 詳細モードの簡易なサブセットを提供し、変換ジョブに必要な不可欠なパラメータのみを対話的に取得します。

次の各項で、詳細について説明します。

- ◆ 43 ページの 「詳細なジョブ設定モードとウィザードによるジョブ設定モードの相違点」
- ◆ 45 ページの 「変換ジョブの開始」

詳細なジョブ設定モードとウィザードによるジョブ設定モードの相違点

詳細なジョブ設定モードとウィザードによるジョブ設定モードは、利用可能な設定オプションの種類において異なります。

ウィザードモードでは、Portability Suite によって詳細モードの簡易なサブセットが提供され、変換ジョブに必要な不可欠なパラメータが対話的に取得され、それ以前のウィザードページで指定された設定が簡条書きにされ、最後に概要が表示されます。

図 2-6 ウィザードモードにおけるジョブ設定ウィンドウ



詳細モードでは、Portability Suite によって拡張ジョブ設定オプションや、変換ジョブのさまざまな側面に関する詳細設定へのアクセスが提供されます。詳細モードでは、カテゴリにグループ化されたリンクをクリックし、変換ジョブの一部に関する設定にアクセスします。カテゴリの詳細の表示 / 非表示を切り替えるには、カテゴリバーをクリックします。

図 2-7 詳細モードにおけるジョブ設定ウィンドウ



次の拡張ジョブ設定オプションには、詳細モードからはアクセスできますが、ウィザードモードからはアクセスできません。

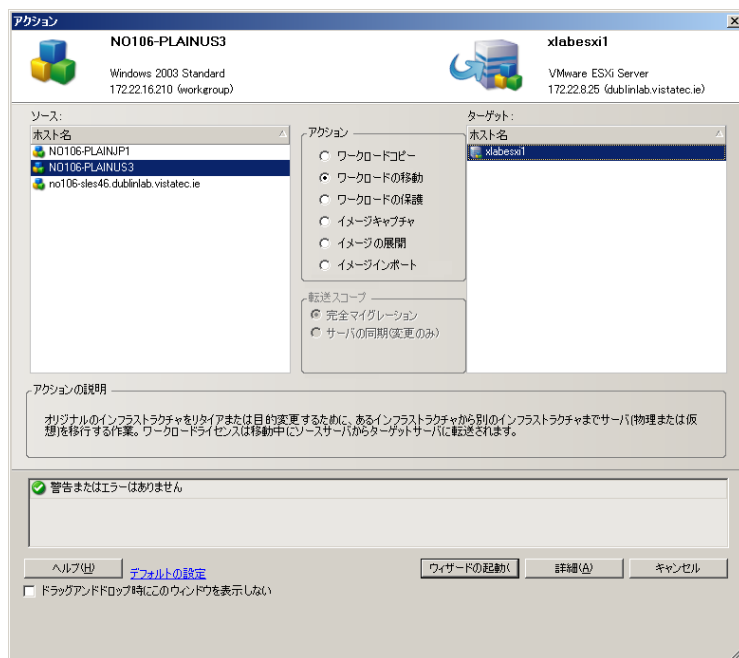
- ◆ デフォルトライセンス以外を変換ジョブに指定します。[83 ページの「マイグレーションまたは保護の変換用ライセンスキーの選択」](#)を参照してください。
- ◆ ジョブの進行状況およびステータスの自動通知を有効化します。[84 ページの「ジョブステータスおよび進行状況の電子メールによる自動通知の設定」](#)を参照してください。
- ◆ ワークロードを保護している場合を除く、ジョブスケジューリングオプションです。[90 ページの「スケジュールおよび同期」](#)を参照してください。
- ◆ ターゲット仮想マシン設定用の詳細オプションです。[98 ページの「仮想化プラットフォーム特有のオプションおよび VM の詳細な環境設定オプション」](#)を参照してください。
- ◆ 後からオンデマンドで実行するためにジョブを保存します。[47 ページの「変換ジョブの保存」](#)を参照してください。

変換ジョブの開始

変換ジョブの設定を開始し、詳細モードまたはウィザードモードのいずれかを選択する方法:

- 1 次のいずれかの方法を使用して、[アクション] ウィンドウを開きます。
 - ◆ 検出されたソースをドラッグし、検出されたターゲットにドロップします。
 - ◆ [タスク] ペインにあるタスクをクリックします。
 - ◆ [新規ジョブ] ツールバーをクリックします。
 - ◆ [ジョブ] ビューで、ソースを右クリックし、コンテキストメニューからコマンドを選択します。利用可能なコマンドは、ソースの種類に依存します。

[アクション] ウィンドウが開きます。



[ソース] および [ターゲット] ペインには、選択された変換ジョブの種類に当てはまるワークロードおよびターゲットが表示されます。

[完全転送] および [サーバ同期] オプションは、次の場合にのみ有効です。

- ◆ システムがターゲット上の既存のオペレーティングシステムを検出する
- ◆ ターゲット上のオペレーティングシステムのプロファイルがソースワークロードのプロファイルと一致する


55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。


- 2 ウィンドウの下部にある検証メッセージをチェックします。
- 3 ウィザードモードまたは詳細モードのいずれかで変換ジョブの設定を開始するには、[ウィザードの起動] または [詳細] をクリックします。
- 4 (オプション) 便宜上、[アクション] ウィンドウをドラッグアンドドロップ時に表示させないようにするには、続行する前に [ドラッグアンドドロップで表示しない] を選択します。それ以降のドラッグアンドドロップでは、[アクション] ウィンドウが表示されず、[変換ジョブ] ウィンドウが詳細モードで直接開きます。

ジョブ変換の起動動作を元に戻すには、アプリケーションのデフォルトを復元します。『構成ガイド』の「一般オプション」を参照してください。

2.7.2 変換ジョブ前の検証

変換ジョブを開始する際、Portability Suite によって、ジョブタイプ、ソース、ターゲット、および選択したパラメータが検証され、エラーおよび警告が生成される可能性があります。

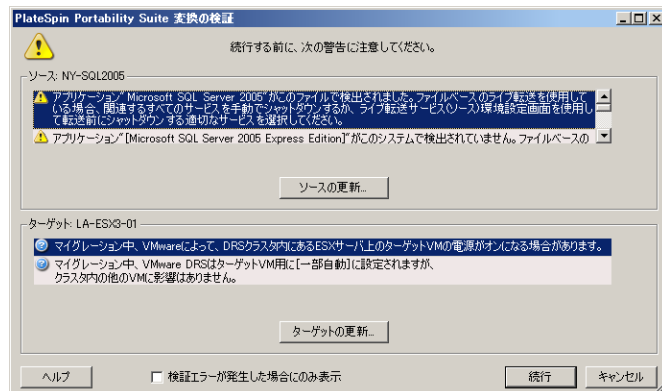
 エラーのマーカは、変換ジョブを開始する前に変更が必要な設定を示します。

 警告のマーカは、変換を開始する前に確認が必要な設定についての警告を示します。

Portability Suite のデフォルト設定では、検証メッセージは、[アクション] ウィンドウの下部に表示されます。ステップ 1 を参照してください。

ドラッグアンドドロップ時に、Portability Suite に [アクション] ウィンドウが表示されないように設定した場合は、エラーおよび警告は別のウィンドウに表示されます。

図 2-8 変換の検証ウィンドウ

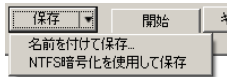


エラー発生時にのみこのウィンドウが開くように強制するには、*[検証エラーが発生した場合にのみ表示]* オプションを選択します。

2.7.3 変換ジョブの保存

変換ジョブを詳細モードで開始した場合、ジョブを保存した後ほどそれを実行する追加オプションを利用できます。

ジョブに関するすべてのオプションの設定が終了したら、*[保存]* ボタンの右側にある矢印をクリックし、ドロップダウンリストからコマンドを選択します。



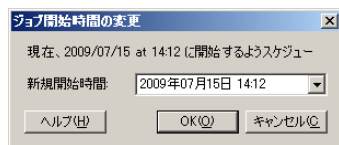
- ◆ **名前を付けて保存** : 変換ジョブを後で実行するには、このオプションを選択します。
- ◆ **NTFS 暗号化を使用して保存** : 変換ジョブを後で実行するには、このオプションを選択します。

2.7.4 保存した変換ジョブをジョブビューで開始

- 1 Portability Suite Client の *[ジョブ]* ビューで、必要な保存済みジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックし、*[起動]* を選択します。
Portability Suite によって、変換ジョブが起動されます。

2.7.5 保存した変換ジョブの開始時刻の変更

- 1 Portability Suite Client の *[ジョブ]* ビューで、必要な保存済みジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックし、*[起動時刻の変更]* を選択します。
[ジョブ開始時間の変更] ダイアログボックスが開きます。



- 3 必要な新しい開始日時を指定し、*[OK]* をクリックします。
Portability Suite によってジョブが再スケジュールされ、指定した時刻に実行されます。

2.7.6 完了した変換ジョブまたは進行中の変換ジョブのパラメータの表示

- 1 Portability Suite Client の *[ジョブ]* ビューで、必要なジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックし、*[表示]* を選択します。
Portability Suite によってジョブ設定ウィンドウが詳細モードで開かれ、ジョブの設定パラメータが読み込み専用モードで表示されます。

2.7.7 進行中のジョブのキャンセル

- 1 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで、必要なジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックし、[中止] を選択します。

2.7.8 ジョブビューにおけるソースワークロードの状態の制御

[ジョブ] ビューで、ソースワークロードを再起動したり、シャットダウンしたりできます。

- 1 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで、必要なジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックして、適宜 [ソースの再起動] または [ソースのシャットダウン] を選択します。

ソースおよびターゲットのワークロードの起動状態を自動化するには、変換ジョブで必要な変換後の状態を指定してください。85 ページの「転送オプションの指定」を参照してください。

2.7.9 ジョブ診断の実行

- 1 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで、必要なジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックして [診断の実行] を選択し、プロセスが終了するのを待ちます。

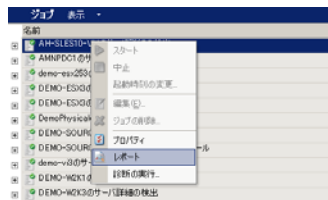
しばらくすると、Portability Suite によって Web ブラウザのウィンドウが開かれます。このウィンドウには、ジョブに関する包括的な診断結果が表示されます。

2.7.10 ジョブレポートの生成

実行中および完了したジョブの詳細なレポートを生成できます。レポートには、ジョブで実行されたタスクが記録されます。

ジョブレポートを生成する方法：

- 1 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで、必要なジョブを探します。
- 2 ジョブを右クリックし、[レポート] を選択します。



Web ブラウザのウィンドウに、要求したレポートが表示されます。

2.7.11 Windows スケジュール済みタスクとバッチファイルを使用したジョブの実行

Windows スケジュール済みタスクとバッチファイルを使用して、ジョブをスケジュールおよび実行できます。スケジュールされた時間に、Windows がバッチファイルを呼び出し、これにより Portability Suite がコンソールモードで起動され、指定したジョブが実行されます。

- 1 必要なジョブを設定および保存し、ハードドライブ上のその位置をメモします。
- 2 テキストエディタを使用して、次の行を含むバッチファイルを作成します。
`PortabilitySuite.Console.exe run /job="path_to_job_file"`
`path_to_job_file` を必要なジョブファイルへの実際のパスに置き換えます。
- 3 バッチファイルに名前を付け、PortabilitySuite.Console.exe アプリケーションと同じ次のディレクトリに保存します。
`..\PlateSpin Portability Suite Client\CommandLine`
- 4 Windows スケジュール済みタスクを使用して、希望日時にバッチファイルを実行するタスクを設定します。Windows スケジュール済みタスクに関する詳細については、Windows のマニュアルを参照してください。

次に、バッチファイルのコマンド例を示します。

```
PortabilitySuite.Console.exe run /job=
"C:\documents and settings\Administrator\Local Settings\
Application Data\PlateSpin ULC\PlateSpin PortabilitySuite\8.0.0.xxxx\
jobs\4f035cda-5c2b-4b73-9923-148ba743e560\32025d86-8850-4c79-8bf3-
bb9c22b0ac1d.job"
```


ピアツーピアのワークロード変換を使用したポータビリティおよび保護

ピアツーピアは、ワークロードのポータビリティおよび保護の操作を参照し、物理ハードウェアまたは仮想マシン上でブートされたワークロード、またはブート可能なワークロードが生成されます。P2P、P2V、V2V、および V2V 変換は、すべてピアツーピアです。

このセクションでは、ピアツーピアのワークロードの移植容易性および保護のジョブと成功事例について説明します。

- 51 ページのセクション 3.1 「仮想マシンへのワークロードの変換 (P2V、V2V)」
- 52 ページのセクション 3.2 「物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)」
- 53 ページのセクション 3.3 「仮想化による Windows ワークロード保護」
- 54 ページのセクション 3.4 「ワークロード保護契約の管理」
- 55 ページのセクション 3.5 「サーバ同期を持つワークロードの同期」
- 57 ページのセクション 3.6 「X2P により半自動化されたワークロードの仮想化」

3.1 仮想マシンへのワークロードの変換 (P2V、V2V)

ピアツーピアのワークロード仮想化変換ジョブの開始方法：

- 1 ソースワークロードおよびターゲット VM ホストを検出または更新します。32 ページの「ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出」を参照してください。
- 2 変換ジョブを開始します。43 ページの「変換ジョブの設定方法の選択」を参照してください。
- 3 ジョブの必須パラメータを設定します。83 ページの「ワークロードマイグレーションおよび保護ジョブの要点」を参照してください。
- 4 (オプション) ビジネスを継続させる目的でワークロードを仮想マシンに変換する場合は、増分同期を有効にします。90 ページの「スケジュールおよび同期」を参照してください。
- 5 ジョブを実行します。

図 3-1 ピアツーピア変換ジョブのウィンドウ (詳細モードでのP2V)

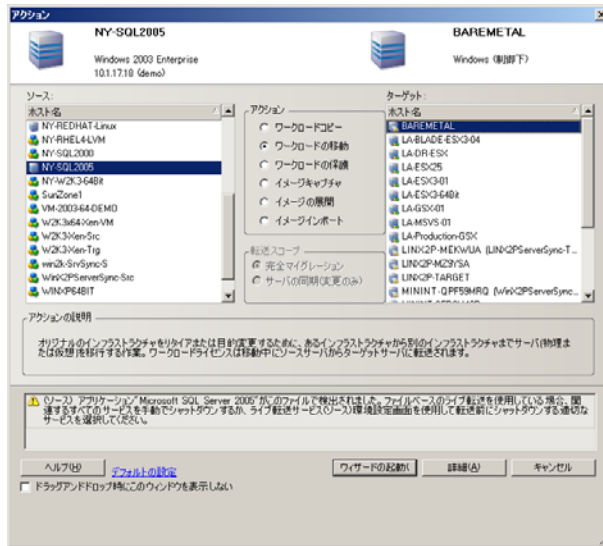


3.2 物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)

物理マシンへのピアツーピアのワークロード変換を開始する方法

- 1 ソースワークロードを検出します。32 ページの「ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出」を参照してください。
- 2 ターゲットの物理マシンを検出し、Portability Suite に登録します。36 ページの「ターゲット物理マシンの検出および登録」を参照してください。
- 3 (推奨)PlateSpin[®] アナライザを使用して次の内容を確認します。
 - ◆ ソースのオペレーティングシステムおよびハードウェアが、Portability Suite でサポートされています。
 - ◆ Portability Suite の X2P デバイスドライバライブラリには、ターゲットが移植されるオペレーティングシステムに必要なデバイスドライバが含まれています。
 39 ページの「PlateSpin Analyzer を使用したマシンの分析」を参照してください。
- 4 (条件付き) 物理ターゲットのドライバが不明な場合は、Portability Suite の X2P デバイスドライバライブラリに必要なドライバをアップロードします。40 ページの「デバイスドライバの使用」を参照してください。
- 5 変換ジョブを開始します。43 ページの「変換ジョブの設定方法の選択」を参照してください。
- 6 ジョブの必須パラメータを設定します。83 ページの「ワークロードマイグレーションおよび保護ジョブの要点」を参照してください。
- 7 ジョブを実行します。

図 3-2 ピアツーピア変換ジョブのウィンドウ (詳細モードでの V2P)



3.2.1 成功事例 (X2P)

- ◆ あるベンダから、別のベンダのターゲットのハードウェアインフラストラクチャにワークロードを移行する場合 (たとえば、HP* から Dell へ)、またはソースが仮想マシンの場合、転送する間はベンダ特有または VM 特有のサービスを必ず無効にしてください。たとえば、HP Insight サービスおよび VMware Tools サービスなどです。**102 ページの「オペレーティングシステムのサービスとアプリケーションの処理」**を参照してください。
- ◆ P2P および V2P マイグレーションに対して制御の取得転送方法を使用する場合、ネットワークの全二重モードに適合する全二重速度を必ず選択してください。**91 ページの「変換ネットワークの設定」**を参照してください。
- ◆ ベンダのパーティションがソースからコピーされていないことを確認します。**109 ページの「ワークロードのストレージメディアとボリュームの処理」**を参照してください。

3.3 仮想化による Windows ワークロード保護

ピアツーピアのワークロード保護は、仮想マシンインフラストラクチャに対するワークロードの移植容易性の機能の 1 つです。ライブ転送メソッドを使用してワークロードを仮想マシンに変換すると同時に、ターゲット仮想マシンを繰り返しスケジュールで増分的に更新するために変換ジョブ内にオプションの保護契約を確立します。**90 ページの「スケジュールおよび同期」**を参照してください。

ソースワークロードからターゲットへのデータ転送の範囲の観点から、次の 2 つの方法のいずれかを使用してワークロードを保護できます。

- ◆ **P2V または V2V の直接変換**：この方法を使ってワークロードを保護するには、ワークロードを仮想マシンに変換し、増分同期を変換ジョブのパラメータとして使用できます。変換プロセス時には、Portability Suite によってソースマシンの最初の仮想レブ

リカの作成、ワークロードの VM への転送、および指定した同期スケジュールに従ったワークロードの定期的な更新が行われます。51 ページの「仮想マシンへのワークロードの変換 (P2V、V2V)」を参照してください。

- ◆ **増分同期を使用したサーバの同期の仮想化**：この方法を使ってワークロードを保護するには、サーバ同期ジョブのパラメータとして増分同期を有効にします。サーバ同期ジョブは、ボリュームデータ全体を転送せずに、ソースマシンの最初の仮想レプリカを作成します。この方法は、ソースと既存のベース VM の差異のみを一致する OS プロファイルとともに転送します。これ以降の変更は、指定した同期スケジュールに従って、定期的に同期されます。55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。

いずれの場合も、仮想マシンはウォームバックアップとしてオフラインのまま維持されます。障害復旧プランおよび障害復旧への準備の演習をサポートするために、Portability Suite では、仮想マシンへのワークロードのフェールオーバーをテストし、実装するためのメカニズムが提供されます。54 ページの「ワークロード保護契約の管理」を参照してください。

3.4 ワークロード保護契約の管理

Portability Suite により、ワークロード保護契約を作成し、管理することができます。たとえば、保護契約がアクティブな期間中いつでも、手動で、完全転送および増分転送を実行し、同期スケジュールを中断して再開し、フェールオーバージョブをテストして実行し、ログを表示することができます。

注：仮想化によるワークロード保護は、Windows ワークロードでのみサポートされます。14 ページの「サポートされる Microsoft Windows のワークロード」を参照してください。

- 1 Portability Suite Client のツールバーで、[同期スケジュール] ボタンをクリックします。[同期スケジュール] ウィンドウが開きます。



- 2 管理する同期スケジュールを右クリックし、次のコマンドのいずれかを選択します。

復元テストの実行	保護されたソースサーバのレプリカが有効であることを確認します。この機能は、次のアクションを実行します。 <ol style="list-style-type: none">1. 分離されたネットワークに VM を配置する、またはそれに別の IP アドレスを割り当てるなどの、一時的なネットワーク設定を指定するのに使用できる変換ジョブの作成します。2. VM を元の状態に戻すために、電源を入れる前に VM のスナップショットを作成し、完了後にスナップショットを削除します。ジョブは、NIC 接続設定などの、VM 構成の変更も取り消します。3. スケジュールされた同期を中断して、完了後再開します。
	注: 復元テストを実行する前に、復元テストサーバのサーバ名および IP アドレスを変更するか、そのサーバを別の物理または論理ネットワークに接続します。また、増分転送が一時停止され、復元テストサーバの電源がオフになるまで再開されないことに注意してください。
リストアの実行	ターゲット仮想マシンをオンラインにします。このオプションは、ソースサーバの障害発生時に選択する可能性が最も高いです。簡略化された「変換ジョブ」画面が表示され、この画面では、サーバをオンラインにする前にジョブ設定を変更または確認 (あるはその両方) できます。
完全転送の実行	ソースサーバからターゲット仮想マシンへの完全転送を強制します。
増分転送の実行	増分転送を強制します。
ジョブの編集	増分転送のスケジュールを編集できるようにします。
ログを表示	実行されたさまざまな転送 (初期コピー、完全転送、および増分転送) のステータス情報を表示します。
スケジュールの一時停止	増分転送を一時停止します。
スケジュールの再開	増分転送を再開します。
スケジュールのキャンセル	同期スケジュールをキャンセルします。

注: 同期スケジュールをキャンセルする前に、ターゲット仮想マシンをどのように処理するかを決定する必要があります。仮想マシンを保持するには、スケジュールをキャンセルする前に復元ジョブを実行します。その後、任意の仮想マシンサーバ上で仮想マシンを使用できます。

3.5 サーバ同期を持つワークロードの同期

サーバ同期機能は、ソースからターゲットに転送されるデータの範囲を制御可能にします。たとえば、ワークロードの移植容易性または保護のためのジョブを設定する際には、ボリュームデータ全体を転送せずに、既存の物理または仮想マシンを更新してソースワークロードの状態に一致させる選択ができます。Portability Suite はターゲットの物理または仮想ワークロードを選択したソースと比較し、2つの間で異なるデータのみを転送して、ターゲット上のファイルをソースワークロード上のファイルで上書きします。

次の場合サーバ同期を使用できます。

- ◆ サポートするWindowsまたはLinuxワークロード(1回限りのサーバ同期ジョブ)の1回のマイグレーション
- ◆ 実行中の Windows ワークロードの保護

この機能は、製品ライセンスによって異なります。

サーバ同期は、ボリュームデータのサイズやネットワークの条件によって、ネットワーク経由での直接的なワークロードの仮想化が禁止されるような状況で役立ちます。

サーバ同期ジョブを実行する

- 1 ソースワークロードを検出します。32 ページの「ソースワークロードおよびマイグレーションターゲットの検出」を参照してください。
- 2 (条件) 目的のターゲットが仮想マシンの場合：
 - 2a 次のいずれかの方法を使用して、ターゲット仮想マシンを作成します。
 - ◆ 仮想マシンへのワークロードの初期変換を行います。51 ページの「仮想マシンへのワークロードの変換 (P2V、V2V)」を参照してください。
 - ◆ 仮想化プラットフォームのネイティブインタフェースを使用して、ソースと同じオペレーティングシステムのプロファイルを持つ仮想マシンを手動でインストールします。
 - ◆ ワークロードを柔軟なイメージにキャプチャし、仮想化プラットフォーム上の仮想マシンにそれを展開します。69 ページの「柔軟なイメージへのワークロードのキャプチャ」および 74 ページの「柔軟なイメージの展開」を参照してください。
 - 2b ターゲット VM を同期用に検出し準備します。38 ページの「サーバの同期ジョブ用の Windows VM の検出および準備」を参照してください。
- 3 (条件) 目的のターゲットが物理マシンの場合、制御の取得 ISO ブートイメージを使用して、物理ターゲットを検出します。36 ページの「ターゲット物理マシンの検出および登録」を参照してください。
- 4 [サーバ] ビューで、ソースワークロードをドラッグし、必要なターゲット (サーバ同期ターゲットまたは検出された制御下の物理マシン) にドロップします。

オペレーティングシステムがターゲット上で検出された場合で、検出されたオペレーティングシステムがソースのそれと一致する場合は、転送するデータの範囲を選択するように要求されます。(完全なソースボリュームデータまたはソースとターゲット間で異なるファイルのみ)。
- 5 [サーバ同期] オプションを選択してから、[開始] をクリックします。

サーバ同期ジョブが詳細モードで開始されます。
- 6 ジョブのパラメータを処理の目的に応じて構成します。ソース上の必要なボリュームをターゲット上のそれにマップすることを確認します。
- 7 (条件) VM に対してワークロードを保護している場合、増分同期を有効にします。90 ページの「スケジュールおよび同期」を参照してください。
- 8 [開始] をクリックします。

Portability Suite は、ジョブを開始し [ジョブ] ビューに一覧表示します。

3.6 X2P により半自動化されたワークロードの仮想化

半自動とは、ワークロードのターゲットインフラストラクチャが、Portability Suite が物理マシンと見なす仮想マシンであるワークロードの仮想化プロセスを指します。これは、次の仮想化プラットフォームに適用されます。

- ◆ Microsoft Hyper-V
- ◆ Xen Hypervisor on SUSE® Linux Enterprise Server (SLES) 10
- ◆ Virtual Iron

ワークロードをこれらのいずれかのプラットフォームに移行する

- 1 必要な仮想化プラットフォームのネイティブインタフェースを使用して、オペレーティングシステムプロファイルが、ソースワークロードのそれと一致するような仮想マシンを作成します。
- 2 適切な Novell® PlateSpin® 制御の取得 ISO イメージを使用して、新たに作成された仮想マシンをブートします。

これにより、ターゲット仮想マシンが Portability Suite の物理マシンのターゲットとして検出および登録されます。これは、36 ページの「[ターゲット物理マシンの検出および登録](#)」で説明したプロセスに似ています。ただし、物理ハードウェアをブートするために、ISO イメージから -ROM を作成する代わりに、VM ホストにイメージを保存し、それを使用してターゲット VM をブートします。

- 3 Portability Suite Client を使用して、X2P 変換ジョブを作成および実行します。
- 4 変換ジョブが完了したら、ターゲットの仮想化プラットフォームに特有の仮想化拡張ソフトウェアをインストールします。

次の各項では、関係する特定の仮想化プラットフォームへのワークロードの移行に関する追加の注意事項について説明します。

- ◆ [57 ページのセクション 3.6.1 「Microsoft Hyper-V へのワークロードの移行」](#)
- ◆ [60 ページのセクション 3.6.2 「SLES 上の Xen Hypervisor へのワークロードの移行」](#)
- ◆ [63 ページのセクション 3.6.3 「Virtual Iron へのワークロードの移行」](#)

3.6.1 Microsoft Hyper-V へのワークロードの移行

半自動のワークロード仮想化においては、Microsoft Hyper-V をターゲットの仮想化プラットフォームとして使用できます。

前提条件：

- ◆ ソースワークロードは、Portability Suite および Hyper-V によってサポートされます。[16 ページの「サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム」](#)を参照してください。

追加情報：

- ◆ [Microsoft Hyper-V スタートアップガイド \(http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc732470.aspx\)](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc732470.aspx)
- ◆ [Hyper-V を使用した仮想化 \(http://www.microsoft.com/windowsserver2008/en/us/hyperv.aspx\)](http://www.microsoft.com/windowsserver2008/en/us/hyperv.aspx)

このセクションでは、次のトピックについて説明します。

- ◆ [58 ページの「制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 \(Hyper-V\)」](#)
- ◆ [58 ページの「ターゲット仮想マシンの作成および設定 \(Hyper-V\)」](#)
- ◆ [59 ページの「Portability Suite Server への仮想マシンの登録 \(Hyper-V\)」](#)
- ◆ [60 ページの「ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 \(Hyper-V\)」](#)
- ◆ [60 ページの「変換後の手順 \(Hyper-V\)」](#)

制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 (Hyper-V)

- 1 ワークロードに適した制御の取得 ISO イメージをダウンロードします。[36 ページの図表 2-2](#) を参照してください。
- 2 (オプション) ターゲットの自動登録を実行する場合は、必要な登録パラメータで ISO イメージを更新します。[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。
- 3 Hyper-V サーバがアクセスできる場所に ISO イメージを保存します。たとえば、c:\temp などの場所です。
これにより、ターゲット VM は、制御の取得 ISO イメージをブート可能な CD-ROM イメージとして使用できるようになります。

ターゲット仮想マシンの作成および設定 (Hyper-V)

- 1 Hyper-V Manager の新しい仮想マシンウィザードを使用して、次の設定で新しい仮想マシンを作成します。
 - ◆ **名前と場所**：新しいターゲットに名前を指定し、デフォルトの場所を承認します。
 - ◆ **メモリの割り当て**：VM に少なくとも 384MB の RAM を割り当てます。
 - ◆ **仮想ハードディスクの接続**：仮想ディスクのサイズが、ソースワークロードのシステムディスク以上になるように n します。
 - ◆ **インストールオプション**：VM が ISO イメージファイルからブートされるように設定し、ダウンロードされた制御の取得 ISO イメージにウィザードをポイントします。
 - ◆ **概要**：作成後に VM が開始されないように設定します ([仮想マシンを作成後に開始] オプションを選択解除します)。
- 2 VM の作成後に、デフォルト NIC を削除してレガシーネットワークアダプタと呼ばれる一般的なものに置き換えます。
新しい仮想マシンウィザードでは、現在、Portability Suite ではサポートされていない Microsoft のカスタムタイプの NIC が作成されるので、この操作が必要になります。
- 3 新しく追加された NIC (レガシーネットワークアダプタ) を外部の仮想ネットワークに接続します。

4 VMを開始し、仮想マシン接続コンソールを使用してブートプロセスを監視します。

仮想マシンがブートプロセスを完了すると、Portability Suite へのマシンの登録を制御するパラメータおよびそのプロファイルが要求されます。自動登録プロセスを使用している場合は、必要なパラメータがアンサーファイルから読み込まれます。

Portability Suite Server への仮想マシンの登録 (Hyper-V)

変更されていない制御の取得 ISO イメージを使用する場合、ターゲットを Portability Suite Server に登録するには、これらの手順を完了します。登録プロセスを自動化するためにイメージを変更する方法については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

1 Hyper-V 仮想マシン接続コンソール内のコマンドラインにおいて、次の個別プロンプトごとに必要な情報を入力します。

- ◆ **ブロック転送** : ブロックレベルでデータを転送するには「Y」を入力し、ファイルレベルでデータを転送するには「N」を入力します。ブロックレベルの転送を選択すると、ブロックベースのライブ転送方法 (VSS ブロックベースのライブ転送方法ではなく) が適用されます。17 ページの「サポートされる転送方法」を参照してください。
- ◆ **Portability Suite Server**: 使用する構文は次のとおりです。
`http://server_host/PortabilitySuite`
server_host を Portability Suite Server の実際のホスト名または IP アドレスで置き換えます。
- ◆ **資格情報 (ユーザ名 / パスワード)**: ドメイン名またはマシン名を含む、Portability Suite Server ホスト上の管理者レベルユーザの名前を入力します。たとえば、`domain\username` または `localhost\Administrator` のように入力します。指定したユーザの有効なパスワードを入力します。
- ◆ **ネットワークカード** : アクティブなネットワークカードを選択し、このカードの静的な一時的 IP アドレスを入力するか、<Enter> キーを押して DHCP サーバを使用します。
- ◆ **一時的なホスト名** : 新しく登録された VM をリストするのに使用される Portability Suite Client 用の一時的な VM 名を入力します。この名前は、変換ジョブで選択したワークロードのターゲットホスト名により上書きされます。
- ◆ **SSL 暗号化** : SSL 暗号化が有効になったホスト上に Portability Suite がインストールされている場合、「Yes」を入力します。それ以外の場合は、「No」を入力します。
- ◆ **Portability Suite Network**: Portability Suite Client 内に独自の Portability Suite Network を定義していないのであれば、<Enter> キーを押します。デフォルト以外の Portability Suite Network を使用する場合は、その名前を入力して <Enter> キーを押します。

ターゲット仮想マシン上のコントローラは、Portability Suite Server と通信し、仮想マシンを変換ジョブの物理ターゲットとして登録します。

ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 (Hyper-V)

- 1 Portability Suite Client を使用して、X2P 変換ジョブを開始します。この時、ソースワークロードをジョブの変換ソースとして使用し、ターゲットを Hyper-V 上の新しい VM として使用します。52 ページの「物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)」を参照してください。
- 2 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで変換ジョブを監視します。
ジョブが [ターゲットマシンの設定] の手順に達すると、仮想マシンのコンソールは、制御の取得 ISO イメージのブートプロンプトに戻ります。
- 3 仮想マシンをシャットダウンし、ブートイメージからではなくディスクからブートするように再設定し、[インストールされている VS ツール] オプションを選択解除します。
- 4 仮想マシンの電源をオンにします。
変換ジョブが再開し、ターゲットが再起動され、ワークロードの設定が完了します。

変換後の手順 (Hyper-V)

Hyper-V 統合サービス (仮想化拡張ソフトウェア) をインストールします。詳細については、『Microsoft Hyper-V スタートアップガイド』を参照してください。

3.6.2 SLES 上の Xen Hypervisor へのワークロードの移行

半自動ワークロード仮想化において、SLES 上の Xen Hypervisor をターゲットの仮想化プラットフォームとして使用できます。

前提条件:

- ◆ ターゲットは、(疑似ではなく)完全に仮想化された仮想マシンです。
- ◆ ソースワークロードは、Portability Suite および Xen hypervisor によってサポートされません。を参照してください。16 ページの「サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム」を参照してください。

追加情報:

- ◆ Xen による仮想化 (http://www.novell.com/documentation/sles10/xen_admin/index.html?page=/documentation/sles10/xen_admin/data/bookinfo.html)

このセクションでは、次のトピックについて説明します。

- ◆ 60 ページの「制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 (SLES 上の Xen)」
- ◆ 61 ページの「ターゲット仮想マシンの作成および設定 (SLES 上の Xen)」
- ◆ 62 ページの「Portability Suite Server への仮想マシンの登録 (SLES 上の Xen)」
- ◆ 62 ページの「ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 (SLES 上の Xen)」
- ◆ 63 ページの「変換後の手順 (SLES 上の Xen)」

制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 (SLES 上の Xen)

- 1 ワークロードに適した制御の取得 ISO イメージをダウンロードします。36 ページの図表 2-2 を参照してください。

- 2 (オプション) ターゲットの自動登録を実行する場合は、必要な登録パラメータで ISO イメージを更新します。ナレッジベースの記事 20832 (<http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832>) を参照してください。
- 3 ダウンロードされたイメージファイルを次のディレクトリに保存します。
`/var/lib/xen/images`

ターゲット仮想マシンの作成および設定 (SLES 上の Xen)

- 1 SLES 10 では、仮想マシンマネージャウィザードまたは仮想マシン作成プログラムへのショートカットを使用して、新しい仮想マシンを作成し、ソースのプロファイルに一致するオペレーティングシステムをインストールします。

新しい仮想マシンが次の設定で作成されるようにしてください。

- **仮想化の方法** : 完全に仮想化されます。
 - **メモリ** : VM に少なくとも 384MB の RAM を割り当てます。これにより、変換時に VM が十分なリソースを確保でき、転送スピードが向上します。変換後、仮想マシンがそれまでのようにはメモリを必要としなくなった場合、変換が完了した後に割り当てられているメモリを減少させます。
 - **Disks** : ソースワークロードの要件に応じて、1 つ以上のディスクを割り当てます。ストレージは、ロー SAN LUN か仮想ディスクのいずれかが可能です。また、ダウンロードされた制御の取得 ISO イメージに割り当てられた仮想 CD-ROM を作成します。
 - **オペレーティングシステム** : ソースワークロードのオペレーティングシステムプロファイルと一致する必要があります。
- 2 VM の設定を xend データベースからテキストファイルにエクスポートし、`on_reboot` パラメータを `restart` に設定することで、再起動時に VM が再起動される設定にします。再起動されない場合は、VM をシャットダウンし、設定を更新してからそれらを xend データベースに再インポートします。

詳細な指示については、SLES 10 のマニュアルの「[Configuring a Virtual Machine by Modifying its xend Settings](http://www.novell.com/documentation/sles10/xen_admin/index.html?page=/documentation/sles10/xen_admin/data/sec_xen_virtualization_xend_vmachine.html) (http://www.novell.com/documentation/sles10/xen_admin/index.html?page=/documentation/sles10/xen_admin/data/sec_xen_virtualization_xend_vmachine.html)」を参照してください。

- 3 仮想マシンマネージャから、仮想マシンコンソールを起動し、ブートプロセスを監視します。

仮想マシンがブートプロセスを完了すると、Portability Suite へのマシンの登録を制御するパラメータおよびそのプロファイルが要求されます。自動登録プロセスを使用している場合は、必要なパラメータがアンサーファイルから読み込まれます。

Portability Suite Server への仮想マシンの登録 (SLES 上の Xen)

変更されていない制御の取得 ISO イメージを使用する場合、ターゲットを Portability Suite Server に登録するには、これらの手順を完了します。登録プロセスを自動化するためにイメージを変更する方法については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

1 コマンドラインで、次の個別プロンプトごとに必要な情報を入力します。

- ◆ **ブロック転送:** ブロックレベルでデータを転送するには「Y」を入力し、ファイルレベルでデータを転送するには「N」を入力します。ブロックレベルの転送を選択すると、ブロックベースのライブ転送方法 (VSS ブロックベースのライブ転送方法ではなく) が適用されます。17 ページの「サポートされる転送方法」を参照してください。
- ◆ **Portability Suite Server:** 使用する構文は次のとおりです。
`http://server_host/PortabilitySuite`
`server_host` を Portability Suite Server の実際のホスト名または IP アドレスで置き換えます。
- ◆ **資格情報 (ユーザ名 / パスワード):** ドメイン名またはマシン名を含む、Portability Suite Server ホスト上の管理者レベルユーザの名前を入力します。たとえば、`domain\username` または `localhost\Administrator` のように入力します。指定したユーザの有効なパスワードを入力します。
- ◆ **ネットワークカード:** アクティブなネットワークカードを選択し、このカードの静的な一時的 IP アドレスを入力するか、<Enter> キーを押して DHCP サーバを使用します。
- ◆ **一時的なホスト名:** 新しく登録された VM をリストするのに使用される Portability Suite Client 用の一時的な VM 名を入力します。この名前は、変換ジョブで選択したワークロードのターゲットホスト名により上書きされます。
- ◆ **SSL 暗号化:** SSL 暗号化が有効になったホスト上に Portability Suite がインストールされている場合、「Yes」を入力します。それ以外の場合は、「No」を入力します。
- ◆ **Portability Suite Network:** Portability Suite Client 内に独自の Portability Suite Network を定義していないのであれば、<Enter> キーを押します。デフォルト以外の Portability Suite Network を使用する場合は、その名前を入力して <Enter> キーを押します。

ターゲット仮想マシン上のコントローラは、Portability Suite Server と通信し、仮想マシンを変換ジョブの物理ターゲットとして登録します。

ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 (SLES 上の Xen)

- 1 Portability Suite Client を使用して、X2P 変換ジョブを開始します。この時、ソースワークロードをジョブの変換ソースとして使用し、ターゲットを Xen hypervisor 上の新しい VM として使用します。52 ページの「物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)」を参照してください。
- 2 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで変換ジョブを監視します。
ジョブが [ターゲットマシンの設定] の手順に達すると、仮想マシンのコンソールは、制御の取得 ISO イメージのブートプロンプトに戻ります。

- 3 仮想マシンをシャットダウンし、ブートイメージからではなくディスクからブートするように再設定し、[インストールされている VS ツール] オプションを選択解除します。
- 4 仮想マシンの電源をオンにします。
変換ジョブが再開し、ターゲットが再起動され、ワークロードの設定が完了します。

変換後の手順 (SLES 上の Xen)

Xen 用の SUSE ドライバ (仮想化拡張ソフトウェア) をインストールします。詳細については、次のオンラインマニュアルを参照してください。

Xen による仮想化 (http://www.novell.com/documentation/sles10/xen_admin/index.html?page=documentation/sles10/xen_admin/data/bookinfo.html).

3.6.3 Virtual Iron へのワークロードの移行

半自動のワークロード仮想化においては、Virtual Iron をターゲットの仮想化プラットフォームとして使用できます。

前提条件:

- ◆ ソースワークロードは、Portability Suite および Virtual Iron によってサポートされます。を参照してください。16 ページの「サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム」を参照してください。

追加情報:

- ◆ *Virtual Iron の管理者ガイド*

このセクションでは、次のトピックについて説明します。

- ◆ 63 ページの「制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 (Virtual Iron)」
- ◆ 64 ページの「ターゲット仮想マシンの作成および設定 (Virtual Iron)」
- ◆ 64 ページの「Portability Suite Server への仮想マシンの登録 (Virtual Iron)」
- ◆ 65 ページの「ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 (Virtual Iron)」
- ◆ 65 ページの「変換後の手順 (Virtual Iron)」

制御の取得ブート ISO イメージのダウンロードと保存 (Virtual Iron)

- 1 ワークロードに適した制御の取得 ISO イメージをダウンロードします。36 ページの図表 2-2 を参照してください。
- 2 (オプション) ターゲットの自動登録を実行する場合は、必要な登録パラメータで ISO イメージを更新します。ナレッジベースの記事 20832 (<http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832>) を参照してください。
- 3 次のように、ISO イメージを適切なディレクトリに保存します。
 - ◆ Linux の仮想化マネージャ用: /opt/VirtualIron/nbd
 - ◆ Windows の仮想化マネージャ用: ..\Program Files\nbd

これにより、ターゲット仮想マシンのブートオプションとして、制御の取得 ISO イメージを使用できるようになります。

ターゲット仮想マシンの作成および設定 (Virtual Iron)

- 1 Virtual Iron の仮想マネージャを使用し、次の設定で新しい仮想サーバを作成します。
 - ◆ **ストレージ**: ソースワークロードの要件に応じて、1 つ以上のディスクを割り当てます。ストレージは、ロー SAN LUN か仮想ディスクのいずれかが可能です。
 - ◆ **仮想メモリ**: VM に少なくとも 384MB の RAM を割り当てます。これにより、変換時に VM が十分なリソースを確保でき、転送スピードが向上します。変換後、仮想マシンがそれまでのようにはメモリを必要としなくなった場合は、Virtual Iron の仮想化マネージャを使用して割り当てられているメモリを減少させます。
 - ◆ **オペレーティングシステム**: ソースワークロードのオペレーティングシステムプロファイルと一致する必要があります。
 - ◆ **インストールされている VS ツール**: このオプションは、選択解除されていることを確認します。変換後、仮想化拡張ソフトウェアをインストールする必要があります。
 - ◆ **ブートオプション**: [ネットワーク (イメージ) ブート] オプションを選択し、ダウンロードして保存した *.iso イメージファイルを選択します。
- 2 設定が完了したら、新しい仮想マシンをコミットします。
- 3 選択した仮想マシンのコンソールを起動し、ブートプロセスを監視します。

仮想マシンがブートプロセスを完了すると、Portability Suite へのマシンの登録を制御するパラメータおよびそのプロファイルが要求されます。自動登録プロセスを使用している場合は、必要なパラメータがアンサーファイルから読み込まれます。

Portability Suite Server への仮想マシンの登録 (Virtual Iron)

変更されていない制御の取得 ISO イメージを使用する場合、ターゲットを Portability Suite Server に登録するには、これらの手順を完了します。登録プロセスを自動化するためにイメージを変更する方法については、[ナレッジベースの記事 20832 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20832) を参照してください。

- 1 コマンドラインで、次の個別プロンプトごとに必要な情報を入力します。
 - ◆ **ブロック転送**: ブロックレベルでデータを転送するには「Y」を入力し、ファイルレベルでデータを転送するには「N」を入力します。ブロックレベルの転送を選択すると、ブロックベースのライブ転送方法 (VSS ブロックベースのライブ転送方法ではなく) が適用されます。17 ページの「サポートされる転送方法」を参照してください。
 - ◆ **Portability Suite Server**: 使用する構文は次のとおりです。

```
http://server_host/PortabilitySuite
```

server_host を Portability Suite Server の実際のホスト名または IP アドレスで置き換えます。
 - ◆ **資格情報 (ユーザ名 / パスワード)**: ドメイン名またはマシン名を含む、Portability Suite Server ホスト上の管理者レベルユーザの名前を入力します。たとえば、*domain\username* または *localhost\Administrator* のように入力します。指定したユーザの有効なパスワードを入力します。
 - ◆ **ネットワークカード**: アクティブなネットワークカードを選択し、このカードの静的な一時的 IP アドレスを入力するか、<Enter> キーを押して DHCP サーバを使用します。

- ◆ **一時的なホスト名** : 新しく登録された VM をリストするのに使用される Portability Suite Client 用の一時的な VM 名を入力します。この名前は、変換ジョブで選択したワークロードのターゲットホスト名により上書きされます。
- ◆ **プロセッサの数** : ソースワークロードに対して、Virtual Iron 上でゲストとしてサポートされているプロセッサ数を入力します。
- ◆ **SSL 暗号化** : SSL 暗号化が有効になったホスト上に Portability Suite がインストールされている場合、「Yes」を入力します。それ以外の場合は、「No」を入力します。
- ◆ **Portability Suite Network** : Portability Suite Client 内に独自の Portability Suite Network を定義していないのであれば、<Enter> キーを押します。デフォルト以外の Portability Suite Network を使用する場合は、その名前を入力して <Enter> キーを押します。
ターゲット仮想マシン上のコントローラは、Portability Suite Server と通信し、仮想マシンを変換ジョブの物理ターゲットとして登録します。

ターゲット仮想マシンへのソースワークロードの移行 (Virtual Iron)

- 1 Portability Suite Client を使用して、X2P 変換ジョブを開始します。この時、ソースワークロードをジョブの変換ソースとして使用し、ターゲットを Virtual Iron 上の新しい VM として使用します。52 ページの「物理マシンへのワークロードの変換 (P2P、V2P)」を参照してください。
- 2 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで変換ジョブを監視します。
ジョブが [ターゲットマシンの設定] の手順に達すると、仮想マシンのコンソールは、制御の取得 ISO イメージのブートプロンプトに戻ります。
- 3 仮想マシンをシャットダウンし、ブートイメージからではなくディスクからブートするように再設定し、[インストールされている VS ツール] オプションを選択解除します。
- 4 仮想マシンの電源をオンにします。
変換ジョブが再開し、ターゲットが再起動され、ワークロードの設定が完了します。

変換後の手順 (Virtual Iron)

VSTools(仮想化拡張ソフトウェア) をインストールします。ゲストオペレーティングシステムがブートするディスクに、VSTools をインストールする必要があります。詳細については、『Virtual Iron 管理者ガイド』を参照してください。

柔軟なイメージを使用したポータビリティおよび保護

このセクションでは、ワークロード保護およびポータビリティに PlateSpin® Flexible Image ボリュームアーカイビング機能を使用する方法について説明します。

- ◆ 67 ページのセクション 4.1 「柔軟なイメージについて」
- ◆ 68 ページのセクション 4.2 「Flexible Image Server の指定」
- ◆ 69 ページのセクション 4.3 「柔軟なイメージへのワークロードのキャプチャ」
- ◆ 71 ページのセクション 4.4 「ローボリュームデータまたは既存のボリュームデータを使用したイメージの作成」
- ◆ 74 ページのセクション 4.5 「柔軟なイメージの展開」
- ◆ 75 ページのセクション 4.6 「増分イメージング」
- ◆ 79 ページのセクション 4.7 「柔軟なイメージの管理」

4.1 柔軟なイメージについて

Portability Suite の 3 つの基本的なワークロードインフラストラクチャの 1 つである PlateSpin® Flexible Image とは、ボリュームデータに加えて、ソースサーバのハードウェア、オペレーティングシステム、およびネットワーク ID の設定仕様から構成される、サポートする Windows ワークロードのイメージです。

柔軟なイメージは、プロビジョニング、データの回復、およびサーバ同期などのピアツーピアのワークロード保護ジョブにおける中間フォーマットに使用できます。55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。

イメージ設定は、XML (config.xml) ファイルに保持されています。このファイルには、関連するボリュームデータの 1 つ以上のセットがイメージごとにあります。

柔軟なイメージおよびイメージサーバの config.xml 設定ファイルは、指定された Flexible Image Server ホスト上の次のディレクトリ内に保存されています。

```
..\Program Files\PlateSpin Image Server
```

X2I 変換時に直接キャプチャされたボリュームデータに加えて、Portability Suite は次のものをサポートします。

- ◆ Acronis True Image または Symantec LiveState などのサードパーティ製のボリュームアーカイブ
- ◆ ローボリュームデータ

ピアツーピア変換同様、イメージ展開を使用すると、主要なワークロード設定オプション (ワークロードのディスクレイアウト、ボリュームサイズ、ネットワーク ID、およびドメインまたはワークグループの提携を管理するためのオプションなど) が使用可能になります。

4.2 Flexible Image Server の指定

柔軟なイメージを使用するには、最初に Flexible Image Server ソフトウェアをマシン上にインストールして、マシンをイメージサーバとして指定する必要があります。専用のホストまたは Portability Suite Server ホスト上に Flexible Image Server インスタンスをインストールできます。

専用の Flexible Image Server ホストは、次の要件を満たす必要があります。

表 4-1 Flexible Image Server ホストの要件

要件	詳細
オペレーティングシステム	次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">◆ Microsoft Windows Server 2008◆ Microsoft Windows Vista◆ Microsoft Windows Server 2003◆ Microsoft Windows XP◆ Microsoft Windows 2000◆ Microsoft Windows NT 4.0
ディスク容量	基本コントローラソフトウェアに最低 100MB。 対象となるイメージサーバに保存しようとするワークロードイメージの数およびサイズに応じて、追加のディスク容量が必要になります。
ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none">◆ Microsoft .NET Framework 2.0

マシンを Flexible Image Server として指定する方法：

- 1 Flexible Image Server として指定するシステムを検出します。
- 2 [サーバ] ビューで、検出されたサーバを右クリックして [イメージサーバのインストール] を選択します。
[イメージサーバのインストール] ダイアログボックスが開きます。



- 3 選択したホストの管理者の資格情報を入力し、イメージファイル用に任意のディレクトリを指定します。

4 [インストール] をクリックします。

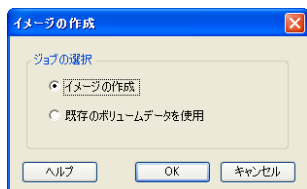
Portability Suite により、選択したホスト上にコントローラがインストールされ、Flexible Image Server として実行するように設定されます。作業が完了すると、[サーバ] ビューに、次のように Flexible Image Server の新しい項目が一覧表示されます。



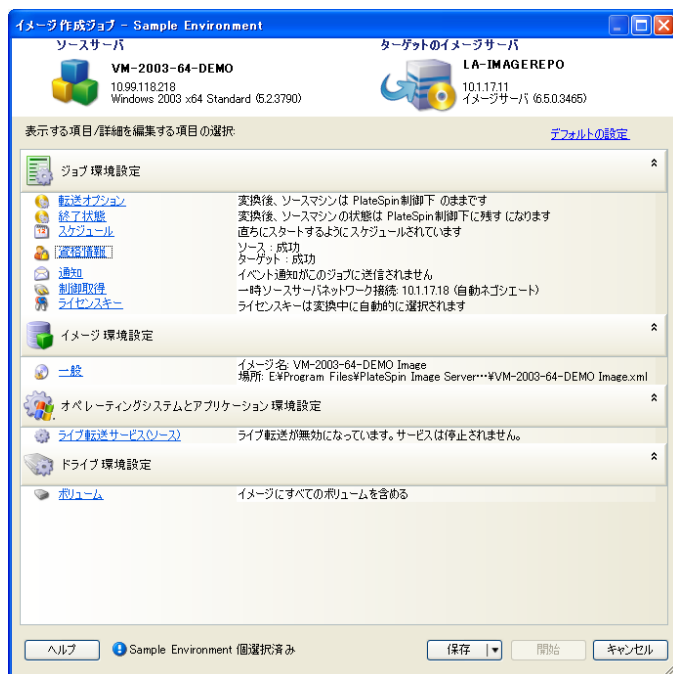
4.3 柔軟なイメージへのワークロードのキャプチャ

この手順を使用して、物理または仮想ワークロードを PlateSpin® Flexible Image としてキャプチャします。

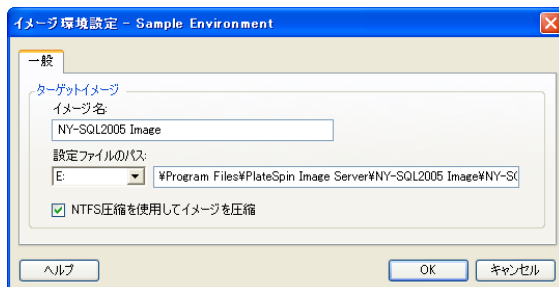
- 1 ソースワークロードおよび Flexible Image Server の検出および詳細の更新を行います。
- 2 次のいずれかの方法を使用して、イメージキャプチャジョブを開始します。
 - [サーバ] ビューで、ソースワークロードを右クリックし、[イメージのキャプチャ] を選択します。[アクション] ウィンドウで、ソースワークロードおよびターゲットイメージサーバを選択します。
 - [タスク] ペインで、[イメージのキャプチャ] をクリックします。[アクション] ウィンドウで、ソースワークロードおよびターゲットイメージサーバを選択します。
 - [サーバ] ビューで、ソースワークロードをドラッグし、イメージサーバ上にドロップします。ドラッグアンドドロップ時に、Portability Suite に [アクション] ウィンドウが表示されないように設定した場合は、[イメージの作成] ダイアログボックスで、新しいイメージを作成するか既存のボリュームデータを使用するか指定するように要求されます。



- 3 [イメージの作成] を選択し、[OK] をクリックします。[既存のボリュームデータを使用] オプションについては、71 ページの「ローボリュームデータまたは既存のボリュームデータを使用したイメージの作成」を参照してください。
- 4 [イメージ作成ジョブ] ウィンドウが開きます。

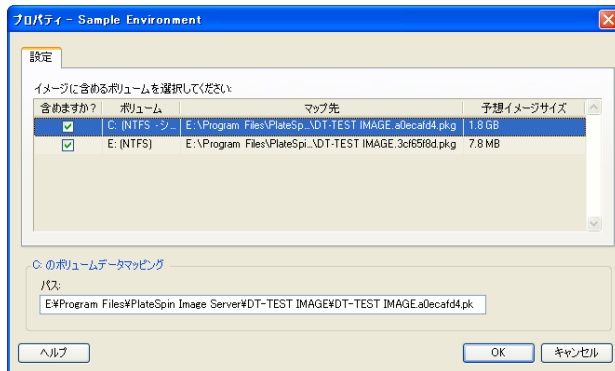


- 5 各カテゴリに含まれるリンクをクリックし、変換ジョブに必要な設定を指定します。
- ジョブの設定**：ソースおよびターゲットに関する必要な転送方法と運用上の継続性のための設定（**[一般]**）、スケジューリングオプション（**[スケジュール]**）、ソースおよびターゲットのオプション（**[資格情報]**）、ジョブステータスおよび進行状況通知オプション、一時的なネットワーク設定（**[制御の取得]**）、および使用が必要なライセンスキー（**[ライセンスキー]**）を設定します。
 - イメージ環境設定**：イメージ名、イメージを保存する場所へのパス、NTFS 圧縮の使用の有無を指定します（**[イメージ環境設定]** で、**[一般]** をクリックします）。



- オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定**：ライブ転送メソッドを選択した場合に、Portability Suite がオペレーティングシステムおよびアプリケーションサービスをソース上で処理する方法を指定します（**[ライブ転送サービス]**）。

- ◆ **ドライブ環境設定** : Portability Suite がイメージに含めるボリュームを選択し、パッケージファイルへのパスを指定します ([ドライブ環境設定] で、 [ボリューム] をクリックします)。



4.4 ローボリュームデータまたは既存のボリュームデータを使用したイメージの作成

Portability Suite では、Acronis True Image または Symantec LiveState を PlateSpin® Flexible のボリュームデータとして使用して作成された既存のシステムイメージを使用できます。この機能を使用するには、Acronis True Image または Symantec LiveState が Flexible Image Server ホストにインストールされている必要があります。

Portability Suite では、イメージのインポートに次のサードパーティ製のバックアップ形式がサポートされます。

- ◆ Acronis (True Image Server 8.0、True Image 9.1、True Image Enterprise Server 8.0、True Image Enterprise Server 8.0)
- ◆ Symantec (LiveState Recovery Advanced Server Suite 3.0 および 6.0、LiveState Recovery Advanced Server 3.0 および 6.0、LiveState Recovery Standard Server 3.0 および 6.0)

また、Portability Suite ではイメージ展開時にローボリュームデータも使用できます。

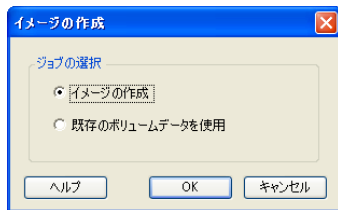
- ◆ [71 ページのセクション 4.4.1 「ローボリュームデータまたは Acronis True Image および Symantec LiveState から抽出されたボリュームデータのインポート」](#)
- ◆ [74 ページのセクション 4.4.2 「柔軟なイメージ作成に関する追加情報」](#)

4.4.1 ローボリュームデータまたは Acronis True Image および Symantec LiveState から抽出されたボリュームデータのインポート

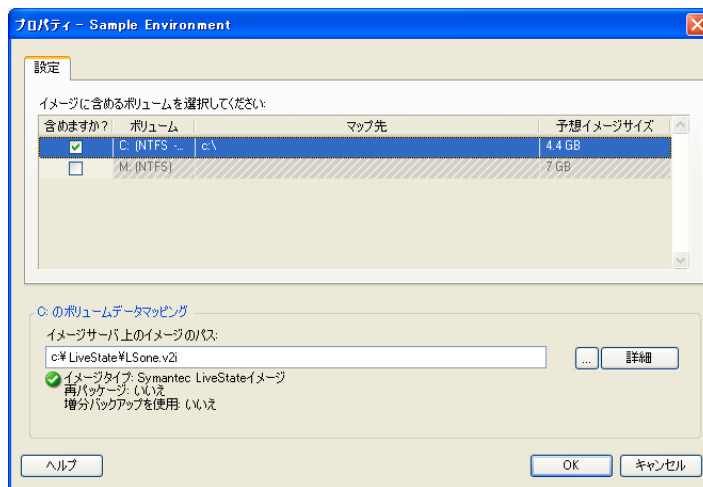
- 1 キャプチャするローボリュームデータを持つソースマシンか、既存の Acronis True Image または Symantec LiveState イメージのボリュームデータを検出します。

2 ソースサーバをターゲットの Flexible Image Server にドラッグアンドドロップします。次のいずれかが行われます。

- ◆ [アクション] ダイアログボックスが開きます。[アクション] 領域で、[イメージのキャプチャ] オプションが選択されていることを確認します。[詳細] をクリックします代わりにウィザードを使用する場合は、[ウィザードの起動] をクリックします。
- ◆ ドラッグアンドドロップ時に、Portability Suite に [アクション] ウィンドウが表示されないように設定した場合は、[イメージの作成] ダイアログボックスで、新しいイメージを作成するか既存のボリュームデータを使用するか指定するように要求されます。[既存のボリュームデータを使用] を選択し、[OK] をクリックします。



3 [イメージ作成ジョブ] ウィンドウで、[ドライブ環境設定] カテゴリにある [ボリューム] をクリックします。[プロパティ] ダイアログボックスが開きます。

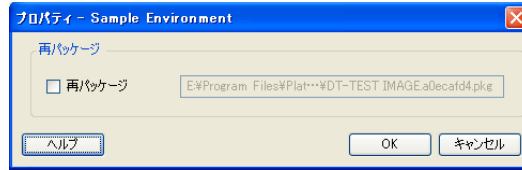


4 各ボリュームを選択します。ダイアログボックスの下部にあるテキストボックスで、各ボリュームに対して、ローボリュームデータを含むディレクトリまたは既存のイメージファイルへの完全なパスを入力します。

増分 LiveState イメージを使用している場合は、*.iv2i および *.v2i ファイルが同じディレクトリ内に存在する必要があります。その場合、*.iv2i ファイルのパスを [イメージサーバ上のイメージのパス] テキストボックスに入力します。

- 5 各イメージに対して、[詳細] ボタンをクリックし、さらに詳細なプロパティを設定できます。
- ◆ ローボリュームデータ

パッケージ: 提供されるイメージファイルから柔軟なイメージを作成するには、このオプションを選択します。

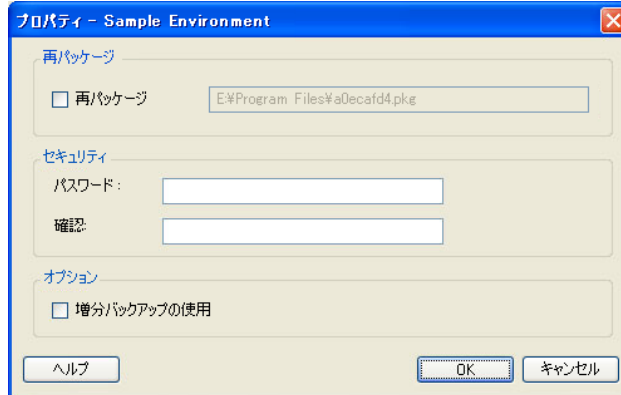


◆ Symantec LiveState

再パッケージ: 提供されるイメージファイルから柔軟なイメージを作成するには、このオプションを選択します。

セキュリティ: 提供されるイメージがパスワードで保護されている場合は、必要なパスワードを入力します。

増分バックアップの使用: 提供されるイメージが、増分バックアップセットに含まれている場合は、このオプションを選択します。



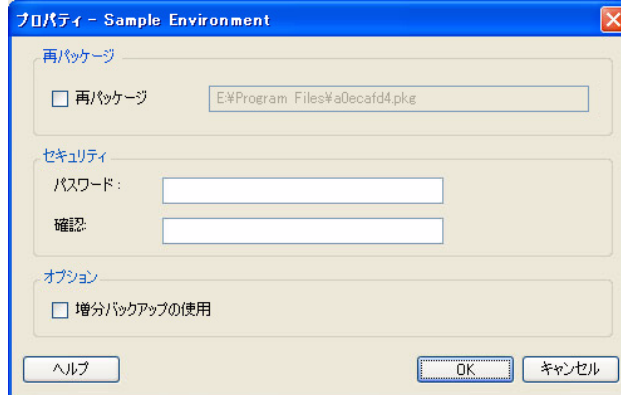
◆ Acronis True Image

パッケージ: 提供されるイメージファイルから柔軟なイメージを作成するには、このオプションを選択します。

セキュリティ: 提供されるイメージがパスワードで保護されている場合は、必要なパスワードを入力します。

増分バックアップの使用: 提供されるイメージが、増分バックアップセットに含まれている場合は、このオプションを選択します。

インデックス: 提供されるイメージに含まれるボリュームのインデックス番号を入力します。次の表では、各ボリュームのインデックス番号を示します。



Volume:	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
索引:	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

Volume:	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
索引:	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25

イメージにソースサーバ上の E: ボリュームからのデータが含まれる場合、インデックスは 4 に設定する必要があります。

- 6 含めるボリュームごとに適切なイメージまたはローボリュームデータを選択したら、[\[ジョブ環境設定\]](#) および [\[イメージ環境設定\]](#) セクションの設定を確認します。
- 7 [\[開始\]](#) をクリックして、イメージ作成プロセスを開始します。

4.4.2 柔軟なイメージ作成に関する追加情報

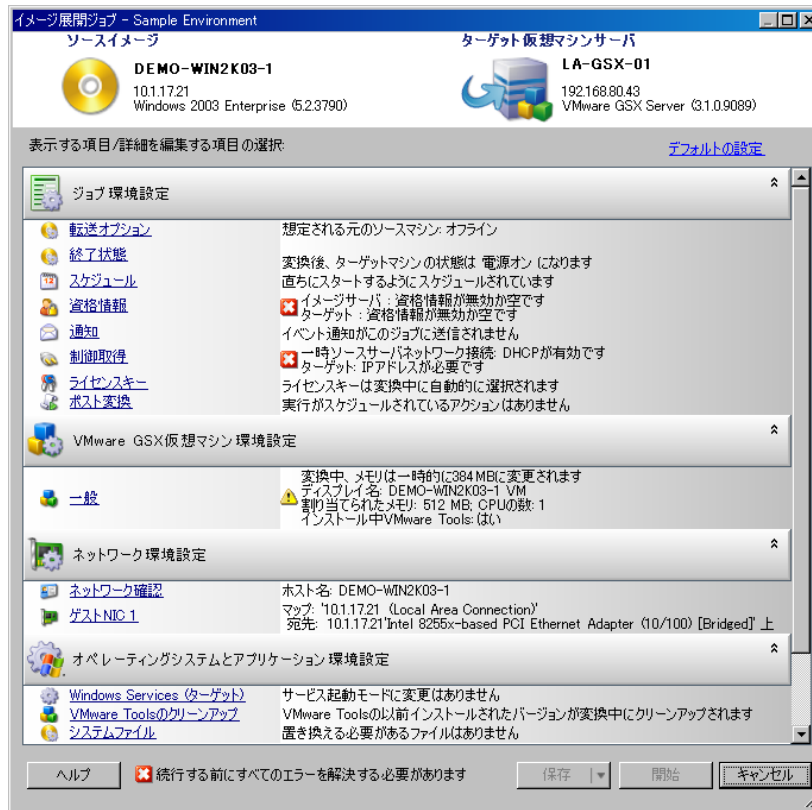
表 4-2 柔軟なイメージ関連のナレッジベースの記事

ID	説明
Q20768 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20768)	情報 : Portability Suite および Double-Take* Application Note のダウンロード [PDF]。
Q20392 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20392)	操作手順 : NT バックアップリストアから柔軟なイメージを作成する方法
Q20417 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20417)	操作手順 : Computer Associates の BrightStor* リストアから柔軟なイメージを作成する方法
Q20400 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20400)	操作手順 : Symantec の Backup Exec* システムリストアから柔軟なイメージを作成する方法
Q20461 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20461)	操作手順 : Ghost* Image 抽出から柔軟なイメージを作成する方法
Q20723 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20723)	FAQ: IBM* Tivoli* Storage Manager (TSM) 抽出から柔軟なイメージを作成する方法

4.5 柔軟なイメージの展開

この手順を使用して、柔軟なイメージをサポートされる物理マシンまたは仮想プラットフォーム上に展開します。

- 1 必要な柔軟なイメージを、検出されたターゲット物理マシンまたは VM ホストにドラッグアンドドロップします。



- 2 各カテゴリに含まれるリンクをクリックし、変換ジョブに必要な設定を指定します。変換ジョブは、ソースサーバと同じ設定を使用してターゲットマシンを作成するように自動設定されます。変換の目的に応じて、次のことを実行できます。
 - ◆ [ネットワークID] 設定を変更し、ターゲットマシンのホスト名およびドメイン/ワークグループの登録を設定します。
 - ◆ [ゲストNIC] 設定を変更し、ターゲットマシン上のネットワークアダプタのTCP/IPプロパティを設定します。
 - ◆ [ドライブ環境設定] 設定を変更し、変換中にコピーするボリュームを選択します。
- 3 目的のターゲットが仮想マシンの場合、必要な仮想マシンパラメータを指定し、メモリ割り当てやVMware ToolsまたはVMAdditionsの自動インストールなどの、必要なオプションを選択します。
- 4 エラーおよび警告を確認し、それらに対処します。
- 5 [開始] をクリックしてイメージを展開します。

4.6 増分イメージング：

増分イメージングにより、時間が経つにつれて変更されるファイルのみをキャプチャする、増分同期の繰り返しスケジュールを設定できます。

増分イメージングでは、次のイメージ関連エンティティが導入されます。

- ◆ **ベース (または完全) イメージ**: 追加のファイルまたはデータなしに復元できるスタンドアロンエンティティです。キャプチャ時に入手可能であった完全なワークロード情報を含みます。
- ◆ **増分**: ポイントインタイムの差分で、完全イメージまたは増分のキャプチャが最後に行われた以降に発生した変更のみを表します。展開時に必要な増分を選択することで、イメージの特定のポイントタイム状態を復元できます。ベースイメージに増分を適用するには、介在するすべての増分を利用する必要があります。
- ◆ **差分**: 複数の増分の集合体です。複数の連続する増分を1つにまとめることで、イメージ差分を作成できます。
- ◆ [76 ページのセクション 4.6.1 「イメージ増分の自動キャプチャ」](#)
- ◆ [77 ページのセクション 4.6.2 「増分の表示」](#)
- ◆ [77 ページのセクション 4.6.3 「イメージとともに展開する増分の選択」](#)
- ◆ [78 ページのセクション 4.6.4 「増分の統合」](#)
- ◆ [79 ページのセクション 4.6.5 「ベースイメージへの増分の適用」](#)
- ◆ [79 ページのセクション 4.6.6 「増分の削除」](#)

4.6.1 イメージ増分の自動キャプチャ

イメージ増分をキャプチャするには、増分同期を有効にした状態でイメージのキャプチャジョブを設定します。

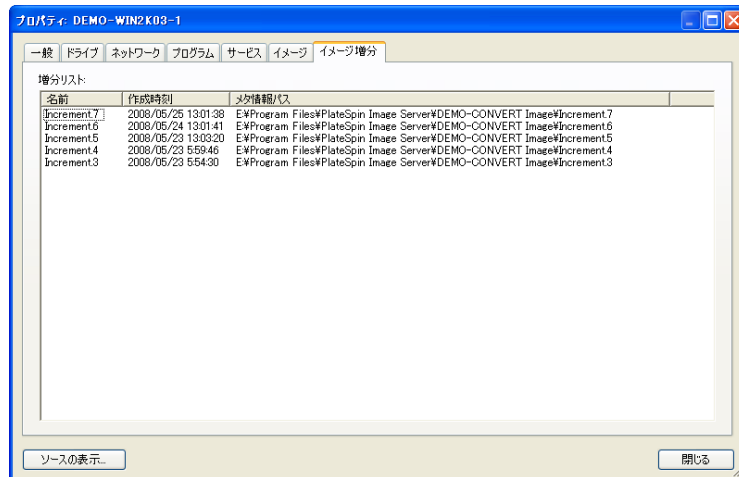
- 1 ワークロードソースおよびターゲットイメージサーバを検出します。すでにそれらが検出されている場合は、詳細を更新し (右クリック > [\[サーバの詳細の更新\]](#))、Portability Suite がそれらの最新情報を持つようにします。
- 2 [\[タスク\]](#) ペインにある [\[イメージのキャプチャ\]](#) タスクを使用して、必要なリソースおよびターゲットを使用して新しいイメージキャプチャジョブを開始し、[\[詳細\]](#) をクリックして [\[イメージ作成ジョブ\]](#) ウィンドウを開きます。
- 3 [\[イメージ作成ジョブ\]](#) ウィンドウで、[\[一般\]](#) をクリックしてから、[\[ジョブ環境設定\]](#) ダイアログボックスで、[\[スケジュール\]](#) タブをクリックします。[90 ページの「スケジュールおよび同期」](#)を参照してください。
- 4 [\[同期の有効化\]](#) オプションを選択します。
- 5 [\[スケジュールの編集\]](#) をクリックし、完全同期および増分同期に必要な繰り返し回数を設定します。
- 6 必要なローリング増分の回数を設定します。
これは、所定の時間に保存される増分イメージの数を決定します。この数を超えると、古い増分がベースイメージにマージされ、新しいベースが形成されます。
- 7 [\[OK\]](#) をクリックし、変換が完了するのを待ちます。
完了すると、[\[サーバ\]](#) ビューの該当する Flexible Image Server の下に新しいイメージが一覧表示されます。👁️

4.6.2 増分の表示

イメージに関連付けられたすべての増分を表示する方法：

- 1 [サーバ] ビューで、必要なイメージを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 2 [イメージ増分] タブをクリックします。

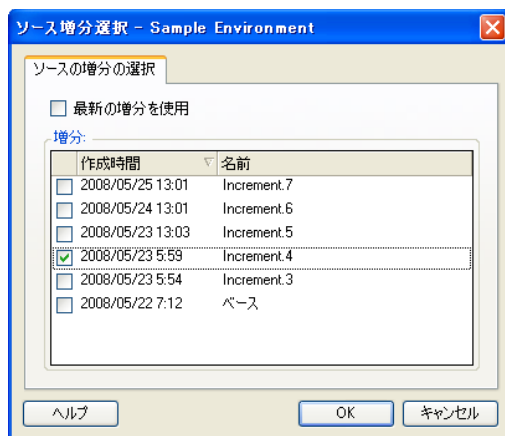
イメージに関連付けられたすべての増分を含むリストが表示されます。これには、増分ごとの名前、作成日時、およびそのメタ情報を含むファイルへのパスが含まれます。



4.6.3 イメージとともに展開する増分の選択

特定の増分とともにイメージを展開する方法：

- 1 [タスク] ペインで、[イメージの展開] をクリックします。[アクション] ウィンドウが開きます。
- 2 イメージおよびターゲットイメージサーバを選択し、[詳細] をクリックします。
- 3 74 ページの「柔軟なイメージの展開」の説明に従って、変換をジョブとして設定します。
- 4 [イメージ展開ジョブ] ウィンドウの [ドライブ環境設定] で、[ソース増分選択] をクリックします。
- 5 [ドライブ環境設定] ダイアログボックスで、[最新の増分を使用] を選択解除し、展開する増分を選択します。



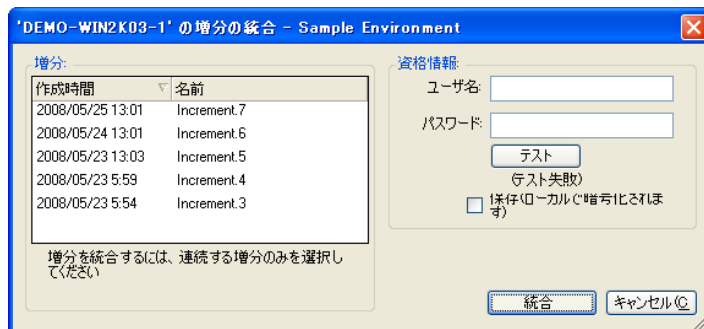
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 [開始] をクリックし、変換を開始します。

Portability Suite によって、ベースイメージおよび選択した増分までのすべての増分を使用して、イメージが展開されます。

4.6.4 増分の統合

増分の統合では、2つ以上の増分がマージされた1つのイメージ増分に置き換えられます。統合できるのは、連続する増分のみです。

- 1 [サーバ] ビューで、必要なイメージを右クリックし、[増分の統合] を選択します。



- 2 <Ctrl> キーを押したまま、マウスまたは矢印キーで選択し、統合の対象となる連続する増分を任意の数だけ選択します。
- 3 イメージに対する有効な資格情報を入力し、それらの情報をテストします。
- 4 [統合] をクリックします。

増分が、1つの差分イメージで置き換えられます。このイメージは、増分のリストの中では1つの増分として表示されますが、名前に統合されたすべての増分のIDが含まれています。たとえば、Increment.2-4 となります。

4.6.5 ベースイメージへの増分の適用

この機能を使用して、後から生成された1つ以上の増分をベースイメージに含め、イメージを更新します。増分を適用すると、それ以前のすべての増分がベースイメージにマージされます。

- 1 [サーバ] ビューで、必要なイメージを右クリックし、[増分をベースに適用] を選択します。
- 2 適用する増分を選択します。
選択した増分よりも前に作成されたすべての増分も含まれます。
- 3 イメージに対する有効な資格情報を入力し、それらの情報をテストします。
- 4 [適用] をクリックします。
Portability Suite によって、選択した増分がベースイメージに適用され、そのベースが新しく更新されたイメージで置き換えられます。

4.6.6 増分の削除

必要に応じて、キャプチャしたイメージ増分を削除できます。増分を削除すると、選択したその増分より後に作成されたすべての増分が結果的に削除されます。

- 1 [サーバ] ビューで、必要なイメージを右クリックし、[増分の削除] を選択します。
- 2 削除する増分を選択します。
- 3 イメージに対する有効な資格情報を入力し、それらの情報をテストします。
- 4 [削除] をクリックします。
Portability Suite によって、選択した増分が削除されます。

4.7 柔軟なイメージの管理

- ◆ 79 ページのセクション 4.7.1 「Flexible Image Server 間のイメージの移動」
- ◆ 80 ページのセクション 4.7.2 「イメージ操作の自動化」
- ◆ 80 ページのセクション 4.7.3 「イメージファイルのブラウズおよび抽出」

4.7.1 Flexible Image Server 間のイメージの移動

1. 古い Flexible Image Server ホストのファイルシステムから、新しい Flexible Image Server ホスト上の場所にイメージディレクトリをコピーします。
2. 新しい Flexible Image Server の config.xml ファイルを更新して、古い Flexible Image Server から移動したイメージへのパスおよび名前を識別します。
3. Portability Suite Client の [サーバ] ビューで、新しいイメージサーバの詳細を更新します。

詳細については、ナレッジベースの記事 [Q20189 \(http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20189\)](http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20189) を参照してください。

4.7.2 イメージ操作の自動化

Portability Suite に付属している ImageOperations コマンドラインユーティリティを使用して、イメージに関連するタスクを自動化できます。たとえば、Flexible Image Server 間で、複数のベースイメージと関連する増分を、定期的に移動する場合などです。

ユーティリティを使用すると、次の操作を自動化できます。

- ◆ **登録**：イメージまたはイメージ増分と、指定したイメージサーバとを関連付けます。
- ◆ **登録解除**：指定したイメージサーバから、登録済みのイメージの登録を解除します。
- ◆ **収集**：柔軟なイメージとそのボリュームのパッケージを特定のサブディレクトリに収集します。

ImageOperations コマンドラインユーティリティを使用する

- 1 Flexible Image Server ホスト上で、コマンドインタープリタ (cmd.exe) を実行し、現在のディレクトリを `..\Program Files\PlateSpin Image Server\ImageOperations` に変更します。
- 2 「ImageOperations」に続いて必要なコマンドおよびパラメータを入力し、<Enter> を押します。
コマンドの構文および使用方法の詳細については、「ImageOperations」と入力して<Enter> を押します。
- 3 完了したら、[サーバ] ビューで、イメージサーバの詳細を更新します。

4.7.3 イメージファイルのブラウズおよび抽出

障害復旧の努力中、またはビジネスの継続性の練習の期間に、PlateSpin® Flexible Images に保存されたそれらのファイルのバックアップバージョンを使用して、プロダクションサーバのファイルシステム内のファイルを選択的に復元できます。

これを行うには、PlateSpin® ImageBrowser ユーティリティを使用します。このツールを使用すると、次のものからファイルを参照、検索、ソート、および抽出できます。

- ◆ イメージファイル
- ◆ 特定のイメージ増分ファイル

次のファイルのロードにより、ベースイメージとイメージ増分の両方を処理できます。

- ◆ ベースイメージの対応するバイナリファイル (`volume-x.pkg`) またはテキスト構成ファイル (`image_name.xml`)。
- ◆ イメージ増分のバイナリ (`image_increment.pkg`) ファイル。増分のテキスト構成ファイル (`image_increment_name.xml`) は使用できません。

このユーティリティによって、Windows エクスプローラに類似した環境でイメージファイルを使用できます。コマンドラインバージョンでは、コマンドラインからファイルを抽出できます。

- ◆ 81 ページの「Image Browser の開始およびイメージファイルのロード」
- ◆ 81 ページの「Image Browser インタフェースでの項目のソートおよび検索」
- ◆ 82 ページの「項目の抽出」
- ◆ 82 ページの「コマンドラインでのイメージファイルのブラウズおよび抽出」

Image Browser の開始およびイメージファイルのロード

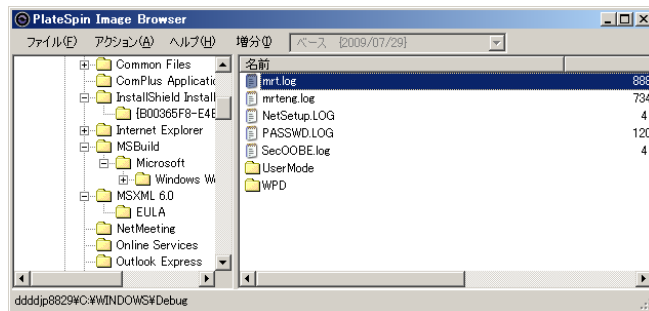
- 1 次のいずれかのディレクトリに含まれる ImageBrowser プログラム (ImageBrowser.exe) を開始します。

- ◆ Portability Suite Server ホストの場合：
..\PlateSpin Portability Suite Server\bin\ImageOperations
- ◆ Flexible Image Server ホストの場合：
..\Program Files\PlateSpin Image Server\ImageOperations

ユーティリティによって、[開く] ダイアログボックスが表示されます。プログラムの初期起動以降、任意のタイミングで [ファイル] > [開く] の順でクリックしてイメージファイルをロードできます。

- 2 [開く] ダイアログボックスで、ファイル形式を選択し、必要なイメージまたはイメージ増分ファイルを参照して選択してから、[OK] をクリックします。

ユーティリティでは、必要なファイルがロードされ、その内容が2つのペインを持つインタフェースに表示されます。



イメージのサイズに応じて、ユーティリティが必要なファイルをロードするのに数秒または数分かかることがあります。

Image Browser インタフェースでの項目のソートおよび検索

選択したディレクトリの内容を、名前、サイズ、種類、最終更新日付、およびファイル属性でソートできます。選択したビューで項目をソートするには、右側ペインの上部で対応するバーをクリックします。

特定のディレクトリ名またはファイル名を検索できます。英数字テキスト、ワイルドカード、および正規表現を使用できます。指定する正規表現検索のパターンは、Microsoft .NET Framework の正規表現の構文に従う必要があります。「[Microsoft .NET Framework Regular Expressions page on MSDN \(http://msdn.microsoft.com/en-us/library/hs600312.aspx\)](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/hs600312.aspx)」を参照してください。

項目を検索する

- 1 必要なイメージまたはイメージの増分をロードします。81 ページの「Image Browser の開始およびイメージファイルのロード」を参照してください。
- 2 左側ペインで、ボリュームまたはサブディレクトリを選択します。
- 3 [アクション] メニューで、[検索] をクリックします。

代わりに、左側ペインで必要なボリュームまたはサブディレクトリを右クリックし、コンテキストメニューで [検索] をクリックすることもできます。

[Image Browser 検索] ウィンドウが開きます。

- 4 検索するファイルの名前を指定します。正規表現を使用する場合、対応するオプションを選択します。
- 5 [検索] をクリックします。
右側ペイン結果が表示されます。

項目の抽出

- 1 必要なイメージまたはイメージの増分をロードします。81 ページの「Image Browser の開始およびイメージファイルのロード」を参照してください。
- 2 必要なファイルまたはディレクトリを見つけて、選択します。右側ペインで、複数のファイルおよびディレクトリを選択できます。
- 3 [アクション] メニューで、[抽出] をクリックします。
代わりに、必要な項目を右クリックし、コンテキストメニューで [抽出] をクリックします。
[フォルダの参照] ダイアログボックスが開きます。
- 4 必要な抽出先を参照し、ImageBrowser.Console [OK] をクリックします。
選択された項目は、指定した抽出先に抽出されます。

注: 抽出プロセスを中断すると、上書きのために選んだファイルは削除されます。

コマンドラインでのイメージファイルのブラウズおよび抽出

コマンドラインで、イメージおよびイメージ増分からのファイルをブラウズし、抽出するには、ImageBrowser.Console ユーティリティを使用できます。

ユーティリティを起動する

- 1 Flexible Image Server ホスト上で、コマンドインタープリタ (cmd.exe) を実行し、カレントディレクトリを ..\Program Files\PlateSpin Image Server\ImageOperations に変更します。
- 2 プロンプトが表示されたら「ImageBrowser.Console」と入力し、<Enter> を押します。
コマンドの構文および使用方法の詳細については、「ImageBrowser.Console /help」と入力して<Enter> を押します。

ワークロードマイグレーションおよび保護ジョブの要点

このセクションでは、Portability Suite Client を PlateSpin® Migrate または PlateSpin® Protect 製品とで構成する、ワークロード変換ジョブの重要な側面について説明します。

適切な場合は、詳細モードとウィザードモードの違いについても説明します。42 ページの「[ジョブの設定、実行、および管理](#)」を参照してください。

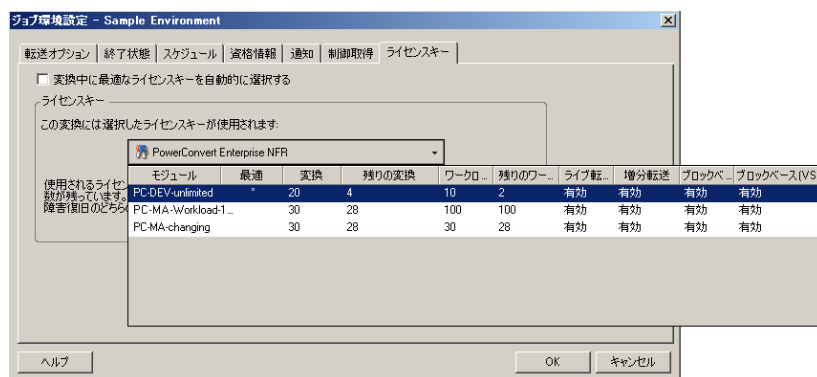
- ◆ 83 ページのセクション 5.1 「マイグレーションまたは保護の変換用ライセンスキーの選択」
- ◆ 84 ページのセクション 5.2 「ジョブステータスおよび進行状況の電子メールによる自動通知の設定」
- ◆ 85 ページのセクション 5.3 「転送オプションの指定」
- ◆ 86 ページのセクション 5.4 「ソースおよびターゲットのワークロード終了ステータスの指定」
- ◆ 86 ページのセクション 5.5 「ソースおよびターゲットのワークロード資格情報の指定」
- ◆ 88 ページのセクション 5.6 「ワークロードのネットワーク ID の管理」
- ◆ 90 ページのセクション 5.7 「スケジュールおよび同期」
- ◆ 91 ページのセクション 5.8 「変換ネットワークキングの設定」
- ◆ 97 ページのセクション 5.9 「ターゲットの設定 仮想マシン」
- ◆ 102 ページのセクション 5.10 「オペレーティングシステムのサービスとアプリケーションの処理」
- ◆ 109 ページのセクション 5.11 「ワークロードのストレージメディアとボリュームの処理」
- ◆ 121 ページのセクション 5.12 「変換ジョブに変換後のカスタムアクションを含める方法」

5.1 マイグレーションまたは保護の変換用ライセンスキーの選択

デフォルトでは、特定の変換ジョブに最適なライセンスキーが、Portability Suite によって自動的に選択されます。複数のライセンスキーがある場合、特定の変換ジョブに適用する特定のライセンスキーを選択できます。製品ライセンスおよびライセンスキーの管理については、『構成ガイド』の「[Portability Suite の製品ライセンス](#)」を参照してください。

変換ジョブに選択されたライセンスキーを表示および変更する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで、 [ライセンスキー] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合：** 使用不可。

異なるキーを手動で選択するには、 [変換中に最適なライセンスキーを自動的に選択する] チェックボックスをオフにし、 ドロップダウンリストから必要なライセンスキーを選択します。

現在の変換で無効なライセンスがある場合は、それらのライセンスは選択できません。ライセンスは、次のような理由から無効な場合があります。

- ◆ ライセンスに変換が残っていない場合。
- ◆ ライセンスでは X2V 変換が許可されないのに、現在の変換が P2V である場合。
- ◆ ライセンスではライブ転送変換がサポートされないのに、現在の変換がライブ転送にマークされている場合。

選択されたライセンスキーが [ライセンスキー] タブに表示され、説明が適宜更新されます。

5.2 ジョブステータスおよび進行状況の電子メールによる自動通知の設定

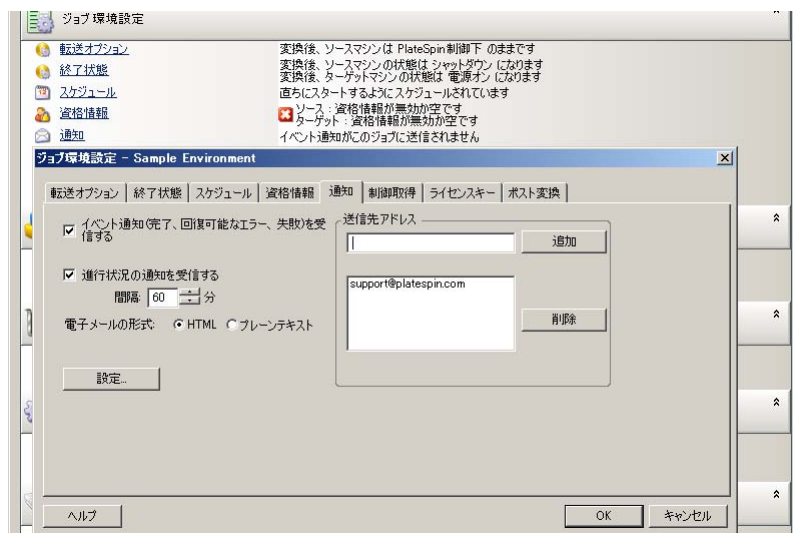
次の内容について、指定したアドレスに電子メールによる通知を自動送信するように変換ジョブを設定できます。

- ◆ **ジョブイベント：** ジョブステータスのメッセージは、完了、回復可能なエラー、および失敗です。
- ◆ **ジョブの進行：** ジョブの進行状況に関する設定可能な間隔での詳細メッセージ。

SMTP サーバおよび電子メールアカウントの詳細は、変換ジョブで指定するか、グローバルに指定できます。『構成ガイド』の「SMTP 通知」を参照してください。

電子メールによる自動通知を設定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：**[変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで、[通知] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合：**使用不可。

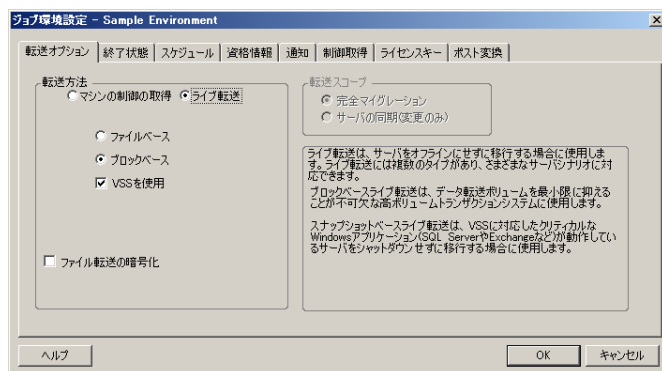
5.3 転送オプションの指定

転送オプションでは、次の内容を指定できます。

- ◆ ソースからターゲットにデータを転送する方法。Portability Suite は、複数の転送方法をサポートしており、使用可能な方法はワークロードおよび変更ジョブの種類によって異なります。17 ページの「サポートされる転送方法」を参照してください。
- ◆ ソースからターゲットに転送されるワークロードデータの範囲 (完全なマイグレーションおよび変更点のみ)。サーバ同期ジョブにのみ適用可能です。55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。
- ◆ ソースからターゲットに転送されるデータを暗号化するかどうか。23 ページの「セキュリティとプライバシー」を参照してください。

変換ジョブの転送オプションを指定する

- ◆ 詳細モードの場合 [変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで [転送オプション] をクリックします。



- ◆ ウィザードモードの場合: ウィザードのナビゲーションペインで、[転送方法] をクリックします。

5.4 ソースおよびターゲットのワークロード終了ステータスの指定

ソースおよびターゲットにデフォルト以外の変換後の終了状態を指定できます。変換を完了後、Portability Suite は、選択したワークロードを、指定されたとおりにシャットダウンまたはブートします。デフォルトの終了状態については、[22 ページの「ソースおよびターゲットのワークロードのデフォルトの変換後終了状態」](#)を参照してください。

必要な変更後のソースおよびターゲットの状態を指定する

- ◆ 詳細モードの場合 [変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで [終了状態] をクリックします。
- ◆ ウィザードモードの場合: 使用不可。ソースおよびターゲットの終了状態は事前にデフォルトに決められています。

5.5 ソースおよびターゲットのワークロード資格情報の指定

変換ジョブが適切に実行されるためには、ソースおよびターゲットの有効な資格情報を提供する必要があります。

次のガイドラインを使用します。

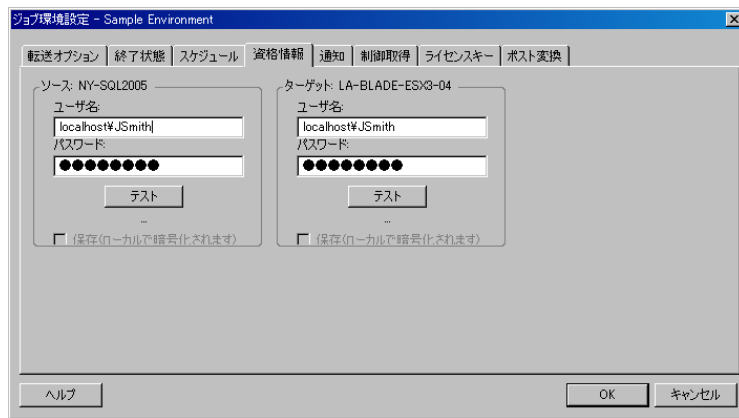
表 5-1 ソースおよびターゲットの資格情報

アカウント情報	Windows	Linux
[ユーザ名]	ローカルまたはドメインレベルの管理権を持つアカウントのユーザ名です。次の構文を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ ドメインメンバーのマシン用: <i>authority\principal</i> ◆ ワークグループメンバーのマシン用: <i>hostname\principal</i> 	ルートまたはルートレベルのユーザ名
パスワード	指定したユーザ名に対する有効なパスワード	指定したユーザ名に対する有効なパスワード

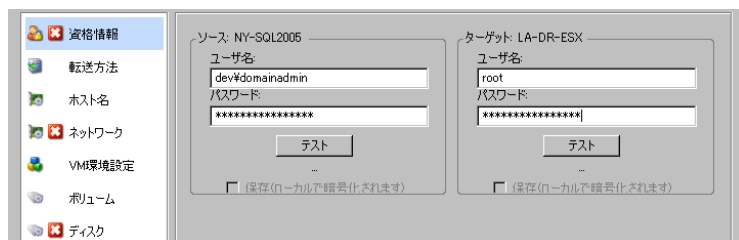
変換ジョブを設定する際に、提供された資格情報の有効性をチェックし、同じソースおよびターゲットを使用する将来の変換ジョブ用にそれらの情報を保存できます。

ソースおよびターゲットの資格情報を指定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：**[変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで、[資格情報] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合：**ウィザードのナビゲーションペインで、[資格情報] をクリックします。



5.6 ワークロードのネットワーク ID の管理

Portability Suite を使用すると、ネットワーク ID および変換ターゲットのワークロードのドメイン登録を管理し、関連する初期設定を変換ジョブの一部として指定できます。デフォルトでは、ソースワークロードのネットワーク ID およびドメイン登録を保持するようにジョブが設定されます。このデフォルト設定は、変換ジョブの目的に沿うように変更できます。

ワークロードを別のドメインに移行したり、ドメインから外したり、ドメインに含まれるワークロードのホスト名を変更したりする場合は特に、変換ターゲットのネットワーク ID を適切に設定することが重要です。

ターゲットワークロードのネットワーク ID オプションを設定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [ネットワーク環境設定] セクションで、 [ネットワーク ID] をクリックします。
- ◆ **ウィザードモードの場合：** ウィザードのナビゲーションペインで、 [ホスト名] をクリックします。

ターゲットマシンが Windows または Linux によって、設定オプションは変化します。

- ◆ **88 ページのセクション 5.6.1 「Windows のワークロード ID の管理」**
- ◆ **89 ページのセクション 5.6.2 「Linux および Solaris ワークロードのネットワーク ID を管理します。」**

5.6.1 Windows のワークロード ID の管理

次の設定を使用して、ターゲットの Windows のワークロードを (ウィザードモードまたは詳細モードのいずれかで) 設定します。

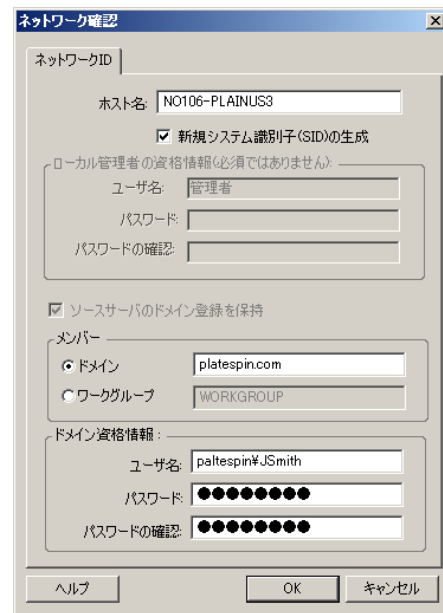
ホスト名: ターゲットマシンに希望するホスト名を指定します。

新しいSIDの生成: このオプションが選択されると、ターゲットワークロードは、新しいシステム識別子 (SID) を割り当てます。資格情報は、Windows 2008 および Vista システムにのみ必要で、ローカルの (埋め込まれた) 管理者アカウントの資格情報でなければなりません。このアカウントがローカルにソース上で名前を変更された場合、新しい名前を提供します。このアカウントが Vista (デフォルト) で無効の場合、最初にそれを有効にします。

メンバー (ドメイン/ワークグループ): 必要なオプションを選択し、ターゲットマシンを参加させるドメインまたはワークグループの名前を入力します。

ソースサーバのドメイン登録を保持: ドメイン登録を保持し、ソースサーバのドメイン登録が変換時にそのままになるようにします。このオプションを無効にすると、ソースマシンのドメインアカウントがターゲットマシンに転送されます。ソースサーバは、ドメイン上にそのまま表示されますが、接続は有効ではありません。

ドメイン資格情報: ターゲットマシンがドメインに含まれる場合、サーバをドメインに追加する権限を持つ有効な資格情報を指定します。

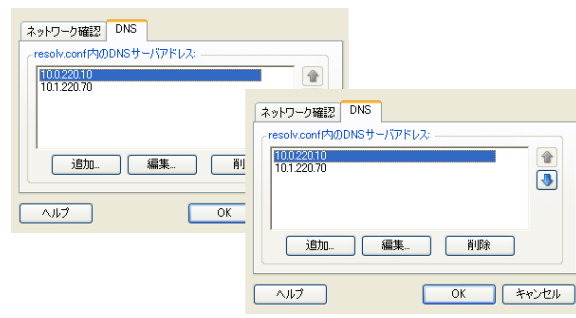


5.6.2 Linux および Solaris ワークロードのネットワーク ID を管理します。

次の設定を使用して、ターゲットの Linux のワークロード (ウィザードモードまたは詳細モードのいずれかで) および必要に応じて DNS サーバアドレス (詳細モードで) を設定します。

ネットワーク ID タブ: ターゲットサーバに希望するホスト名を指定します。

DNS タブ: [追加]、[編集]、および [削除] ボタンを使用して、新しい仮想マシンの DNS サーバエントリを管理します。



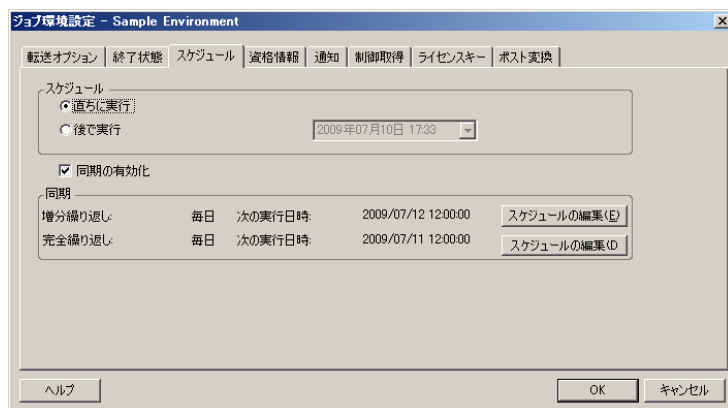
5.7 スケジュールおよび同期

変換ジョブの重要な要素は、スケジュールです。スケジュールオプションでは、次の内容を指定できます。

- ◆ 変換ジョブを即時実行するか、特定の日に実行するか。ジョブの保存および実行に関して Portability Suite が提供するその他のオプションについては、[42 ページの「ジョブの設定、実行、および管理」](#)を参照してください。
- ◆ ターゲットのソースとの増分同期を有効にするかどうか。これにより、完全と増分の、2つの同期スケジュールを持つワークロードまたはワークロードイメージの保護ジョブの保護契約が確立されます。

変換ジョブのスケジュールオプションにアクセスする方法：

- ◆ **詳細モードの場合：**[変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで、[スケジュール] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合：**ウィザードのナビゲーションペインで、[スケジュール] をクリックします。

いずれかのスケジュールを編集するには、[同期の有効化] オプションを選択し、[スケジュールの編集] をクリックします。

注：同期には、ライブ転送方法が必要です。特定の変換に対してライブ転送方法がサポートされていない場合は、このオプションは無効です。

増分同期および完全同期のスケジュールが一致した場合は、完全同期が優先されます。たとえば、完全同期が日曜日の午前 1:00:00 ごとにスケジュールされており、増分同期が毎日午前 1:00:00 に実行されるようにスケジュールされている場合、日曜日の午前 1:00:00 には完全同期が実行されます。

5.7.1 繰り返しエディタの使用

繰り返しエディタを使用すると、ターゲット VM または柔軟なイメージをソースワークロードに関する変更と同期させるスケジュールリングオプションを指定できます。変換の要件に応じて、完全同期または増分同期のスケジュールを指定できます。

いずれかのスケジュールを編集するには、ジョブのスケジュール内の [スケジュールの編集] をクリックします。繰り返しエディタのダイアログボックスに表示されるオプションは、それ以前のジョブ環境設定の選択内容に依存します。

これらの設定によって、増分転送または完全転送の繰り返しのパターンが制御されます。

毎時: 転送の間隔を毎時に設定するには、このオプションを使用します。

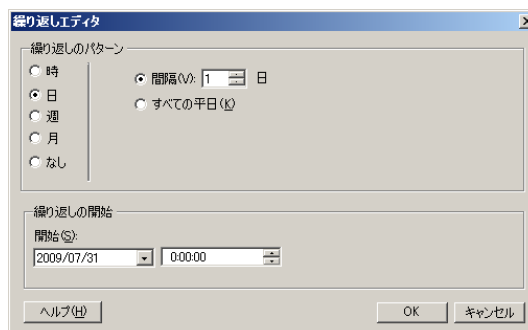
毎日: 転送が行われる間隔 (日数) を設定するには、このオプションを使用します。

毎週: 転送が行われる間隔 (週の数) および週の何曜日に実行するかをスケジュールするには、このオプションを使用します。

毎月: 増分転送を毎月間隔で定義するには、このオプションを使用します。

なし: たとえば、転送を後でまたは手動で実行しようとする場合など、増分転送または完全転送を無効にするには、このオプションを選択します。

繰り返しの開始: 転送の開始日時を指定します。



5.8 変換ネットワークキングの設定

次の目的を達成するために、ワークロードの移植容易性および保護のジョブごとにワークロードネットワークキングを適切に設定する必要があります。

- ◆ 変換プロセス中に、ソースワークロードおよびターゲットがお互い、および Portability Suite Server と通信できるようにします。
- ◆ ターゲットワークロードのネットワーク環境設定は、その終了状態に一致するようにします。

ジョブ環境設定インタフェースでは、次に関する環境設定が実行できます。

制御の取得ネットワークキング 一時ネットワーク設定とも呼ばれ、一時的な事前実行環境にブートされたソースおよびターゲットのワークロードに適用されます。17 ページの「**制御の取得のメカニズムを使ったオフライン転送**」を参照してください。

ターゲットの変換後ネットワークキング: ピアツーピアの変換およびイメージ展開ジョブでは、ターゲットの仮想 NIC または物理 NIC に適用されます。

- ◆ 92 ページのセクション 5.8.1 「**制御の取得 (一時) ネットワークの設定**」
- ◆ 94 ページのセクション 5.8.2 「**ターゲットの変換後ネットワークキング**」
- ◆ 96 ページのセクション 5.8.3 「**TCP/IP および詳細ネットワーク設定**」

5.8.1 制御の取得 (一時) ネットワークの設定

制御の取得 (一時) ネットワークの設定は、変換中に、ソースワークロード、ターゲット、および Portability Suite Server が互いの間でどのように通信するかを制御します。必要な場合、変換中に、一時的なネットワークアドレスを、ソースおよびターゲットに手動で指定するか、または、それらを構成して DHCP により割り当てられた IP アドレスを使用することができます。

Windows および Linux ワークロード変換中に、制御の取得 (一時) ネットワークの設定が、一時的な事前実行環境にブートされた Portability Suite Server のソースおよびターゲットとの通信を制御します。18 ページの「[制御の取得による Windows および Linux ワークロードのオフライン転送](#)」を参照してください。

Solaris ワークロード変換中に、ターゲット用の一時的なネットワーク設定は必要なく、対応するオプションは無効です。ソースワークロードの場合、一時的なネットワーク設定を割り当てる機能は、次の条件を受けます。

- ◆ それが非グローバル化ゾーンを持たない物理マシンである場合、一時的なネットワーク設定は Solaris ソースワークロードに割り当てられることができます。
- ◆ 一時的なネットワーク設定は、占有モードのネットワークインタフェースを持つ Solaris ゾーンであるソースワークロードに割り当てられません。

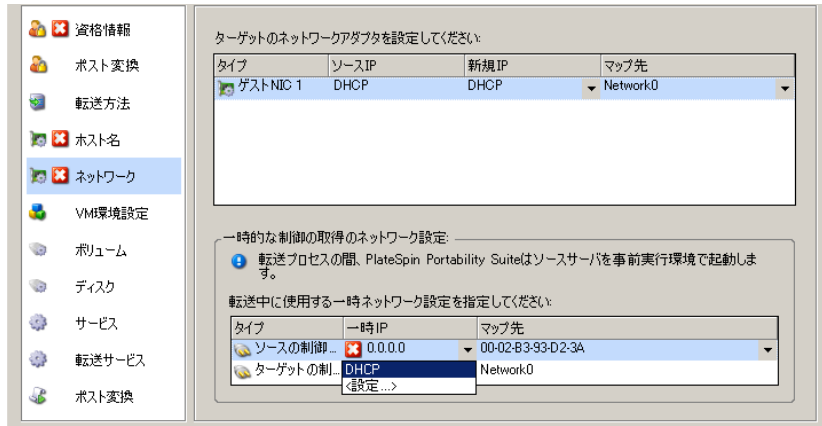
18 ページの「[制御の取得による Solaris ワークロードのオフライン転送](#)」を参照してください。

制御の取得 (一時) ネットワークを設定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [ジョブ環境設定] セクションで [制御の取得] をクリックします。ネットワークインタフェースのマッピングおよび TCP/IP 設定にアクセスするには、ソースおよびターゲットの領域にある [設定] を適宜クリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合**：ウィザードのナビゲーションペインで、[ネットワーク] をクリックします。[一時IP] または [マップ先] ドロップダウンメニューの [ソースの制御の取得] または [ターゲットの制御の取得] 行から、[設定] を選択します。環境設定オプションを開かずに素早く DHCP を選択するには、[DHCP] を選択します。



制御の取得 (一時) ネットワークの環境設定オプションは、ネットワークインタフェースが仮想か物理か、および Windows または Linux のワークロードのいずれに接続しているのかに応じて変化します。

ターゲットの制御の取得ネットワークの設定は、制御の取得変換プロセス中のみ使用されます。完了すると、ターゲットのネットワーク設定がターゲットの変換後ネットワークに指定した設定から読み込まれます。91 ページの「ターゲットの変換後ネットワーク」を参照してください。

- ◆ 94 ページの「制御の取得 (一時) ネットワークの設定: 物理ネットワークインタフェース」
- ◆ 94 ページの「制御の取得 (一時) ネットワークの設定: 仮想ネットワークインタフェース」

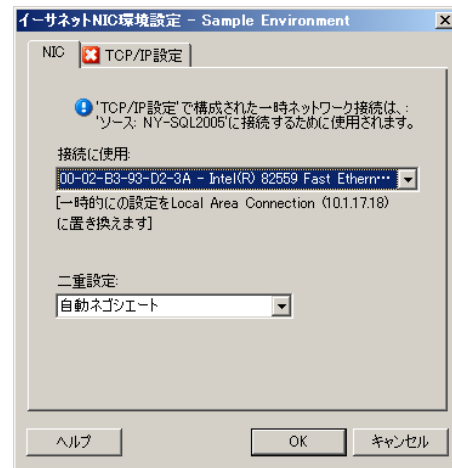
制御の取得 (一時) ネットワークの設定 : 物理ネットワークインタフェース

これらの設定は、ソースの物理マシンにのみ適用されます。ターゲットの物理マシンに関しては、制御の取得 ISO イメージを使用するブートプロセス中に制御の取得 (一時) ネットワークが設定されます。36 ページの「ターゲット物理マシンの検出および登録」を参照してください。

接続に使用: ネットワークアダプタが複数存在する場合は、Portability Suite Server とターゲットの両方と通信できるアダプタを選択します。

二重設定: ドロップダウンリストを使用して、ネットワークカードのデュプレックスを選択します。これは、ネットワークインタフェースが接続されているスイッチのデュプレックス設定と一致する必要があります。100Mbit の全二重に設定されているスイッチポートにソースが接続されており、オートネゴシエーションに変更できない場合は、**[NIC を全二重に強制]** を選択します。

TCP/IP 設定 タブ: クリックして TCP/IP および詳細ネットワーク設定にアクセスします。96 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定」を参照してください。

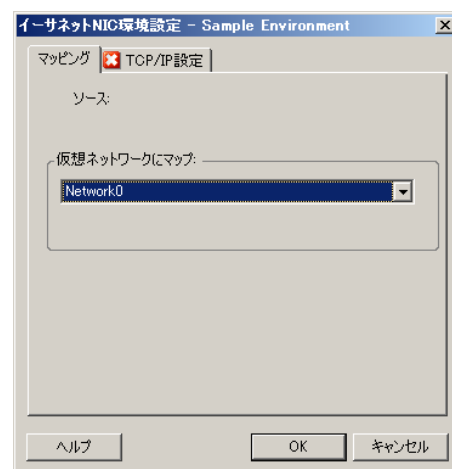


制御の取得 (一時) ネットワークの設定 : 仮想ネットワークインタフェース

これらの設定は、ソースおよびターゲットの制御の取得 (一時) ネットワーク設定の両方に適用されます。

仮想ネットワークにマップ: ドロップダウンリストから、制御の取得変換中に使用する仮想スイッチまたはネットワークを選択します。仮想ネットワークアダプタが複数存在する場合は、Portability Suite Server とソースマシンの両方と通信できるアダプタを選択します。このネットワークは、ターゲットの仮想マシンが変換後に実行されるネットワークとは異なっていても構いません。

TCP/IP 設定 タブ: クリックして TCP/IP および詳細ネットワーク設定にアクセスします。96 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定」を参照してください。



5.8.2 ターゲットの変換後ネットワーキング

変換ジョブの中で定義されたターゲットの変換後のネットワーク設定は、変換の完了後にターゲットのネットワーク環境設定を制御します。これは、物理および仮想のネットワークインタフェース両方に適用されます。

Windows および Linux ワークロードのマイグレーション中に、ワークロードが事前実行環境にブートされる間に、ターゲットワークロードの変換後のネットワークの設定が行われます。Solaris ワークロードのマイグレーション中に、ターゲットのゾーンのホストを通じて、ターゲットの変換後のネットワークの設定が行われます。

ターゲットの変換後のネットワーク設定を行う方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [ネットワーク環境設定] セクションで、 [ゲストNIC] (ターゲットの仮想マシンの場合) または [ネットワーク接続] (ターゲットの物理マシンの場合) をクリックします。
- ◆ **ウィザードモードの場合：** ウィザードのナビゲーションペインで、 [ネットワークキング] をクリックします。 [ターゲットのネットワークアダプタを設定してください] セクションで、 [新規IP] または [マップ先] ドロップダウンメニューから [設定] を選択します。環境設定オプションを開かずに素早く DHCP を選択するには、 [DHCP] を選択します。

ターゲットの変換後ネットワーク設定の環境設定オプションは、ネットワークインタフェースが仮想か物理か、および Windows または Linux のワークロードのいずれに接続しているのかに応じて変化します。

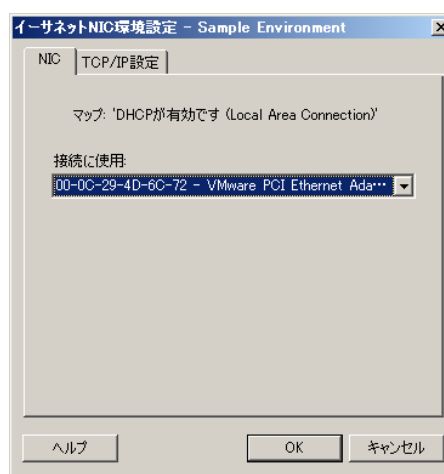
- ◆ 95 ページの「変換後の物理ネットワークインタフェース (Windows および Linux) のネットワークキング」
- ◆ 96 ページの「変換後の仮想ネットワークインタフェース (Windows および Linux) のネットワークキング」

変換後の物理ネットワークインタフェース (Windows および Linux) のネットワークキング

これらの設定を使用して、物理的なハードウェアに移行されているワークロードの変換後のネットワーク設定を行います。

接続に使用： ネットワークアダプタが複数存在する場合は、Portability Suite Server と通信できるアダプタを選択します。

TCP/IP 設定 タブ: クリックして TCP/IP および詳細ネットワーク設定にアクセスします。96 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定」を参照してください。



変換後の仮想ネットワークインタフェース (Windows および Linux) のネットワーキング

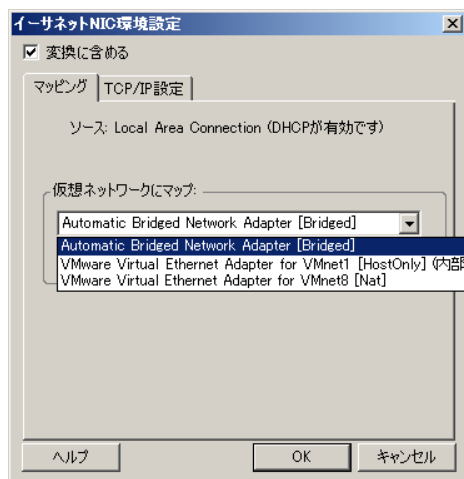
デフォルトでは、Portability Suite によって、ソース上で検出された NIC ごとに仮想 NIC を作成するような変換ジョブが設定されます。変換後の接続のために、ターゲットの仮想 NIC がターゲットの仮想プラットフォーム上の適切な仮想ネットワークにマッピングされていることを確認します。

変換に含める: このオプションが選択されていると、Portability Suite によってソース NIC 用の仮想 NIC が作成されます。

仮想アダプタにマップ: 変換の完了後にターゲットマシン上で使用される仮想アダプタを選択します。

接続状態で開始: ターゲットマシンを開始する際に、仮想ネットワークインタフェースに接続するには、このオプションを有効にします。

TCP/IP 設定 タブ: クリックして TCP/IP および詳細ネットワーク設定にアクセスします。96 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定」を参照してください。



5.8.3 TCP/IP および詳細ネットワーク設定

Portability Suite では、ソースとターゲットのネットワーク設定の両方、および制御の取得 (一時) とターゲットの変換後ネットワーキングの両方に対して、標準のネットワーク環境設定インタフェースが提供されます。環境設定は、オペレーティングシステムによってわずかに異なります。

- ◆ 97 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定 (Windows)」
- ◆ 97 ページの「TCP/IP および詳細ネットワーク設定 (Linux および Solaris)」

TCP/IP および詳細ネットワーク設定 (Windows)

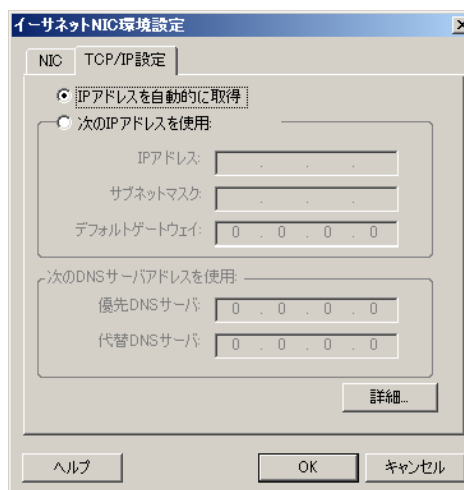
次に、Windows のワークロードに関する標準の TCP/IP および詳細ネットワーク設定を示します。

IP アドレスを自動的に取得: このオプションを選択した場合、ワークロードは変換プロセス中に DHCP サーバによって自動的に割り当てられる IP アドレスを使用します。

次の IP アドレスを使用: 静的 IP アドレスを指定するには、このオプションを選択します。

次の DNS サーバアドレスを使用: 必要に応じて、DNS サーバの優先アドレスおよび代替アドレスを指定します。

詳細: TCP/IP の詳細な環境設定にアクセスするには、このオプションをクリックし、デフォルトゲートウェイ、DNS サーバ、および WINS サーバ情報の指定または編集を必要に応じて行います。



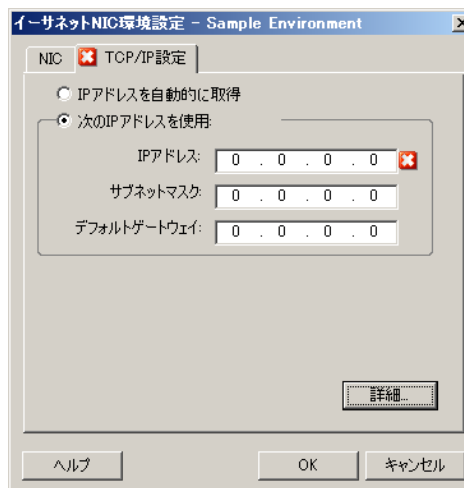
TCP/IP および詳細ネットワーク設定 (Linux および Solaris)

次に、Linux のワークロードに関する標準の TCP/IP および詳細ネットワーク設定を示します。

IP アドレスを自動的に取得: このオプションを選択した場合、ワークロードは変換プロセス中に DHCP サーバによって自動的に割り当てられる IP アドレスを使用します。

次の IP アドレスを使用: 静的 IP アドレスを指定するには、このオプションを選択します。

詳細: DNS の環境設定にアクセスするには、このボタンをクリックし、DNS サーバの優先アドレスおよび代替アドレスを必要に応じて指定します。また、ターゲットの /etc ディレクトリにある resolv.conf ファイルに DNS アドレスをコピーするかどうかの指定もできます。



5.9 ターゲットの設定 仮想マシン

Portability Suite では、ワークロードの仮想化を使用するジョブ向けに、ターゲット VM の名前や環境設定ファイルのパスの提供、使用するデータストアの選択、および仮想メモリの割り当てなどのターゲット VM の環境設定オプションを指定するメカニズムが選択した仮想化プラットフォームの機能に従って提供されます。

ターゲットの仮想化プラットフォーム上に設定されたリソースプールがある場合、それを VM に割り当てるように選択することができます。

注: ターゲット VMware ESX サーバが完全自動化された Distributed Resource Scheduler (DRS) クラスタ (VM マイグレーション自動化レベルが [完全自動] に設定されたクラスタ) に含まれている場合、新たに作成されたターゲット VM の自動化レベルは、変換期間中、[一部自動] に変更されます。これは、ターゲット VM が最初に選択したものと異なる ESX サーバ上でパワーを増したことを意味しています。しかし、マイグレーションは自動実行を行うことができません。

ターゲット VM の設定オプションを指定する方法:

- ◆ **詳細モードの場合:** [変換ジョブ] ウィンドウの [仮想マシンの設定] セクションで、[一般] をクリックします。
- ◆ **ウィザードモードの場合:** ウィザードのナビゲーションペインで、[ホスト名] をクリックします。

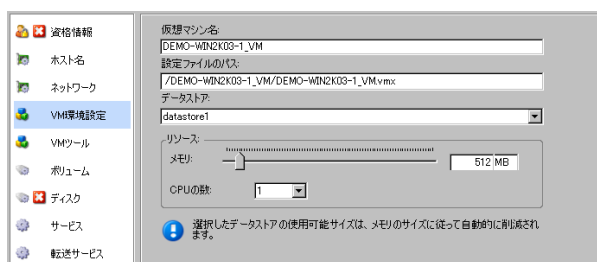
ウィザードモードでは、Portability Suite によって基本的な仮想マシンの環境設定オプションのみが要求されます。リソースプールや CPU スケジューリングなどに関連するような、仮想マシンの詳細オプションを設定するには、詳細モードに切り替えます。

VM 名: 新しい仮想マシン用の表示名を指定します。

設定ファイルのパス: ターゲットの仮想マシンの設定ファイルへのパスを指定します。

データストア: 必要な仮想マシンのデータストアを選択します。

リソース: 仮想マシンに割り当てられる仮想 RAM の容量および CPU の数を指定します。



5.9.1 仮想化プラットフォーム特有のオプションおよび VM の詳細な環境設定オプション

詳細モードでは、Portability Suite によって選択したターゲットの仮想マシンに特有な環境設定オプションが表示され、さらに詳細な環境設定オプションへアクセスできます。

- ◆ 99 ページの「仮想マシンの設定: MSVS」
- ◆ 99 ページの「仮想マシンの設定: VMware ESX 2.x」
- ◆ 100 ページの「仮想マシンの設定: VMware ESX 3/3.5」
- ◆ 101 ページの「仮想マシンの構成: Citrix XenServer」
- ◆ 102 ページの「Solaris のゾーンの構成」

仮想マシンの設定 : MSVS

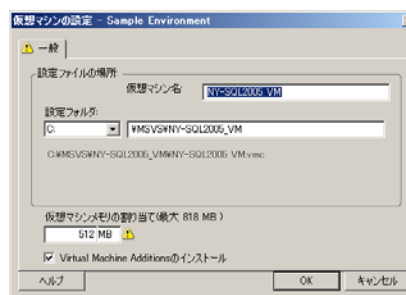
次に、Microsoft Virtual Server に特有の環境設定オプションを示します。

仮想マシン名: 新しい仮想マシン用の表示名を指定します。

設定フォルダ: 仮想マシン用に環境設定ファイルが保存されるディレクトリを選択します。

仮想マシンメモリの割り当て: 仮想マシンに割り当てられる仮想 RAM の容量の値を指定します。

Virtual Machine Additions のインストール: 変換中に VM Additions をインストールするには、このオプションを有効にします。



仮想マシンの設定 : VMware ESX 2.x

次に、VMware ESX 2 に特有の環境設定オプションを示します。ESX 2 のメモリ割り当て、CPU の数、および CPU スケジュールアフィニティの設定にアクセスするには、[詳細] をクリックします。

仮想マシン名: 新しい仮想マシン用の表示名を指定します。

設定ファイルのパス: VM の環境設定ファイルが保存されるディレクトリへのパスを選択します。

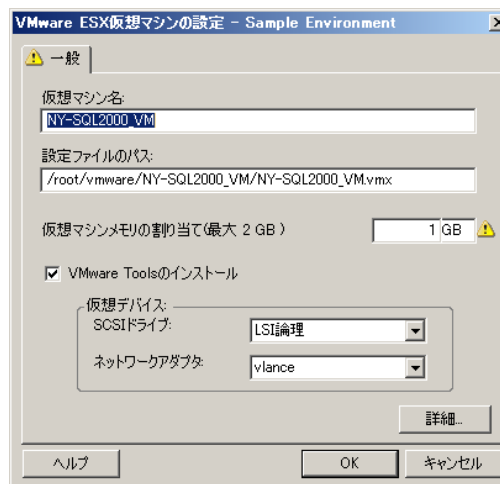
仮想マシンメモリの割り当て: VM に割り当てられる仮想 RAM の容量を指定します。

VMware Tools のインストール: 変換中に VM Tools をインストールするには、このオプションを有効にします (推奨)。

ネットワークアダプタ [推奨]: [vlance] または [vmxnet] のいずれかを選択します。最適なパフォーマンスを得るには、[Vmxnet] を選択することを推奨します。

SCSI ドライブ: [BusLogic] (ほとんどの変換の場合) または [LSILogic] (Windows 2003 ワークロードの場合の推奨) のいずれかを選択します。

詳細: VM の詳細な環境設定を表示または変更するには、このボタンをクリックします。



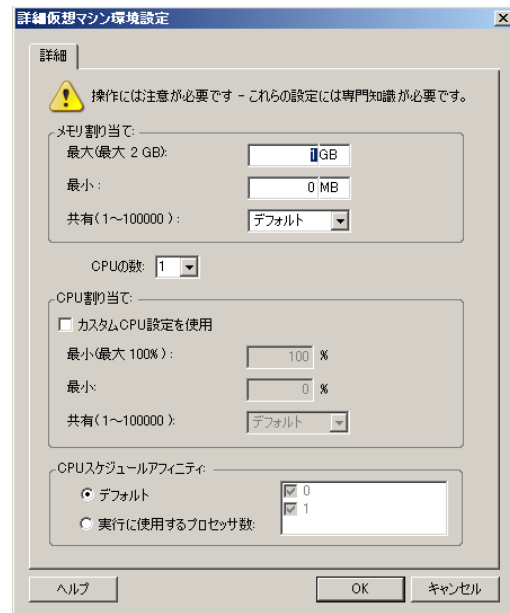
メモリ割り当て: 最小または最大メモリの割り当ては、VM ホスト上でメモリが異なる VM にどのように分配されるかを制御します。**共有:** 特定の VM のメモリ割り当ての優先順位を他の VM と相対的に定義します。ほとんどの場合、これらの設定は変更する必要はありません。

CPU の数: ターゲット VM に割り当てる CPU の数を選択します。たとえば、シングルプロセッサのワークロードをマルチプロセッサの VM に、またはマルチプロセッサのワークロードをシングルプロセッサの VM に変換できます。

CPU 割り当て: 最小の割合は、絶対的な固定された下限値を表します。最大の割合は、絶対的な固定された上限値を表します。1 つの VM では、少なくとも最小の割合で指定された CPU 時間と同じ割合が使用され、指定された最大の割合を超えた CPU 時間を使用することはありません。

CPU スケジュールアフィニティ: どの ESX Server プロセッサで仮想マシンが実行できるかを表します (ご使用の ESX Server がマルチプロセッサシステムの場合)。必要なプロセッサを指定するか、[デフォルト] を選択します (推奨)。

詳細については、VMware のマニュアルを参照してください。



仮想マシンの設定 : VMware ESX 3/3.5

次に、VMware ESX 3 および 3.5 に特有の環境設定オプションを示します。リソースプール、CPU 数、および CPU スケジュールアフィニティを制御する設定にアクセスするには、[詳細] をクリックします。

仮想マシン名: 新しい仮想マシン用の表示名を指定します。

データストア: *.vmx ファイルを作成するデータストアを選択します。

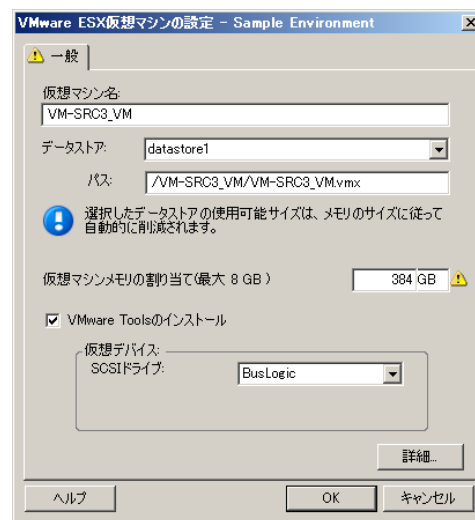
設定ファイルのパス: 仮想マシンの *.vmx 環境設定ファイルの名前およびディレクトリパスを指定します。

仮想マシンメモリの割り当て: 仮想マシンに割り当てられる仮想 RAM の容量の値を指定します。

VMware Tools のインストール: 変換中に VM Tools をインストールするには、このオプションを有効にします (推奨)。

SCSI ドライブ: [BusLogic] (ほとんどの変換の場合) または [LSIlogic] (Windows 2003 ワークロードの場合の推奨) のいずれかを選択します。

詳細: VM の詳細な環境設定を表示または変更するには、このボタンをクリックします。

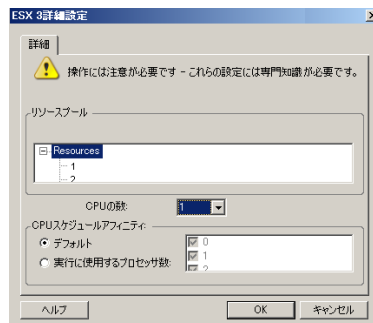


リソースプール: 必要に応じて、ターゲット VM をリソースプールに割り当てます。リソースプールが指定されない場合は、VM はルートリソースプールに割り当てられます。

CPU の数: ターゲット VM に割り当てる必要のある CPU の数を選択します。たとえば、シングルプロセッサのワークロードをマルチプロセッサの VM に、またはマルチプロセッサのワークロードをシングルプロセッサの VM に変換できます。

CPU スケジュールアフィニティ: どの ESX Server プロセッサで仮想マシンが実行できるかを表します (ご使用の ESX Server がマルチプロセッサシステムの場合)。必要なプロセッサを指定するか、[デフォルト] を選択します (推奨)。

詳細については、VMware のマニュアルを参照してください。



仮想マシンの構成 : Citrix XenServer

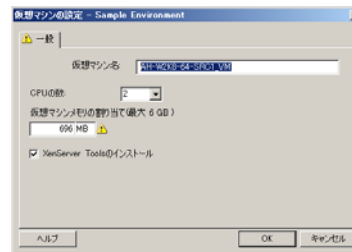
次に、Citrix XenServer に特有の環境設定オプションを示します。

仮想マシン名: 新しい仮想マシン用の表示名を指定します。

CPU の数: ターゲット VM に割り当てる CPU の数を選択します。たとえば、シングルプロセッサのワークロードをマルチプロセッサの VM に、またはマルチプロセッサのワークロードをシングルプロセッサの VM に変換できます。

仮想マシンメモリの割り当て: 仮想マシンに割り当てられる仮想 RAM の容量の値を指定します。

XenServer Tools のインストール: 変換プロセス中に XenServer Tools をインストールするには、このオプションを有効にします (推奨)。



Solaris のゾーンの構成

次に、Solaris に特有の環境設定オプションを示します。リソースプールの CPU 共有を制御する設定にアクセスするには、[詳細] をクリックします。

Solaris ゾーンの名前: ターゲットの Solaris のゾーンの名前を入力します。

Solaris ゾーンのパス: パスは、2 つの連続した値に基づいて決定されます。

ターゲットボリューム: このドロップダウンリストには、ターゲットのゾーンホストで検出されたボリュームが含まれています。ターゲットのゾーンに必要なボリュームを選択します。/usr、/sbin、/lib、/platform、および /var などの、システムの階層を使用しないでください。

パス: ターゲットのゾーンのパス名を入力します。

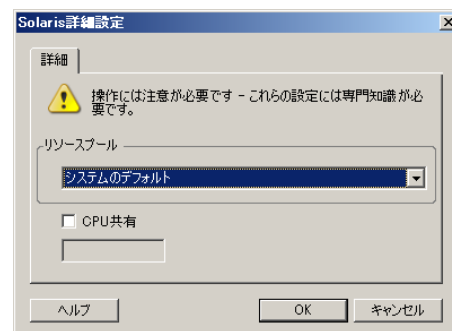
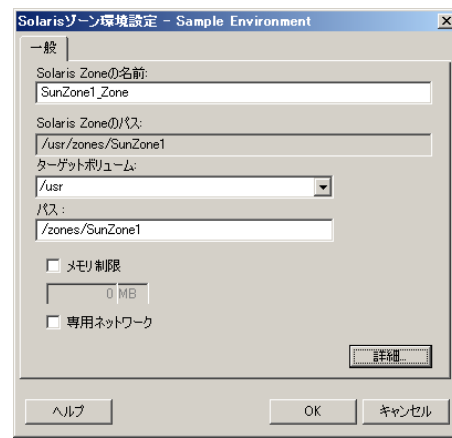
メモリの上限: ゲストのゾーンに割り当てる数または最大メモリを指定します。

排他ネットワーク このオプションが選択されると、ネットワークインターフェイスがゲストのゾーンによって、排他的に使用されます。このオプションが選択解除されると、NIC はゲストのゾーン、使用可能な場合は他のゾーン、およびホストによって共有されます。

詳細: クリックして、ゲストのゾーンに割り当てられた、リソースプールの割り当ておよび CPU 共有を制御するオプションにアクセスします。

リソースプール: このドロップダウンリストには、ターゲットのゾーンサーバで検出されたリソースプールが含まれています。ゲストのゾーンに必要なリソースプールを選択します。

CPU 共有: ゲストのゾーンに CPU 共有を割り当てるには、このオプションを選択します。対応するフィールドに必要な CPU 共有の数を指定します。



5.10 オペレーティングシステムのサービスとアプリケーションの処理

Portability Suite では、変換ジョブが Windows サービス (Microsoft SQL Server および Microsoft Exchange Server ソフトウェア)、Linux デーモン、Solaris サービス、および仮想化の拡張 (VMware Tools など) を処理するメカニズムが提供されます。さらに、Windows HAL またはカーネルファイルの交換が必要な場合は、変換ジョブ中にどれが更新用に選択されたかを表示できます。

- ◆ 103 ページのセクション 5.10.1 「サービスの起動モードの処理 (Windows ターゲット)」
- ◆ 104 ページのセクション 5.10.2 「ライブ転送中のサービスの処理 (Windows ソースワークロード)」

- ◆ 105 ページのセクション 5.10.3 「変換中に置換のために選択された Windows システムファイルの表示」
- ◆ 107 ページのセクション 5.10.4 「デーモンの実行レベルの処理 (Linux ターゲット)」
- ◆ 108 ページのセクション 5.10.5 「Solaris ターゲット上のサービスの処理」
- ◆ 108 ページのセクション 5.10.6 「仮想化拡張ソフトウェアの処理」

5.10.1 サービスの起動モードの処理 (Windows ターゲット)

選択した Windows サービスの起動モードを、変換の完了後に変更するジョブを設定できます。たとえば、仮想化されたワークロード上で特定の Windows サービスを実行する必要がない場合は、そのサービスのターゲット起動タイプを [無効] に変更するジョブを設定できます。

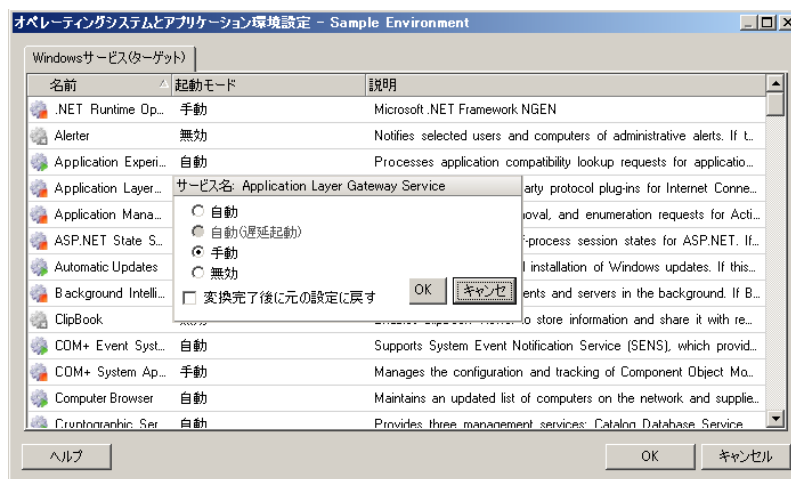
他のサービスの要求に応じてサービスを開始する必要がある場合は、必要なサービスの起動タイプを [手動] に設定します。

また、変換の完了後、サービスの元の起動タイプを復元するジョブも設定できます。たとえば、変換中はウイルススキャナを無効にし、変換の完了後はその起動タイプを復元する必要がある場合などがあります。

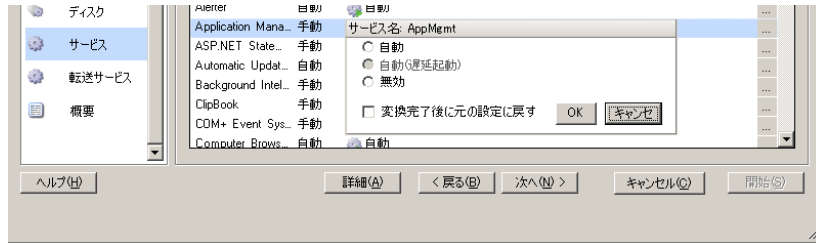
ヒント： 選択した Windows サービスの起動モードの初期設定を、Portability Suite Server のデフォルトオプションの中でグローバルに設定できます。『構成ガイド』の「[ターゲットサービスのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Windows サービスの変換後の起動モードを設定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[Windows Services (ターゲット)] をクリックし、[起動モード] 列内の項目をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合**：ウィザードのナビゲーションペインで、[サービス] をクリックし、[ターゲットモード] 列内の項目をクリックします。



5.10.2 ライブ転送中のサービスの処理 (Windows ソースワークロード)

VSS ファイルベースおよび VSS ブロックベースのライブ転送方法を使用するジョブに対して、Portability Suite では、選択したサービスを変換中は停止するメカニズムを提供しています。これにより、ソース上のデータが整合性を保った状態でキャプチャされます。

ソースワークロードで Microsoft SQL Server または Microsoft Exchange Server ソフトウェアを実行している場合は、これらのサーバのデータベースファイルを自動的にコピーするように変換ジョブを設定できます。データベースを含むボリュームを変換に含める必要がない場合は、これらのサービスを停止しないよう考慮してください。

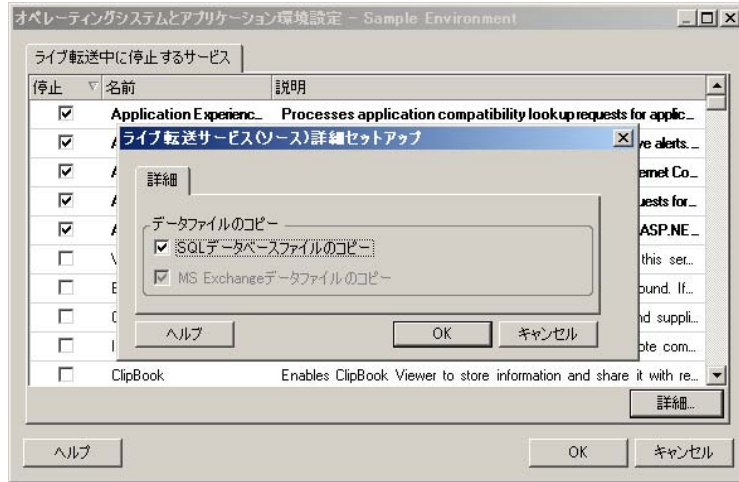
ソースワークロードに、ファイル転送プロセスが変更に対応するのを妨げる可能性が程度の I/O に負担をかけるアプリケーションサービスが含まれる場合、ライブ転送変換中は、それらのサービスを停止するよう考慮してください。

変換が完了すると、完了時にソースの電源をオフにするように変換ジョブを明示的に設定しない限り、ライブ転送変換中は停止されるように選択したサービスがソース上で自動的に再開されます。

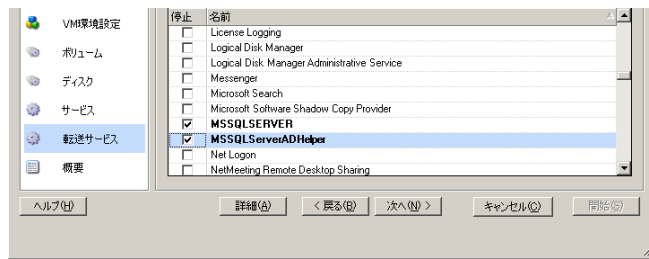
ヒント：選択した Windows サービスが、VSS ファイルベースまたは VSS ブロックベースのライブ転送中は停止するように、グローバルに設定できます。『構成ガイド』の「**ソースサービスのデフォルト**」を参照してください。

VSS 対応のライブ転送中に停止させる Windows サービスを指定する

- ◆ **詳細モードの場合:** [変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[ライブ転送サービス(ソース)] をクリックします。変換中に SQL Server および Exchange Server のデータベースファイルがコピーされるように指定するには、[詳細] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合:** ウィザードのナビゲーションペインで、[転送サービス] をクリックします。

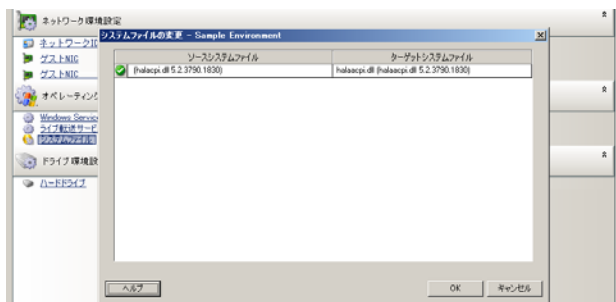


5.10.3 変換中に置換のために選択された Windows システムファイルの表示

ターゲットのインフラストラクチャと互換性のないシステムファイル (HAL またはカーネルファイル) を持つ Windows のワークロードを変換する場合、Portability Suite では、ライブラリに含まれる適切なファイルを使用して、ソースファイルのバックアップコピー (*.bak) がターゲットの同じシステムディレクトリに保存されます。

Portability Suite が置換が必要であると特定した HAL またはカーネルファイルを、次のように表示できます。

- ◆ **詳細モードの場合**：[変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[システムファイル] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合**：使用不可。

ダイアログボックスの下部に、次の警告が表示される場合があります。

ドライバキャッシュが空です 必要なファイルをソース Windows サーバのローカルドライバキャッシュ (..\Windows\Driver Cache) の中に配置する必要がある可能性があります。

ドライバキャッシュにより新しいバージョンが含まれています Portability Suite で、マトリックスに部分的には一致するものの、ドライバキャッシュには、Portability Suite が使用するよりも新しいバージョンのシステムファイルが1つ以上含まれています。

ファイル <filename> は古いバージョンで置き換えられます Portability Suite で、マトリックス内にシステムファイルに一致するものが見つかりませんでした。ソースマシンの元のシステムファイルとして検出されたものよりも古いバージョンで、システムファイルが置き換えられます。

ファイル <filename> は新しいバージョンで置き換えられます Portability Suite で、マトリックス内にシステムファイルに一致するものが見つかりませんでした。ソースマシンの元のシステムファイルとして検出されたものよりも新しいバージョンで、システムファイルが置き換えられます。

画面に警告が表示された場合は、[詳しいヘルプ] (警告が存在する場合にのみ利用可能) をクリックして詳細を調べます。

次のナレッジベースの記事も参照してください。

- ◆ **Q20815** (<http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20815>): FAQ: システムファイル情報画面を理解する
- ◆ **Q20817** (<http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20817>): 情報: ソースマシン上のドライバキャッシュを復元する方法

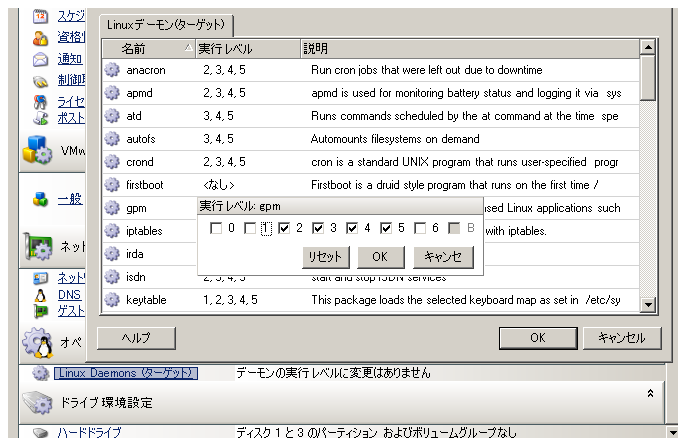
5.10.4 デーモンの実行レベルの処理 (Linux ターゲット)

選択した Linux デーモンの実行レベルを、変換の完了後に変更するジョブを設定できません。次の数値を使用します。

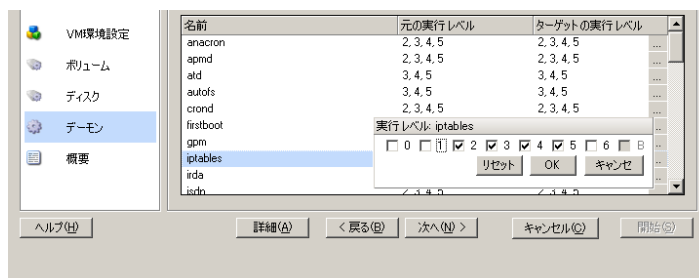
-
- 0 シャットダウン
 - 1 シングルユーザモード
 - 2 未使用 (ユーザ定義)
 - 3 フルマルチユーザモード (GUI なし)
 - 4 未使用 (ユーザ定義)
 - 5 表示マネージャを使用したフルマルチユーザモード (GUI)
 - 6 再起動
-

Windows デーモンの変換後の実行レベルを設定する方法:

- ◆ 詳細モードの場合: [変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[Linux Daemons (ターゲット)] をクリックし、[実行レベル] 列内の項目をクリックします。



- ◆ ウィザードモードの場合: ウィザードのナビゲーションペインで、[デーモン] をクリックし、[ターゲットの実行レベル] 列内の項目をクリックします。

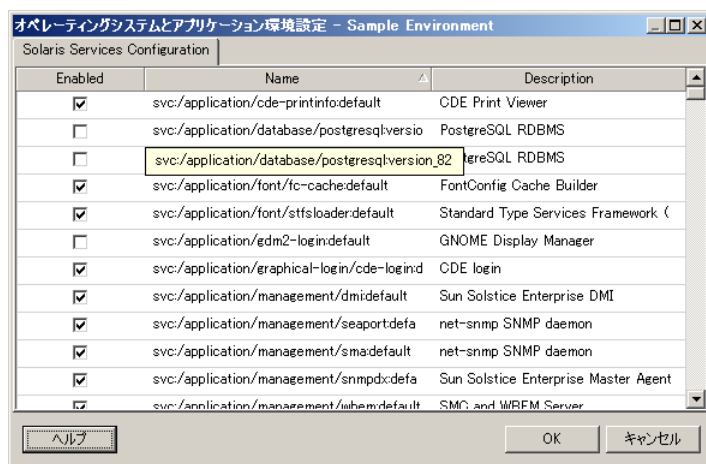


5.10.5 Solaris ターゲット上のサービスの処理

変換完了後に有効または無効にするシステム用の Solaris サービスを選択できます。

必要な Solaris サービスを『有効または無効にする

- ◆ 詳細モードの場合 [変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[Solaris サービス環境設定] をクリックしてから、[有効] カラムで必要なサービスを選択または選択解除します。



- ◆ ウィザードモード: 使用不可

5.10.6 仮想化拡張ソフトウェアの処理

V2X 変換では、Portability Suite によって VMware Tools などの仮想化拡張ソフトウェアを自動的にアンインストールするメカニズムが提供されます。

以前のバージョンの VMware Tools がインストールされている VMware プラットフォーム上のワークロードを変換する場合、Portability Suite によって古くなったソフトウェアが識別され、変換ジョブに VMware Tools クリーンアップ専用の手順が追加されます。

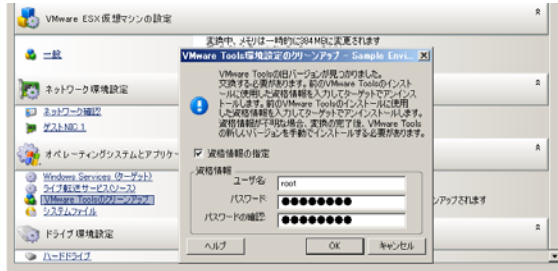
VMware Tools をアンインストールするには、管理者の資格情報を提供する必要があります。提供される資格情報は、VMware Tools のインストール時にログインしていた管理者レベルのユーザアカウントに一致する必要があります。

以前のバージョンがインストールされている場合、Portability Suite は、新しいバージョンの VMware Tools のインストールを続行します。

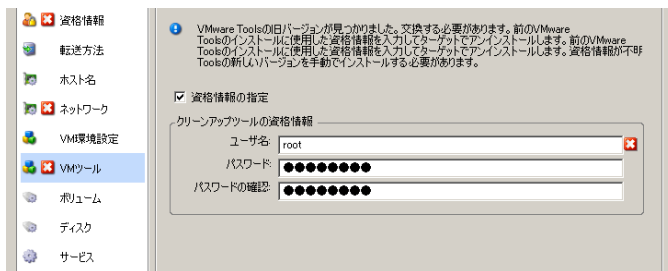
注: VMware Tools がインストールされている仮想マシンをダウングレードする場合、または仮想マシンを古いバージョンの VMware Tools を持つ別の VMware ターゲットに変換する場合、ターゲットの設定中に VMware Tools のインストールが失敗します。

変換中に VMware Tools を削除または置換するジョブを設定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [オペレーティングシステムとアプリケーション環境設定] セクションで、[VMware Tools のクリーンアップ] をクリックします。



- ◆ **ウィザードモードの場合：** ウィザードのナビゲーションペインで、[VM Tools] をクリックします。



ターゲットに応じて、Portability Suite では、VMware Tools の既存のインスタンスが識別され、それらを置換するか削除するかが適宜求められます。

- ◆ **VMware ターゲットではない場合：** ジョブの環境設定インターフェースによって、VMware Tools をアンインストールするように求められます。ソフトウェアをインストールするのに使用されたのと同じ管理者レベルの資格情報を提供します。資格情報が不明な場合、変換後、VMware Tools がターゲットマシンに残ります。
- ◆ **VMware ターゲットの場合：** ジョブの環境設定インターフェースによって、VMware Tools を置換するように求められます。古くなった VMware Tools のバージョンをインストールするのに使用されたのと同じ管理者レベルの資格情報を提供します。資格情報が不明な場合、変化の完了後、新しいバージョンの VMware Tools を手動でインストールします。

5.11 ワークロードのストレージメディアとボリュームの処理

Portability Suite では、ターゲットインフラストラクチャにおけるワークロードのボリュームおよびそれらの物理または仮想レイアウトを処理するように変換ジョブを設定するメカニズムが提供されます。

ワークロード仮想化 (X2V)

ワークロードを仮想化する場合、ターゲットに含めるボリュームを選択し、それらの空き領域のサイズを管理できます。また、ターゲットの仮想化プラットフォームのストレージメディアの環境設定や仮想ディスクの処理機能に従って、ソース上の物理ディスクの配置がピアの仮想マシンに伝播される方法も制御できます。

物理ハードウェアへのワークロード展開

ワークロードを物理ハードウェアに移行する場合、どのソースボリュームを含めサイズ調整するか、および、どのターゲットディスクを再パーティションし、データ入力するかを選択できます。

RAID ストレージ

Portability Suite は、RAID (Redundant Array of Independent Disks) ストレージをサポートし、これを他のストレージハードウェアのように処理します。関連するストレージコントローラドライバが存在する限り、Portability Suite は正常にマイグレーションを完了します。Portability Suite では、RAID のソフトウェア実装をサポートしません。

SAN ストレージ

Portability Suite では、SAN ストレージをサポートします。関連するホストバスアダプタ (HBA) のドライバが存在する限り、Portability Suite は正常にマイグレーションを完了します。Portability Suite では、SAN LUN を論理ボリュームを持つ他のディスクのように処理します。

NAS

Portability Suite では、ネットワーク接続ストレージ (NAS) システムをサポートします。Portability Suite では、NAS を論理ボリュームを持つ他のディスクのように処理します。

Windows ダイナミックディスク

Portability Suite では、ミラーリング、スパンニング、および RAID 5 の設定を含む、Windows ダイナミックディスクをサポートします。

Portability Suite では、ダイナミックディスクを他の論理ボリュームのように処理します。ダイナミックディスクを持つワークロードを変換している場合、ターゲットワークロード上のディスクは基本的なディスクとして作成されます。これを使用して、不要な、または旧形式のダイナミックディスク構成を削除できます。変換後は、ターゲット上で必要なディスクを基本ディスクからダイナミックディスクへアップグレードすることができます。

Linux の論理ボリューム

Portability Suite では、Linux ワークロードの論理ボリュームをサポートします。論理ボリュームマネージャ (LVM) が Linux ソース上にインストールされた場合、LVM1 および LVM2 機能を使用してターゲットワークロードのボリュームレイアウトおよび組織をよりよく管理できます。

ワークロードマイグレーションジョブを次のように設定できます。

- ◆ ターゲット上のソースの論理ボリュームを作成し直すか、またはソースが LVM を使用していない場合でも、ターゲット上に論理ボリュームを作成します。
- ◆ ソース上ではなくターゲット上にボリュームグループを作成するか、またはソース上に存在するターゲットからボリュームグループを削除します。
- ◆ ターゲット上のボリュームグループの名前を変更します。
- ◆ ボリュームを異なるボリュームグループやディスクに分散します。

注：Portability Suite では、次の機能をサポートしません。

- ◆ LVM スナップショットマイグレーション完了後に、ターゲット上に LVM スナップショットを作成できます。
- ◆ LVM ミラーリング変換完了後に、ターゲット上にミラーリング論理ボリュームを再度作成できます。

ストレージレイアウトおよびボリュームの環境設定は、ジョブの設定モード (詳細またはウィザード)、変換タイプ、ターゲットの仮想化プラットフォーム、およびソースのオペレーティングシステムに依存します。

- ◆ [111 ページのセクション 5.11.1 「ストレージレイアウトおよびボリュームの環境設定 \(ウィザードモード\)」](#)
- ◆ [113 ページのセクション 5.11.2 「ドライブ環境設定 \(詳細モード\)」](#)
- ◆ [119 ページのセクション 5.11.3 「ボリュームの環境設定 サーバ同期」](#)
- ◆ [120 ページのセクション 5.11.4 「X2I \(イメージング\) 変換におけるボリュームとイメージファイルの処理」](#)

5.11.1 ストレージレイアウトおよびボリュームの環境設定 (ウィザードモード)

- ◆ [111 ページの 「ストレージレイアウトの環境設定 : X2V \(ウィザードモード\)」](#)
- ◆ [112 ページの 「ボリュームの環境設定 : X2V、X2P \(ウィザードモード\)」](#)
- ◆ [112 ページの 「Linux ボリュームグループの環境設定 \(Wizard モード\)」](#)

ストレージレイアウトの環境設定 : X2V (ウィザードモード)

この [変換ウィザード] ページを使用して、ワークロード仮想化の操作中のディスクマッピングスキームを指定します。

ウィザードのナビゲーションペインで、[ディスク] をクリックします。

ストレージレイアウトセクション: 選択したオプションに応じて、ツリー形式で情報を表示します。

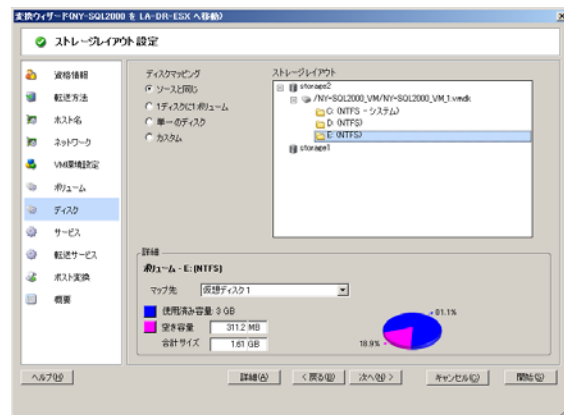
ディスクマッピングオプション: これらのオプションは、ターゲット上にソースディスクの配置が伝播される方法を制御します。目的の変換に最も適するオプションを選択します。仮想ディスクを追加するには、[カスタム] を選択し、[詳細] セクションで [仮想ディスクの追加] をクリックします。

詳細セクション: 選択した項目に当てはまる情報を [ストレージレイアウト] ツリーに表示します。

ディスクは、ドラッグアンドドロップで再配置できます。

仮想ディスクを追加するには、上側のセクションでストレージ項目を選択し、[詳細] セクションで [仮想ディスクの追加] をクリックします。

仮想ディスクのパスや名前、およびそれが割り当てられているデータストアを表示するには、仮想ディスクを選択します。



ボリュームの環境設定: X2V、X2P(ウィザードモード)

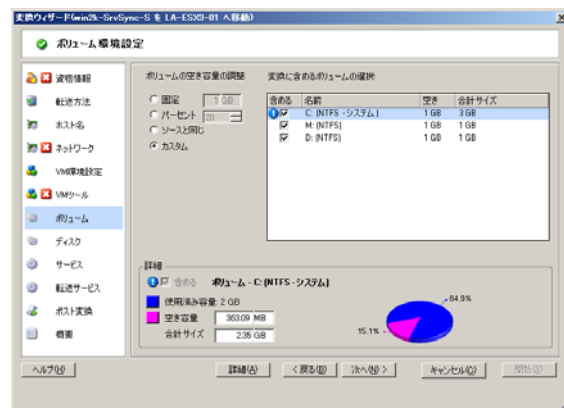
この [変換ウィザード] ページを使用して、変換に含めるボリュームを選択し、ターゲット上のボリュームサイズを調整します。

ウィザードのナビゲーションペインで、[ボリューム] をクリックします。

ボリュームの空きサイズの調整: オプションの1つを使用して、ボリュームの空きサイズを指定します。カスタム: [詳細] 領域に空き領域の値を入力できるようにします。

変換に含めるボリュームを選択してください: 変換対象のボリュームを選択します。システムボリュームまたはブートボリュームを選択する必要があります。

詳細: 選択したボリュームに関する情報を表示します。空き領域および合計サイズの値を変更できます。



Linux ボリュームグループの環境設定 (Wizard モード)

この [変換ウィザード] ページを使用して、LVM (Logical Volume Manager) ボリュームグループを管理します。このページは、ソースに LVM がインストールされている場合のみ表示されます。

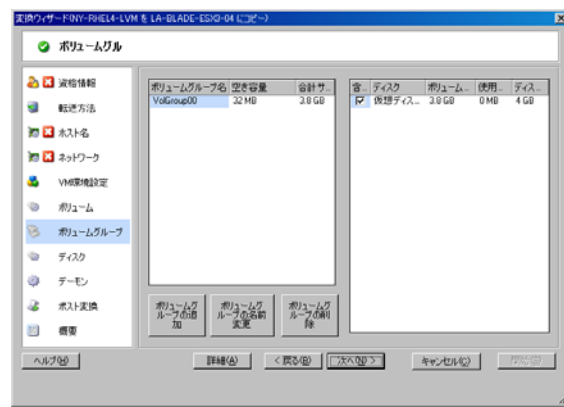
ウィザードのナビゲーションペインで、[ボリュームグループ] をクリックします。

ボリュームグループを追加、名前変更、または削除するには、該当するボタンをクリックします。

変換にボリュームグループを含めるには、右側のペインで該当するチェックボックスを選択します。

ボリュームグループにストレージを割り当てるには、[ボリュームグループの割り当て] 列をクリックします。

注：割り当てられていないボリュームグループは、変換前に削除されます。

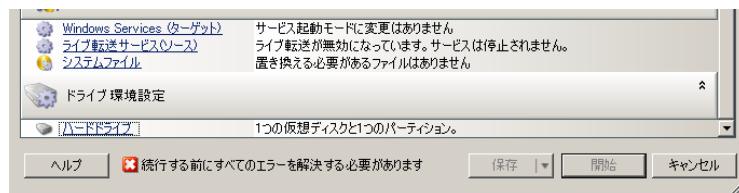


5.11.2 ドライブ環境設定 (詳細モード)

詳細モードを使用している場合、[ピアツーピア変換ジョブ] ウィンドウからウィザードの [ボリューム] 画面および [ディスク] 画面を統合する1つのインタフェースへアクセスできます。

詳細モードでドライブ環境設定オプションにアクセスする方法：

- ◆ [変換ジョブ] ウィンドウの [ドライブ環境設定] セクションで [ハードドライブ] をクリックします。



設定はターゲットシステムに応じて変化します。

- ◆ 113 ページの「Windows X2P のドライブ環境設定 (詳細モード)」
- ◆ 114 ページの「Linux X2P ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (詳細モード)」
- ◆ 116 ページの「ターゲット VM 特有 P2V/V2V のドライブ環境設定 (詳細モード)」
- ◆ 119 ページの「Solaris ゾーンボリュームの環境設定」

Windows X2P のドライブ環境設定 (詳細モード)

次の設定を使用し、変換中にコピーするボリュームを選択します。

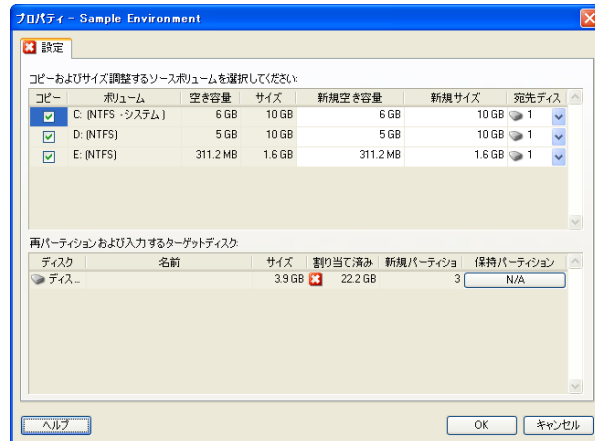
コピー: 変換中にコピーするボリュームを選択します。

新規空き容量: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望する空き領域のサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規サイズ]** が調整されます。

新規サイズ: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規空き容量]** が調整されます。

宛先ディスク: 物理ターゲットマシン上で、ボリュームがコピーされるハードドライブを選択します。

パーティションの保持: 変換中に既存のベンダパーティションをそのままの状態で保持するかを決定するには、このカラムをクリックします。パーティションが選択されないと、Portability Suite によってサーバからパーティションが永続的に削除されます。



Linux X2P ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (詳細モード)

次の設定を使用し、変換中にコピーおよびサイズ調整するボリュームとボリュームソース以外の領域を選択します。ソースに LVM がインストールされている場合のみ、**[ボリュームグループ]** タブを利用できます。

- ◆ 115 ページの「Linux X2P ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (設定タブ)」
- ◆ 115 ページの「Linux ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (ボリュームグループタブ)」

Linux X2P ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (設定タブ)

これらの設定を使用して、コピーするソースボリューム、再作成およびサイズ調整するボリュームソース以外の領域、および再パーティションと入力を行うターゲットディスクを選択します。

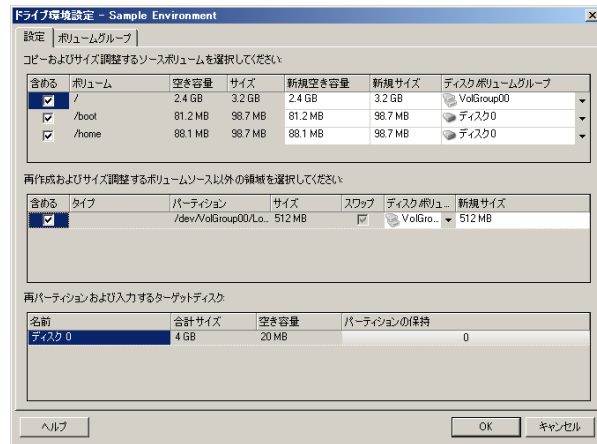
含める: 変換中にコピーまたは再作成およびサイズ調整するボリュームまたはボリュームソース以外の領域を選択します。

新規空き容量: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望する空き領域のサイズを入力します。Portability Suite では、自動的に [新規サイズ] が調整されます。

新規サイズ: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望するサイズを入力します。Portability Suite では、自動的に [新規空き容量] が調整されます。

ディスク/ボリュームグループ: 物理ターゲットマシン上で、ボリュームがコピーされるハードドライブまたはボリュームグループを選択します。

パーティションの保持: ディスクごとに、このカラム内の該当するセルをクリックし、変換中に保持する既存のベンダパーティションを選択します。パーティションが選択されないと、Portability Suite によってサーバからパーティションが永続的に削除されます。



Linux ドライブと LVM ボリュームの環境設定 (ボリュームグループタブ)

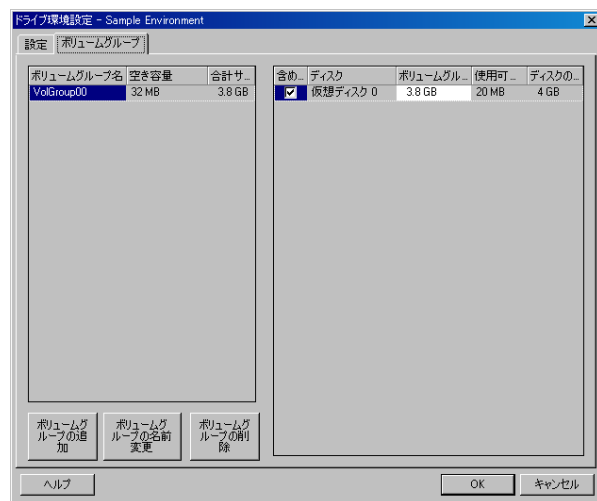
これらの設定を使用して、ボリュームグループを管理します。

ボリュームグループの追加: ソースマシンには存在しないボリュームグループをターゲットマシンに作成します。

ボリュームグループの名前変更: ソースからターゲットにコピーされるボリュームグループの名前を変更します。

ボリュームグループの削除: ターゲットマシンで作成されないように、ボリュームグループを削除します。ボリュームグループに割り当てられているボリュームは、[設定] タブを使用して他の場所に再割り当てできます (デフォルトでは、ボリュームはディスクに割り当てられています)。

ボリュームグループの割り当て: ディスク上の領域をボリュームグループに割り当てるには、ボリュームグループを選択し、それに含めるディスクを選択します。含まれるディスクごとに、ボリュームグループに割り当てられる領域の容量を指定します。



ターゲット VM 特有 P2V/V2V のドライブ環境設定 (詳細モード)

ピアツーピアの仮想化ジョブを詳細モードで設定する場合、ジョブ設定ウィンドウでは、ターゲットの仮想化プラットフォームに特有の設定にアクセスできます。

- ◆ 116 ページの「ドライブ環境設定 : Microsoft Virtual Server、VMware Server/GSX」
- ◆ 117 ページの「ドライブ環境設定 : VMware ESX 3」
- ◆ 118 ページの「ドライブ環境設定 : VMware ESX 2」

ドライブ環境設定 : Microsoft Virtual Server、VMware Server/GSX

次に、Microsoft Virtual Server および VMware Server (以前は GSX) に特有のドライブ環境設定を示します。

コピー: 変換中にコピーするボリュームを選択します。

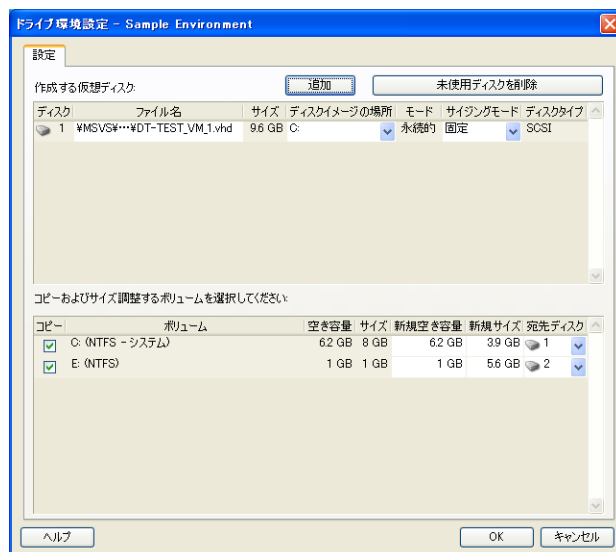
新規空き容量: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望する空き領域のサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に [新規サイズ] が調整されます。

新規サイズ: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に [新規空き容量] が調整されます。

注: オペレーティングシステムには、パーティションサイズに制限があります。たとえば、Windows NT 4 SP4 および P6 のターゲットは、7.8GB を超過することはできません。

宛先ディスク: 物理ターゲットサーバ上で、ボリュームがコピーされるハードドライブを選択します。

ディスクタイプ: ソースマシンが IDE を使用し、ターゲットが MSVS の場合、IDE が許可されます。



ドライブ環境設定 : VMware ESX 3

次に、VMware ESX 3 特有のドライブ環境設定を示します。

データストア: vmdk ファイルを配置する ESX 3.0 サーバ上のデータストアボリュームを選択します。

コピー: 変換中にコピーするボリュームを選択します。

新規空き容量: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望する空き領域のサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規サイズ]** が調整されます。

新規サイズ: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規空き容量]** が調整されます。

ディスク/ボリュームグループ: ディスク、または LVM が有効な場合はボリュームグループにボリュームを割り当てます。ボリュームは、ターゲットマシン上のこのディスクまたはボリュームグループにコピーされます。

作成: ターゲットマシン上に作成する必要のある非ボリュームディスクパーティションを選択します (たとえば、Linux のスワップパーティションなど)。

新規サイズ: 変換中に非ボリュームパーティションのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。



ドライブ環境設定 : VMware ESX 2

次に、VMware ESX 2 特有のドライブ環境設定を示します。

ディスクイメージの場所: vmdk ファイルを配置する ESX 2.0 サーバ上の場所を選択します。

コピー: マイグレーション時にコピーする必要なソースボリュームを選択します。

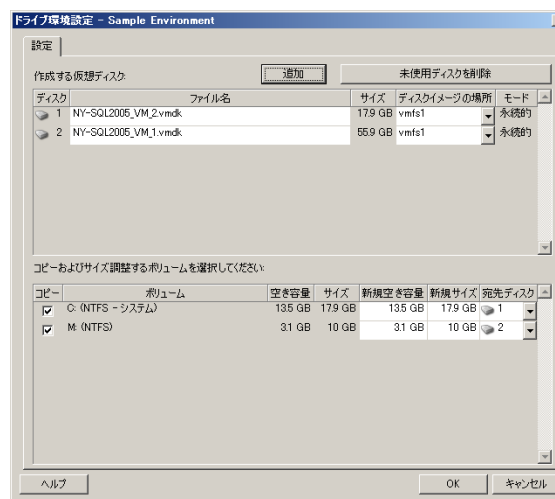
新規空き容量: マイグレーション中にボリュームのサイズを変更するには、ターゲット上の希望する空き領域のサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規サイズ]** が調整されます。

新規サイズ: 変換中にボリュームのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。Portability Suite では、自動的に **[新規空き容量]** が調整されます。

ディスク/ボリュームグループ: ディスク、または LVM が有効な場合はボリュームグループにボリュームを割り当てます。ボリュームは、ターゲットマシン上のこのディスクまたはボリュームグループにコピーされます。

作成: ターゲットマシン上に作成する必要がある非ボリュームディスクパーティションを選択します (たとえば、Linux のスワップパーティションなど)。

新規サイズ: 変換中に非ボリュームパーティションのサイズを変更するには、希望するサイズを指定します。



Solaris ゾーンボリュームの環境設定

Solaris のゾーンボリュームの環境設定オプションは、次のとおりです。

Solaris ゾーンファイルシステム：この領域のオプションは、ターゲット上の Zone File System (ZFS) の管理についての情報および管理の手段を提供します。[ゾーンFS 0] ファイルシステムでは、[データストア] および [場所] の値は変更できません。ゾーンに指定したゾーンパスに基づいて計算されます。[データストア] および [場所] の値を変更するには、ターゲットのゾーンの環境設定の設定 (102 ページの「Solaris のゾーンの構成」参照) で、[ターゲットボリューム] および [パス] の値を変更します。



新しいファイルシステムを追加するには、[追加] をクリックし、[データストア] カラムに必要なターゲットディレクトリを指定します。ターゲット上で不要になったファイルシステムを削除するには、[不要なFSの削除] をクリックします。

コピーするボリューム：この領域のオプションは、ソース上で検出されたボリュームに関する情報を提供し、ターゲットのゾーンで再生するボリュームを選択できるようにします。再生対象に選択したボリュームには、上部のリストからファイルシステムを指定できます。ルートボリュームは、選択解除できません (変換から除外)。これは常に選択され、[ゾーンFS 0] ファイルシステムに割り当てられています。

5.11.3 ボリュームの環境設定 サーバ同期

2 つの Windows または Linux ワークロードを、サーバ同期を使用して同期する場合、Portability Suite では、ソースボリュームとターゲット上の既存のボリューム間の必要なマッピングを指定できる機能が提供されます。55 ページの「サーバ同期を持つワークロードの同期」を参照してください。

サーバ同期ジョブで、ボリュームの環境設定オプションにアクセスする

- ◆ **詳細モードの場合** [変換ジョブ] ウィンドウの [ドライブ環境設定] セクションの下で、[ボリュームマッピング] (Windows マシンの場合) または [ドライブおよびボリューム] (Linux マシンの場合) をクリックします。
- ◆ **ウィザードモードの場合**：使用不可。

次の各項で、Windows および Linux ワークロードに特有のサーバ同期ボリュームの環境設定オプションに関する情報を示します。

- ◆ 120 ページの「サーバ同期ボリュームの環境設定 (Windows)」
- ◆ 120 ページの「サーバ同期ボリュームの環境設定 (Linux)」

サーバ同期ボリュームの環境設定 (Windows)

Windows ワークロードのサーバ同期ジョブは、ソースおよびターゲットの詳細なドライブおよびボリュームの情報を提供し、必要なマッピングを指定することができます。

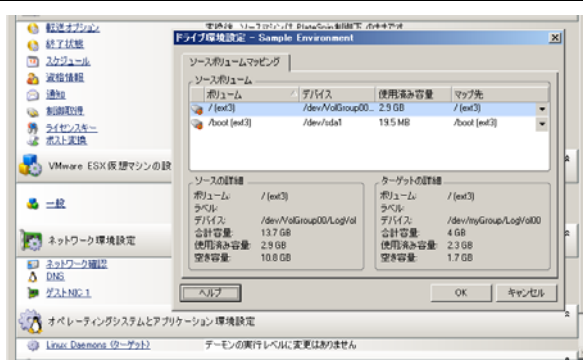
マップ先: ソース上の各ボリュームをターゲット上の既存のボリュームにマッピングします。



サーバ同期ボリュームの環境設定 (Linux)

Linux ワークロードのサーバ同期ジョブは、ソースおよびターゲットの詳細なマウントポイントおよびボリュームの情報を提供し、必要なマッピングを指定することができます。

マップ先: ソース上の各ボリュームをターゲット上の既存のボリュームにマッピングします。



5.11.4 X2I (イメージング) 変換におけるボリュームとイメージファイルの処理

柔軟なイメージをキャプチャしたり、柔軟なイメージへボリュームをインポートしたりする場合、Portability Suite では、必要なボリュームをイメージに含め、ボリュームデータマッピングとイメージ環境設定オプションを指定するメカニズムが提供されます。

- ◆ 121 ページの「ターゲットボリュームの環境設定: X2I (ウィザードモード)」
- ◆ 121 ページの「イメージ環境設定: X2I (ウィザードモード)」

ターゲットボリュームの環境設定 : X2I (ウィザードモード)

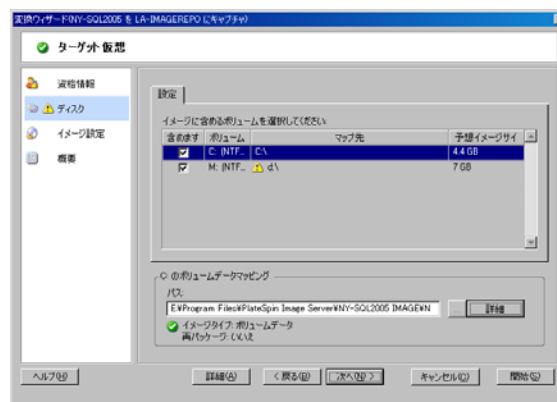
ウィザードモードでイメージのキャプチャジョブやイメージのインポートジョブを設定する場合は、このページを使用して、イメージに含めるボリュームを選択したり、既存のボリュームデータへのパスを指定したりします。

イメージに対して選択されたボリュームごとに、対応するイメージデータへのパスを指定します。

イメージのキャプチャジョブの場合、イメージパッケージファイル (*.pkg) へのパスを指定します。

イメージのインポートジョブの場合、ローボリュームデータを含むディレクトリへのパスを指定します。

イメージを再パッケージするには、[ボリュームデータマッピング] 領域の [詳細] をクリックし、[プロパティ] ダイアログボックスから [再パッケージ] を選択します。新規イメージファイルにパスを指定するか、デフォルトパスを使用します。



イメージ環境設定 : X2I (ウィザードモード)

ウィザードモードでイメージのキャプチャジョブやイメージのインポートジョブを設定する場合は、このページを使用して、イメージ名およびイメージが保存されるパスを指定します。

イメージ名: ワークロードイメージの名前を入力するか、デフォルトを承認します。

設定ファイルのパス: イメージの XML 設定ファイルへの完全なパスを入力するか、デフォルトを承認します。



5.12 変換ジョブに変換後のカスタムアクションを含める方法

ターゲットにカスタムアクションを実行するように変換ジョブを設定できます。あらかじめ、カスタムアクションとその従属ファイルを定義して保存する必要があります。41ページの「変換後のカスタムアクションの管理」を参照してください。

注: 変換後アクションは、ピアツーピアおよび使い捨てのサーバ同期変換でのみサポートされます。

変換ジョブを設定するには、必要なアクション、コマンドラインパラメータ (必要な場合)、および必要に応じてタイムアウトを選択します。また、ターゲットワークロードの有効な資格情報も提供する必要があります。ターゲットワークロードの資格情報が不明な場合は、ソースワークロードの資格情報を使用できます。

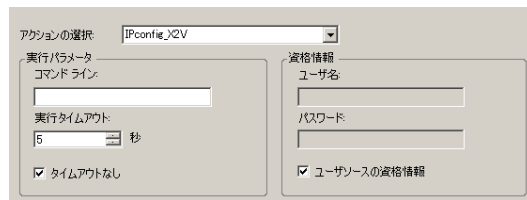
変換ジョブに変換後のカスタムアクションを指定する方法：

- ◆ **詳細モードの場合：** [変換ジョブ] ウィンドウの [仮想マシンの設定] セクションで、 [変換後] をクリックします。
- ◆ **ウィザードモードの場合：** ウィザードのナビゲーションペインで、 [変換後] をクリックします。

アクションの選択： ドロップダウンリストから、変換後のアクションのライブラリに以前に保存されたカスタムアクションを選択します。

実行パラメータ： アクション用に必要なコマンドラインパラメータがあれば指定します。必要に応じて、タイムアウトを指定します。

資格情報： ターゲットに関する管理者の資格情報を提供します。それらがソースの資格情報と同じ場合で保存されている場合は、 [ユーザソースの資格情報] を選択します。



よくある質問とその回答

A

このセクションには、よくある質問とその回答を記載します。

Portability Suite 製品のパフォーマンスとスケーラビリティの特徴は何ですか。

データ転送速度やスケーラビリティを含め、Portability Suite 製品の総合的なパフォーマンスは、ユーザ固有の環境でのさまざまな要因に左右されます。[24 ページの「パフォーマンスとスケーラビリティ」](#)を参照してください。

Portability Suite 製品の安全性とはどのようなものですか。

Portability Suite には、データを守り、セキュリティを向上させるために役立つ機能が用意されています。[23 ページの「セキュリティとプライバシー」](#)を参照してください。

Portability Suite は現在使用しているワークロードのデータストレージテクノロジーをサポートしていますか。

Portability Suite products では、Windows ダイナミックディスク、Linux 論理ボリューム、RAID (Redundant Array of Independent Disks)、システムおよび SAN (ストレージエリアネットワーク) システムなどを含む、多数のデータストレージおよび管理テクノロジーをサポートします。

カスタムの SSH ポートを使って、現在使用しているワークロード/ESX Server と通信できますか。

はい [32 ページの「ソースワークロードおよびターゲットの詳細の検出」](#)を参照してください。

複数の変換を同時に実行できますか。

はい [24 ページの「パフォーマンスとスケーラビリティ」](#)を参照してください。

Portability Suite のトラブルシューティング

このセクションでは、PlateSpin® Portability Suite のトラブルシューティングに関する一連のトピックについて説明します。

- ◆ 125 ページのセクション B.1 「調査」
- ◆ 127 ページのセクション B.2 「ピアツーピア変換」
- ◆ 129 ページのセクション B.3 「イメージの使用」
- ◆ 129 ページのセクション B.4 「診断」

B.1 調査

表 B-1 ディスカバリ操作に関連する一般的な問題と解決方法

問題またはメッセージ	解決方法
物理サーバの登録時に「アプリケーションがエラーを生成しました」	このエラーは、物理サーバが Portability Suite Server と通信できない場合に発生します。一般的には、登録プロセス時に不正な情報が入力されたことが原因です。登録プロセスを再起動するには、RegisterMachine.bat と入力します。Portability Suite Server に ping を行い、基本的な接続が可能かどうかを確認します。
物理サーバの登録プロセスが完了したが、Portability Suite Client に表示されない	完全な登録プロセスが完了するには、しばらく時間がかかります。物理サーバ上で 2 番目のコマンドプロンプトのウィンドウが閉じた後、Portability Suite Client 内の [更新] ボタンをクリックする前に数分お待ちください。
ソースサーバおよびターゲットサーバの検出時の問題	ナレッジベースの記事 Q20291 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20291) には、検出に関するトラブルシューティングのチェックリストが含まれています。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ Linux サーバおよび VMware ESX Server ◆ Windows ベースのソースサーバおよびターゲットサーバ また、この記事には、WMI 接続のトラブルシューティングおよび DCOM が有効かどうかのチェックのための指示も含まれています。
既存の Windows サーバのディスカバリ中に「パッケージ<...>が見つかりません」	IIS の環境設定およびネットワーク設定をチェックしてください。

問題またはメッセージ	解決方法
「\\{servername}\admin\$\{randomID}.xml」ファイルが見つかりません	<p data-bbox="711 262 1360 432">このエラーは、古いバージョンの WMI コアがインストールされている Windows NT 4.0 Server を検出しようとする際に発生する場合があります。また、Windows Server 2000 や 2003 でも発生する可能性があります。Windows NT 4.0 のサーバに関しては、サーバにインストールされている WMI のバージョンを、次に従って確認します。</p> <ol data-bbox="732 459 1360 800" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="732 459 1360 514">1. \\winnt\system32\wbem ディレクトリ内の wbemcore.dll ファイルを見つけます。 <li data-bbox="732 527 1360 581">2. [wbemcore.dll] を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。 <li data-bbox="732 594 1360 800">3. ファイルのバージョン番号をチェックします。バージョン番号が 1.50.xxxx でない場合は、WMI コアを V1.5 にアップグレードします。次の Microsoft Web サイト (http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?displaylang=en&FamilyID=C174CFB1-EF67-471D-9277-4C2B1014A31E) を参照してください。 <p data-bbox="711 827 1360 854">WMI v1.5 をインストールしたら、サーバを再検出します。</p> <p data-bbox="711 877 1360 1018">場合によっては、WMI 1.5 によって問題が解決します。WMI 1.5 を Windows NT 4.0 Server にインストールしてもなおこのディスクバリエーションが発生する場合、または Windows 2000/2003 Server を検出しようとする際にもなおこのエラーが発生する場合は、次の操作を行います。</p> <ol data-bbox="732 1045 1360 1423" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="732 1045 1360 1157">1. リモートマシン上の Admin\$ 共有にアクセスできることを確認し、次の手順を続行します。共有にアクセスできない場合は、共有を有効にし、再度ディスクバリエーションを行います。 <li data-bbox="732 1169 1360 1224">2. ..\PlateSpin Portability Suite Server\Web ディレクトリに移動します。 <li data-bbox="732 1236 1360 1348">3. テキストエディタを使用して、web.config ファイルを開きます。ファイルの終わり近くの <add key="MachineDiscoveryUsingService" value="false" /> エントリを見つけ、値を「true」に変更します。 <li data-bbox="732 1360 1360 1423">4. web.config ファイルを保存し、ディスクバリエーションを再試行します。
ジョブが回復可能なエラーの状態を示すとすぐにターゲットマシンが再起動する	<p data-bbox="711 1451 1360 1562">設定サービスの手順の間、Portability Suite Server が設定の対象マシンから通知を受け取る際に遅延が発生する可能性があります。ジョブは、この時、回復可能なエラーの状態を示します。</p> <p data-bbox="711 1589 1360 1675">ターゲットマシンの再起動は必要ありません。再起動をしたり、その他の介入を行ったりする前に、少なくとも 30 分待機します。</p>

関連するナレッジベースの記事：

ID	説明
Q20339 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20339)	エラーメッセージ: ディスカバリが「リクエストが HTTP ステータス 407 で失敗しました」メッセージで失敗する
Q20894 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20894)	エラーメッセージ: 回復可能なエラー: ディスカバリ中の ControllerConnectionBroken
Q20291 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20291)	エラーメッセージ: サーバ詳細ディスクバリの問題
Q20853 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20853)	FAQ: Portability Suite で MSVS が正規のサーバとして検出される
Q20732 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20732)	FAQ: ディスカバリ中にネットワークパスが見つからない
Q20868 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20868)	情報: Windows VM のディスクバリ後にファイルおよびディレクトリがクリーンアップされない

B.2 ピアツーピア変換

表 B-2 ピアツーピア変換に関連する一般的な問題と解決方法

問題またはメッセージ	解決方法
<p>ソースまたはターゲットの仮想 / 物理マシンの制御の取得中に次のいずれかのエラーが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ コントローラの開始の待機 (失敗) ◆ コントローラの接続が確立されていません ◆ コントローラの接続が解除されました ◆ ハートビートサービスを開始できません 	<p>これは、次の問題のいずれかを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ <i>[ジョブ環境設定]</i> > <i>[詳細]</i> にある一時 IP アドレスのネットワーク設定が行われていません。 ◆ ソース / ターゲットマシンが Portability Suite Server と通信する妨げとなっているネットワーク障害が発生した可能性があります。 ◆ ソース / ターゲットマシンが制御の取得事前実行環境に完全にブートできませんでした。 <p>障害の厳密な原因を診断するには、コントローラの開始が失敗した場合のシステムの状態をチェックします。ipconfig および ping などのコマンドを使用して、ネットワークの基本接続を確認できます。</p> <p>トラブルシューティングのチェックリストや、テクニカルサポートが必要な場合に要求される情報のリストについては、ナレッジベースの記事 Q20405 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20405) を参照してください。</p>
<p>ファイル転送が 1% でハングアップするか、進行が遅い</p>	<p>デフォルトでは、変換時にソースサーバでは自動のリンクタイプが使用されます。ソースサーバが 100/ 全二重に強制されているスイッチポートに接続している場合、変換の設定時に <i>[全二重の強制]</i> オプションを有効にする必要があります。このオプションが正しく設定されないと、ネットワークでデュプレックスの不一致が発生します。</p>

問題またはメッセージ	解決方法
適切なブートパーティションを決定できない	<p>既存のソースサーバを変換する場合、ブートボリュームは次のチェックをパスする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ベーシックディスク上にあること ◆ 175MB の空き領域があること ◆ プライマリパーティションであること ◆ システムボリュームに関して、これらのいずれかが満たされていない場合は、ソースサーバの制御を取得しようとする際に変換が失敗します。
ジョブが長期間 [スケジュール済み] の状態になったままで、その後、[回復可能なエラー](すべてのサブステップは [開始していません] の状態) になる	<p>Portability Suite Server 上の Novell® PlateSpin® Operations Framework コントローラに問題があります。Windows のサービスプラグインを使用して、コントローラが実行中であることを確認します。その他のトラブルシューティングの指示については、ナレッジベースの記事 Q20323 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20323) を参照してください。</p>
[オペレーティングシステムの設定] ステージにおけるトラブルシューティングの失敗 ([ターゲットマシンの設定] または [仮想マシンの再設定] 変換手順にも適用される)	<p>一般的に、設定手順中の障害は、ターゲットの物理または仮想マシンを設定しようとする際に発生したタイムアウトが発生したことを示しています。変換ジョブは、失敗したかのように見えますが、全体的なマイグレーションは恐らく成功しており、ターゲット上で実行中の設定サービスは、その操作を続行する可能性が高いです。</p> <p>ナレッジベースの記事 Q20327 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20327) には、詳細なトラブルシューティングのチェックリストが含まれており、テクニカルサポートが必要な場合に要求される情報がリストされています。</p>
ライブ転送が利用できない	<p>サーバ上にサポートされないファイルシステムまたはオペレーティングシステムのいずれかが存在します。NTFS のファイルシステムのみがサポートされます。FAT のパーティションが [ドライブ環境設定] ダイアログボックスで選択されている場合、オプションをクリアすると [ジョブ環境設定] で [ライブ転送] オプションが有効になります。詳細については、18 ページの「ライブ転送 (ファイルベース)」 を参照してください。</p>

関連するナレッジベースの記事：

ID	説明
Q20323 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20323)	エラーメッセージ：Portability Suite ジョブが「スケジュール済み」または「回復可能なエラー」の状態のままになる
Q20810 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20810)	情報：復元ジョブが停止する - 「ターゲットマシンの設定サービス ...」
Q20327 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20327)	情報：「オペレーティングシステムの設定」でトラブルシューティングが失敗する

ID	説明
Q20405 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20405)	情報：コントローラが開始するのを待機 - コントローラの接続が確立されていない / 壊れている
Q20341 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20341)	情報：検出、変換、およびファイル転送時に Portability Suite が使用するポートはどれか？

B.3 イメージの使用

表 B-3 柔軟なイメージに関連する一般的な問題と解決策

問題またはメッセージ	解決方法
Flexible Image Server 上で柔軟なイメージを表示できない	[サーバ] ビューがマシン別にサーバをグループ化するように設定されている場合は、検出されたイメージサーバは展開できません。イメージを表示するには、[サーバ] ビューを再設定し、サーバがマシンではなくドメイン別にグループ化されるようにします。
イメージのマウントに失敗しました。ボリュームに認識されたファイルシステムが含まれていません	このエラーメッセージは、Flexible Image Server を Windows 2003 にインストールしている間に、ボリュームデータをインポートまたは展開する場合に表示される場合があります。エラーを解決するには、Flexible Image Server 上で Windows のサービスプラグインを使用します。Portability Suite Operations Management Controller サービスのログオンプロパティを変更して、ローカルの管理者権限を持つアカウントを使用するようにします。この変更を行った後、サービスを再起動します。
Symantec Ghost Image からのボリュームデータを使用する場合、展開されたサーバ上でセキュリティ記述子を変更されています。	Ghost Image から抽出されたローボリュームデータを使用して柔軟なイメージを作成する場合、VM 上でセキュリティ記述子が保持されません。これは、抽出されたファイルが、元のソースサーバの権限を認識することなく、それらの親フォルダから権限を継承するためです。

関連するナレッジベースの記事：

ID	説明
Q20879 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20879)	エラーメッセージ：システムがファイルにアクセスできません
Q20865 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20865)	FAQ: Image Server はイメージを何個保存できるか？
Q20872 (http://support.platespin.com/kb2/article.aspx?id=20872)	操作手順：RIS (Remote Installation Services) を使用した物理的な制御の取得 CD の展開

B.4 診断

Portability Suite では、実行中または完了した任意のジョブに関する診断レポートを生成するツールが提供されます。

診断レポートを表示する

- 1 Portability Suite Client の [ジョブ] ビューで、必要なジョブを右クリックし、[診断の実行] を選択します。

ブラウザウィンドウに診断レポートが表示されます。このプロセスには、しばらく時間がかかります。

診断レポートには、次のいくつかの統計情報が一覧表示されます。

- ◆ ジョブに含まれるすべての操作。操作の XML による表示を確認するには、その操作をクリックします。
- ◆ 各操作の状態。
- ◆ 操作を実行したコントローラ。コントローラの XML による表示を確認するには、そのコントローラをクリックするか、[ログ] をクリックしてそのイベントログを表示します。

さらに、レポートには次に対するリンクが含まれています。

- ◆ ソースマシン、元のターゲットマシン、およびターゲット VM ホストの XML による表示。
- ◆ さまざまなログやレポート、およびジョブのルート操作。

診断レポートは、レポートに含まれる次の手順に従って、Novell® PlateSpin® のテクニカルサポートに直接送信できます。

テーブルの参照

C

このセクションでは、PlateSpin® Portability Suite version 8.1 (PlateSpin® Migrate および PlateSpin® Protect 製品) に付属のマニュアル全体を通して使用されている重要な表へのリンクのリストを提供します。

テーブル	出版物
Portability Suite の役割および権限の詳細	Portability Suite 構成ガイド
検出操作のためのネットワーク通信の前提条件	Portability Suite 構成ガイド
ワークロードのマイグレーションおよび保護の操作に関するネットワーク通信の前提条件	Portability Suite 構成ガイド
13 ページの ¶ 1-2§ 「Portability Suite のワークロード変換タスク」	Portability Suite ユーザガイド
14 ページの ¶ 1-3§ 「サポートされる Microsoft Windows のワークロード」	Portability Suite ユーザガイド
15 ページの ¶ 1-4§ 「サポートされる Linux のワークロード」	Portability Suite ユーザガイド
16 ページの ¶ 1-5§ 「サポートされるターゲット仮想化プラットフォーム」	Portability Suite ユーザガイド
22 ページの ¶ 1-7§ 「デフォルトの変換後終了状態」	Portability Suite ユーザガイド
30 ページの ¶ 2-1§ 「サーバビュー内のマシン特有のアイコン」	Portability Suite ユーザガイド
36 ページの ¶ 2-2§ 「ターゲット物理マシンに対する制御の取得 ISO イメージ」	Portability Suite ユーザガイド

用語集

自動ディスクバリ

を参照してください[ネットワーク検出](#)。

ブロックベースの転送コンポーネント

Portability Suite のソフトウェアコンポーネントで、ソースワークロードにダイナミックにインストールされ、ブロックレベルでボリュームデータ転送を促進します。[VSS ブロックベース転送コンポーネントとの対照](#)で、[ファイルベースの転送コンポーネント](#)も参照してください。

イメージのキャプチャ

ワークロードのイメージを[柔軟なイメージ](#)形式でキャプチャする、Portability Suite のジョブです。増分変更を更新するためにオプションで同期スケジュールを使用できます。[イメージの展開](#)も参照してください。

コントローラ

[OFX コントローラ](#) を参照してください。

変換

ターゲットのインフラストラクチャまたは事業の目的 (ワークロード - ハードウェア分離、仮想化、またはボリューム同期) を問わない、ワークロードの移植容易性の操作。製品付属品、ユーザインタフェース、エラーメッセージ、およびログにわたって、交換可能に使われる用語 [マイグレーション](#) の使用。

コピー

物理マシンまたは仮想マシン上に新しいネットワーク ID でワークロードの複製を作成する、Portability Suite のピアツーピアのマイグレーションジョブです。[移動](#)と比較してください。

イメージの展開

柔軟なイメージを物理ハードウェアまたは仮想マシン上でブート可能なワークロードに変換する Portability Suite のジョブです。[イメージのキャプチャ](#) も参照してください。

検出

[検出の詳細](#) を参照してください。

検出の詳細

マイグレーションまたは保護の操作の準備として、サポートされるワークロードまたはターゲットマシンの詳細をインベントリする Portability Suite のジョブです。[ネットワーク検出](#)と比較してください。

ファイルベースの転送コンポーネント

Portability Suite のソフトウェアコンポーネントで、ソースワークロードにダイナミックにインストールされ、ファイルレベルでボリュームデータ転送を促進します。[ブロックベースの転送コンポーネント](#)、[VSS ブロックベース転送コンポーネント](#)も参照してください。

柔軟なイメージ

物理マシンおよび仮想化プラットフォームとともに、Portability Suite の 3 つの基本的なワークロードインフラストラクチャのうちの 1 つです。特定のポイントインタイムでキャプチャされた、物理または仮想マシンの状態の静的な保存されたコピー (ボリュームデータおよびワークロードのハードウェアプロファイル、オペレーティングシステム、およびネットワーク ID の環境設定の詳細を含む)。柔軟なイメージをブート可能にするには、それを物理ハードウェアまたは仮想化プラットフォーム上のワークロードに変換します。[イメージのキャプチャ](#)、[イメージの展開](#)、および[イメージのインポート](#)も参照してください。

Flexible Image Server

Flexible Image Server ソフトウェアをインストールしたマシンのことです。[柔軟なイメージ](#)を参照してください。

I2P

イメージから物理へワークロードの移植容易性の操作。この場合、ソースはワークロードの柔軟なイメージであり、ターゲットは物理ハードウェア上のブート可能なワークロードです。

I2V

イメージから仮想へワークロードの移植容易性の操作。この場合、ソースはワークロードの柔軟なイメージであり、ターゲットは仮想化プラットフォーム上のブート可能なワークロードです。

I2X

イメージからすべてへワークロードの移植容易性の操作に関連し、この場合、ソースはワークロードの柔軟なイメージであり、ターゲットは物理ハードウェア上または仮想化プラットフォーム上のいずれかのブート可能なワークロードです。

イメージ

[柔軟なイメージ](#) を参照してください。

イメージサーバ

[Flexible Image Server](#) を参照してください。

イメージのインポート

ローボリュームデータまたはサードパーティ製のボリュームアーカイブを使用して柔軟なイメージを作成する Portability Suite のジョブです。

増分

ワークロード保護ジョブにおける、対応するワークロードまたはイメージレプリカの更新のために Portability Suite によってキャプチャされる、モニタ対象のワークロードのインベントリ済みボリュームに対する変更のことです。[保護](#) を参照してください。

ジョブ

ワークロードのポータビリティ、保護、ディスカバリ、削除、または関連操作の基本的なパラメータの集合体で、Portability Suite Client 内で定義、保存、スケジュール、実行、およびモニタを行います。

移行

[PlateSpin Migrate](#) を参照してください。

マイグレーション

ピアツーピアのワークロードの移植容易性の操作。これにより、物理または仮想ワークロードがコピーされるか、または別の物理または仮想インフラストラクチャに移動します。

移動

ワークロードを物理マシンまたは仮想マシンへ移動する Portability Suite によるピアツーピアのワークロードマイグレーションタスクです。コピーと比較してください。

ネットワーク検出

標準の Windows ネットワーク参照機能に基づく Portability Suite の機能で、Portability Suite Client の [サーバ] ビューに隣にある Windows マシン名を表示します。検出の詳細と比較してください。

OFX コントローラ

Operations Framework Controller ソースおよびターゲットマシンが、Portability Suite Server との通信やお互い同士で通信できるように、Portability Suite によってそれらのマシンにインストールされるソフトウェアコンポーネントです。

P2I

物理からイメージへワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは物理マシンであり、ターゲットはワークロードの柔軟なイメージです。

P2P

物理から物理へピアツーピアのワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは物理マシンであり、ターゲットは別のハードウェア上の別の物理マシンです。

P2V

物理から仮想へピアツーピアのワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは物理マシンであり、ターゲットは仮想マシンです。P2V または V2V 移植容易性は、ロードの保護にとって不可欠な部分であり、前提条件です。

P2X

物理からすべてへワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソース物理マシンであり、ターゲットは別の物理マシン (P2P マイグレーション)、仮想マシン (P2V マイグレーションまたは保護)、または柔軟なイメージ (P2I 変換) です。

ピアツーピア

ワークロードの移植容易性または保護の操作で、この場合、ソースとターゲットの両方がブート可能なワークロードであり、物理または仮想のいずれかです。マシンであり、ターゲットはワークロードの柔軟なイメージです (操作とは反対に、ここでは、ソースかターゲットのいずれかが柔軟なイメージである)。P2P、P2V、V2V、および V2P はすべてピアツーピア移植容易性の操作で、I2X および X2 はそうではありません。

PlateSpin Migrate

2 つの Portability Suite 製品のうちの 1 つ。ワークロードマイグレーションの操作用のパッケージです。PlateSpin Protect も参照してください。

PlateSpin Protect

2 つの Portability Suite 製品のうちの 1 つ。ワークロード保護の操作用のパッケージです。PlateSpin Migrate も参照してください。

Portability Suite Server

両方の Portability Suite 製品 (PlateSpin® Migrate および PlateSpin® Protect) の基礎となるリモートのランタイム実行エンジン

Portability Suite Client

Portability Suite Server と連携するために使用するクライアントアプリケーション。ソースワークロードおよびターゲットの検出、ジョブの設定、実行、および監視、ライセンスキーの管理、およびサーバのデフォルト動作の設定を行います。

Portability Suite Network

常に使用する検出されたワークロードおよびターゲットマシンの名前を付けられた集合です。すべての検出ジョブのパラメータです。

Portability Suite Server

両方の Portability Suite 製品 (PlateSpin® Migrate および PlateSpin® Protect) の基礎となるリモートのランタイム実行エンジン

同期の準備

ステップイン Windows ワークロード同期操作。ターゲットは同期ジョブ内の仮想マシンサーバです。ターゲット仮想マシンの環境設定と事前ブートを自動化します。それは、Portability Suite Client のユーザインタフェースによって、有効なサーバ同期ターゲットとして登録されます。[サーバ同期](#)を参照してください。

protect

[PlateSpin Protect](#) を参照してください。

保護

ソースワークロードの VM レプリカを作成し、定期的にレプリカの状態をソースワークロードの状態に同期させる、ワークロードの移植容易性の操作です。

ローボリュームデータ

柔軟なイメージに適するボリュームを構成するファイルのディレクトリです。

役割

3 種類ある Windows ローカルユーザグループの中の 1 つで、Portability Suite ユーザが、Portability Suite 管理者、Portability Suite パワーユーザおよび Portability Suite オペレータという特定のアクセス権限を使用して定義されます。

リストアの実行

Portability Suite の操作で、保護されているワークロードのターゲット仮想マシンをオンラインにします。

半自動の仮想化

ワークロードのターゲットインフラストラクチャが、Portability Suite によっては物理マシンとして扱われるような仮想マシンである、ワークロード仮想化の操作です。Portability Suite によって、ワークロードの移植容易性の自動化が制限されているようなターゲット仮想化プラットフォームに適用されます。[X2P](#) と比較してください。

サーバ

[Portability Suite Server](#) を参照してください。

サーバ同期

物理ワークロードまたは仮想ワークロード (Windows または Linux) の状態を同じ OS プロファイルの別の物理ワークロードまたは仮想ワークロードの状態に同期するワークロードの移植容易性操作保護ジョブ (Windows のみ) では、ボリュームデータ全体を転送することによるソースワークロードの初期のレプリケーションが困難であったり、非実用的であったり、または不可能である場合に、中間段階として機能できます。

ソース

ワークロードの移植容易性および保護の基礎、または基礎となるインフラストラクチャ (物理マシン、仮想マシン、または Flexible Image など) です。ターゲットと比較してください。

制御の取得

ワークロードの移植容易性の操作中に、通信とデータ転送を促進するために、Windows または Linux ワークロードがブートされその結果生成される一時的な実行前の環境。Windows のワークロードには、Portability Suite によって Microsoft WinPE が使用され、Linux のワークロードには、Ramdisk が使用されます。

ターゲット

ワークロードの移植容易性および保護の結果、または結果となるインフラストラクチャ (物理マシン、仮想マシン、または Flexible Image など) です。ソースと比較してください。

リストアのテスト

テストの目的で、ターゲット VM ホスト上の保護されたワークロードの仮想マシンのスナップショットを作成したり、電源をオンにしたり、設定したりする Portability Suite のジョブです。関連項目 [リストアの実行](#)。

ディスクバリの破棄

ワークロードに関する情報をそのインベントリから破棄し、インストールされているコントローラを削除する Portability Suite のジョブです。関連項目 [検出の詳細](#)。

V2I

仮想からイメージへワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは仮想マシンであり、ターゲットはワークロードの柔軟なイメージです。

V2P

仮想から物理へピアツーピアのワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは仮想マシンであり、ターゲットは物理マシンです。

V2V

仮想から仮想へワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースとターゲットは同じまたは異なる仮想化プラットフォームです。

V2X

仮想からすべてへワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ソースは仮想マシンであり、ターゲットは別の仮想マシンか、物理マシン、またはワークロードの柔軟なイメージです。

VSS ブロックベース転送コンポーネント

Portability Suite のソフトウェアコンポーネントです。Windows ソースマシン上にダイナミックにインストールされ、Microsoft Volume Snapshot Service (VSS) を使用したブロックレベルのボリュームデータの転送を容易にします。**ブロックベースの転送コンポーネント**、**ファイルベースの転送コンポーネント** も参照してください。

ワークロード

サポートされているオペレーティングシステム、およびそのアプリケーションとデータを伴う物理または仮想インスタンスのことです。

X2I

すべてからイメージへワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ターゲットはワークロードの柔軟なイメージであり、ソースは仮想マシンです。

X2P

すべてから物理へワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ターゲットは物理マシンであり、ソースは別の物理マシン、仮想マシン、またはワークロードの柔軟なイメージです。

X2V

すべてから仮想へワークロードの移植容易性の操作で、この場合、ターゲットは仮想マシンであり、ソースは別の仮想マシン、物理マシン、またはワークロードの柔軟なイメージです。